OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	ウェブスケール・ディスカバリー（WSD）利用者の利用状況と認識 ： インタビュー調査による探索的研究
Author(s)	久保山, 健
Citation	同志社大学, 2021, 修士論文
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/83311
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

ウェブスケール・ディスカバリー（WSD）利用者の利用状況と認識
―インタビュー調査による探索的研究

同志社大学大学院総合政策科学研究科

総合政策科学専攻　博士課程（前期課程）

2016 年度　0115 番　氏名：[久保山 健]

概要

ディスカバリーサービスとも呼ばれ、多様な学術情報を一括して検索できるツールであるウェブスケール・ディスカバリー（WSD）が登場して 10 年ほど経過した。海外では、WSD の導入も広がり、多様な面から分析や報告が行われている。一方、国内では、WSD の導入率も低く、OPAC に対して位置づけも小さい様子が見られる。想定する利用者層や利用シーンについても一定のコンセンサスもない状況である。

そこで本論文は、WSD の利用経験者をインタビュー調査し、WSD の利用要因や利用状況、WSD に対する認識はどのようなものかを明らかにすることを目的とする。

まず第 1 章では、WSD の北米や国内での広がりを整理し、WSD の特徴などを概観する。併せて、国内大学での導入率が、2019 年 3 月時点で 19%に留まることを確認する。

第 2 章では、WSD を導入している国内大学でも、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC である傾向があり、いわば「OPAC 主義」と言える状況を概観する。一方で、海外のトップ大学では WSD を最初の検索オプションとする傾向があることも概観する。そして、WSD に関する検討課題や先行研究を整理する。

第 3 章では、インタビューによる調査方法や、インタビュー項目を述べる。併せて、インタビュー項目を精査するために行った事前調査について説明する。

第 4 章では、インタビューの結果を整理する。本調査の対象者は WSD を「補完的に」「幅広く」利用する傾向があり、「幅広さ」を好む傾向があった。「検索結果が多すぎて使いにくい」といったデメリットとされることは、大きな問題として捉えておらず、許容する傾向があった。WSD が「学部生向け・初学者向け」と言われることについては、6 年制学部卒業者および大学院生以上の対象者から否定的な発話が見られ、その考えに疑問を投げかける結果となった。

第 5 章では、その結果を受けて、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC である大学では、WSD がサブツールとして「補完的に」「幅広く」利用される傾向があり、WSD 利用者はデメリットとされることについての認識が相対的に低いこと、そして、利用対象が学部低年次生向けという考え方には疑問があること、大学院生・教員にも有用なツールであることを指摘する。併せて、WSD の利用者向け名称は重要であることも指摘する。

目次

序章　はじめに 1
第 1 章　WSD の背景と現状 3
　第 1 節　北米や国内での広がり 3
　第 2 節　WSD の定義や特徴、代表的な製品 4
　第 3 節　WSD の国内導入状況 5
第 2 章　WSD の導入事情と検討課題 8
　第 1 節　国内で見られる「OPAC 主義」 8
　　第 1 項　国内「主要大学」での導入率と「OPAC 主義」 8
　　第 2 項　国内早期導入大学にも見られる「OPAC 主義」 13
　　第 3 項　海外での導入事情 15
　第 2 節　検討課題と先行研究 16
　　第 1 項　北米での OPAC 調査 16
　　第 2 項　国内での機能紹介、製品の紹介 17
　　第 3 項　想定される利用者層・利用シーン 17
　　第 4 項　既存 OPAC との関係 19
　　第 5 項　利用形態の検証 20
　　第 6 項　その他 24
　第 3 節　検討課題のまとめ 28
第 3 章　WSD 利用者へのインタビュー調査 30
　第 1 節　調査手法 30
　第 2 節　本研究での調査方法 32
　　第 1 項　対象 32
　　第 2 項　募集方法 34
　　第 3 項　調査期間や場所など 35
　第 3 節　インタビュー項目精査のための事前調査 36
　　第 1 項　同志社大学での授業レポート 36
　　第 2 項　インタビュー予備調査 38
　第 4 節　インタビュー項目 39

第 4 章　インタビューの結果 48
　第 1 節　対象者の概要 48
　第 2 節　インタビューデータの分析 50
　　第 1 項　インタビューシートの項目から 52
　　第 2 項　その他、見出された概念 108
第 5 章　考察と課題 119
　第 1 節　サブツールとして「補完的に」「幅広く」利用される傾向 119
　第 2 節　デメリット認識の相対的低さ 120
　第 3 節　大学院生・教員にも有用 121
　第 4 節　利用者向け名称は分かりやすく 124
　第 5 節　本研究の限界と今後の課題 126
終章　おわりに 129
【参考文献】 1

序章　はじめに

学術情報のデジタル化やWeb技術の進化も背景に、図書館の蔵書検索システム（OPAC）改善のため、北米等では2008年頃までにNext Generation Catalog（NGC）の導入や検討の広がりが進んでいた。国内では、2008年頃から「次世代OPAC」という名前で、機能の紹介や、導入に向けての課題などが議論されてきた。その後、名称は「ディスカバリ・インターフェース」や「ディスカバリーサービス」などと呼ばれつつ、自館蔵書に限らず、雑誌論文を含めた多様な学術情報を一括して検索できるツールとして議論されてきた。2010年に国内で初めての導入大学が現れた。

北米等では、この「ディスカバリーサービス」の導入大学は増加し、図書館Webサイトの最初の検索オプションに使用されることも一般化してきた。しかし、国内では、導入する大学の数は増えず、導入した大学でも最初の検索オプションがOPACである大学が多数派である状況が続いている。

なお、用語については、本研究では、その機能をより本質的に示していると思われるため、飯野（2016）を参考に、「ウェブスケール・ディスカバリー」を用いることとする。但し、本稿では「WSD」と表記することとする。

このWSDの想定される利用者層、利用シーンについて、一定のコンセンサスもない状況が続いている。当初は、文献データベースの使い分けを意識しなくても済むため「学部生向け・初学者向け」と言われることが多かった。近年は、大学院生や教員にも適しているとの報告や、大学院生や教員のニーズを窺わせる報告も現れているが、コンセンサスには遠い状況である。

また、提供側の大学図書館の関係者からは、OPACのような検索ロジックの明確なデータベースに慣れているせいか、膨大な検索結果を表示するWSDに対して、「検索結果が多すぎて使いにくい」といった否定的な声もよく聞かれてきた。

このような状況では、利用者への案内や利用指導方法、図書館Webサイトでの見せ方をどうするのが適切なのか検討することも困難である。そこで本研究では、WSD 利用者をインタビュー調査し、WSDの利用要因や利用状況、WSDに対する認識はどのようなものかを明らかにすることを目的とする。

それによって、WSD に対する利用者の認識が非常に漠然としている国内の状況で、利用される場面や利用者への案内方法について、基礎的なデータを提供できる。

本稿は、以下のように構成する。

第 1 章では、WSD の北米や国内での広がりを整理し、WSD の特徴などを概観する。

第 2 章では、WSD を導入している国内大学でも、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC である傾向があり、いわば「OPAC 主義」と言える状況を概観する。そして、WSD に関する検討課題や先行研究を整理する。

第 3 章では、インタビューによる調査方法や、インタビュー項目を述べる。

第 4 章では、インタビューの結果を整理する。本調査の対象者は WSD を「補完的に」「幅広く」利用する傾向があり、「幅広さ」を好む傾向があったことや、WSD のデメリットとされることは、大きな問題として捉えていなかったことを述べる。併せて、WSD が「学部生向け・初学者向け」と言われることについては、6 年制学部卒業者および大学院生以上の対象者から否定的な発話があったことを述べる。

第 5 章では、その結果を受けて、WSD の利用状況や、利用者の認識、WSD の利用対象などを考察する。

第１章　WSD の背景と現状

第１節　北米や国内での広がり

2008 年頃までに、北米等で Next Generation Catalog の導入や検討する動きが広がっていた。工藤・片岡（2008）は、2008 年の時点で世界各国での導入が進んでいると紹介している。Yang and Hofmann（2011）は、2011 年の時点で、Next Generation Catalog は過去 5 年の間、議論の中心であり、コンセプトとしてはライブラリアンにとって、もう新しいトピックではないとしている。

一方国内では、2008 年頃から、工藤・片岡（2008）、久保山（2008）、宇陀（2009）、渡邊（2009）などにより、「次世代 OPAC」という名前で、使いやすいインターフェース、電子資料も含めた検索システムについて、機能の紹介や、導入に向けての課題などが議論されてきた。

長橋（2008 : 285, 288）は、ウェブデザインの改善や検索ボックスの一本化について、「次世代 OPAC にその解決策の 1 つがあるようだ」と指摘し、ユーザビリティの点で「図書館ウェブサイトの救世主になるという期待」を述べている。

2009 年に開催された、第 36 回生物医学図書館員研究会では、「次世代 OPAC」がテーマとなっており、次世代 OPAC の機能紹介や、いくつかの製品の紹介がされている（天野 2009）。

2010 年頃からは、絞り込みのためのファセットや、適合度順による表示など、インターフェースのことだけでなく、電子ジャーナルに収録される個別の論文、電子ブックなど、図書館の所蔵資料以外を検索・発見する機能などについて議論が展開した（片岡 2010；兵藤ほか 2010；片岡ほか 2011）。主に Web 技術面から次世代 OPAC に言及する原田（2011）の論考もある。

さらに、片岡（2010 : 14）は、「これまで“next-generation library catalogs”の訳語として『次世代 OPAC』がよく使われてきたが、この新しい製品がカバーするリソースや提供する機能は、もはや『OPAC』の枠にとどまらない」として、「ディスカバリ・インターフェース」を用いるとしている。

なお、用語に関して、飯野（2016 : 32）は、「ディスカバリーサービス」の機能や商品を紹介しつつ、それらの「延長線上に、新たなディスカバリーサービスが誕生することとな

った。それがディスカバリーサービスの進化形ともいうべきシステム」とし、それを「ウェブスケールディスカバリー」としている。

そして、2010 年には、国内で初めて WSD を導入する大学が現れた。慶應義塾大学（Ex Libris 社による Primo）、筑波大学（RICOH 社による開発）、九州大学（アルファ版、オープンソースの eXtensible Catalog）である（片岡 2010 ; 兵藤ほか 2010 ; URL 1）。2011～2012 年には、続いて導入する大学が現れてきた（URL 1）。

2011 年には、Serials Solutions 社（当時）による Summon が佛教大学において国内で初導入された（飯野 2011）。2012 年には EBSCO 社による EDS（EBSCO Discovery Service）が立命館大学において国内で初導入された（URL 2）。

2012 年には、大学図書館問題研究会の全国大会 2012 での 1 つの分科会で、飯野がディスカバリーサービスの概念や機能、代表的な製品を紹介しつつ、WSD の概念や特徴を解説している（URL 3）。

第 2 節　WSD の定義や特徴、代表的な製品

このように徐々に国内に広がることになった WSD の定義や、特徴・優位点はどのようなものであろうか。飯野（2016：36）は WSD の要件として、次の 4 つをあげている。

(1) クラウドサービスとして提供されること
(2) 図書館や各種の商用データベース等から収集されたメタデータを統合した、ウェブスケールな検索用の「セントラルインデックス」を有していること
(3) 商用データベース等の電子リソースに対し、定期的に自動でデータ更新（ハーベスト）を行うための仕組みを持ち、利用者に最新の検索データを提供できること
(4) 単一の検索窓で検索を行えるほか、検索結果全てを「関連度」順に表示できること

これら 4 つの内、WSD の主な特徴は、上記(2)の「セントラルインデックス」を有することと、(3)の「ハーベスト」であると考える。併せて、(2)にある「図書館や各種の商用データベース等から収集されたメタデータ」、および(3)にある「商用データベース等の電子リソース」が意味するであろう「膨大で多様な学術情報を検索対象とする」ことにあると考える。なお、上記(1)のクラウドサービスは、近年では図書館の所蔵資料を調べる OPAC

でも提供されることもあり、上記(4)の単一検索窓での検索なども、OPAC などでも行えるようになってきている。

また、インターフェースや検索結果の画面デザインは、年々改良が加えられている。University of Toronto Libraries（URL 4）や、Smith College Libraries（URL 5）のように、単に関連度順の表示ではなく、検索結果を資料種別ごとにグルーピングして表示する Bento box（弁当箱）と呼ばれるものも珍しくなくなってきた。

また、WSD の代表的な製品は、飯野（2016：35）の紹介を元に改めて本稿執筆時点で整理すると、以下の 4 つとなる。

・EBSCO Discovery Service = EDS（EBSCO 社）（URL 6；URL 7）
・Summon（ProQuest 社）（URL 8）
・Primo（Ex Libris 社）（URL 9）
・WorldCat Discovery Services（OCLC）（URL 10）

第 3 節　WSD の国内導入状況

近年の国内導入状況を整理しておく。

国内導入状況は、文部科学省が実施している「学術情報基盤実態調査」から知ることができる（URL 11；URL 12）。2013 年 3 月末の数値（2013 年度）から、同調査にある「10. 電子図書館的機能」「情報検索サービス」に「ディスカバリーサービス」の導入大学数が記載されている。表 1 に、2019 年 3 月末（2019 年度）までの推移を示す。2013 年 3 月の導入大学の率は 8%で、2019 年 3 月には 19%となっている。導入大学の数は増加しているが、2019 年 3 月時点でも必ずしも多いとは言えない。

調査年度	H.25	H.26	H.27	H.28	H.29	H.30	R.1		
調査基準日	2013.3	2014.3	2015.3	2016.3	2017.3	2018.3	2019.3	大学数 2019.5.1.	導入率
国立大学									
A	6	10	11	11	11	12	11	20	55%
B	2	4	5	5	4	4	3	20	15%
C	4	5	5	5	6	6	6	19	32%
D	1	3	5	5	5	5	5	27	19%
計	**13**	**22**	**26**	**26**	**26**	**27**	**25**	**86**	**29%**
公立大学									
A	0	0	0	0	0	0	0	1	0%
B	0	0	0	0	0	0	0	9	0%
C	4	3	4	5	5	8	8	39	21%
D	1	1	3	3	3	4	7	44	16%
計	**5**	**4**	**7**	**8**	**8**	**12**	**15**	**93**	**16%**
私立大学									
A	5	6	13	17	20	25	31	44	70%
B	10	8	9	19	23	26	26	84	31%
C	17	28	31	34	42	41	41	268	15%
D	9	12	13	13	12	14	15	217	7%
計	**41**	**54**	**66**	**83**	**97**	**106**	**113**	**613**	**18%**
合計	**59**	**80**	**99**	**117**	**131**	**145**	**153**	**792**	**19%**
大学数	774	779	779	778	783	786	792		
導入率	8%	10%	13%	15%	17%	18%	19%		

表 1　WSD 国内導入大学数

（A：8 学部以上、B：5～7 学部、C：2～4 学部、D：単科大学）

2019 年 3 月時点の状況を見てみると、全体的には、規模の大きな大学で導入率が高い傾向がある。設置主体別では、国立大学が 29%と最も高くなっている。設置主体別・規模別の区分で最も導入率が高いのは、私立大学の A（8 学部以上）の 70%であり、44 大学の内、31 大学が導入している。次に高いのは、国立大学の A（8 学部以上）の 55%であり、20 大学の内、11 大学が導入している

逆に、公立大学の A（8 学部以上）および B（5～7 学部）では、10 大学の内、導入大学はゼロである。私立大学の D（単科大学）では 7%であり、217 大学の内、15 大学のみが導入している。

国立大学の導入数を振り返ると、2015 年から 2018 年まで、導入大学数が 1 大学しか増えていない（26 大学から 27 大学）。さらに、2019 年には 2 大学減少している（25 大学）。導入意思のある大学が概ね導入し、頭打ちになったとも見える。減少しているのは、予算とのバランスにおいて、WSD への評価が小さくなっているからと推測される。

飯野はかつて、国内で導入しているのは 2015 年 12 月時点において 110 大学程度で、全体のおよそ 14%と推定している（飯野 2016）。飯野は、市場の 16%を超えることが全体

への普及のカギというマーケティング理論や、初期市場からメインストリーム市場への溝を意味する「キャズム」を乗り越える工夫が必要という理論を紹介しつつ、「ウェブスケールディスカバリーはキャズムを超えるのに必要な、明るい要素をいくつも持っている」としている（飯野 2016：262）。しかしながら、国内大学の導入率は、2019 年で 19%であり、伸び悩んでいるように見える。

第 2 章　WSD の導入事情と検討課題

第 1 節　国内で見られる「OPAC 主義」

第 1 項　国内「主要大学」での導入率と「OPAC 主義」

ここで改めて国内「主要大学」を対象に、導入状況を整理しておく。ここでの「主要大学」とは、国立七大学（北海道大学・東北大学・東京大学・名古屋大学・京都大学・大阪大学・九州大学)、有力私立大学とされる早慶 MARCH（早稲田大学・慶應義塾大学・明治大学・青山学院大学・立教大学・中央大学・法政大学）・関関同立（関西大学・関西学院大学・同志社大学・立命館大学)、そして、Times Higher Education2017（ASIA）でトップ 50 に入った 2 大学（東京工業大学、豊田工業大学）の計 20 大学とする。調査時期は、2017 年 9 月である。

以下、WSD の導入率、図書館 Web サイトでの最初の検索オプションなどを整理する。サンプリングや、最初の検索オプションについては、”やわとしょ”による先行事例（URL 13）を参考にした。その上で、本研究では、後述の「最初の検索オプション」については、以下のような基準に基づいて行った。

- 図書館 Web サイトの最初の検索オプションを調査。
- 「最初」とは、上や左に配置しているのは、優先していると判断。但し、デフォルトで選択されている場合、位置に関わらず「最初」と判断。
- Web サイトに検索窓がなく、検索ページへのリンクがある場合、その位置により判断。

但し、別に WSD の画面があっても、原則として調査対象外とした。

また、複数館構成で、それぞれがトップページを持つ場合、図書館全体のトップページより、それぞれのページがサービスの入口と思える場合、それぞれのページを調査対象とした。

これら「主要大学」で、WSD を導入しているのは、20 大学の内 13 大学であった（図 1)。

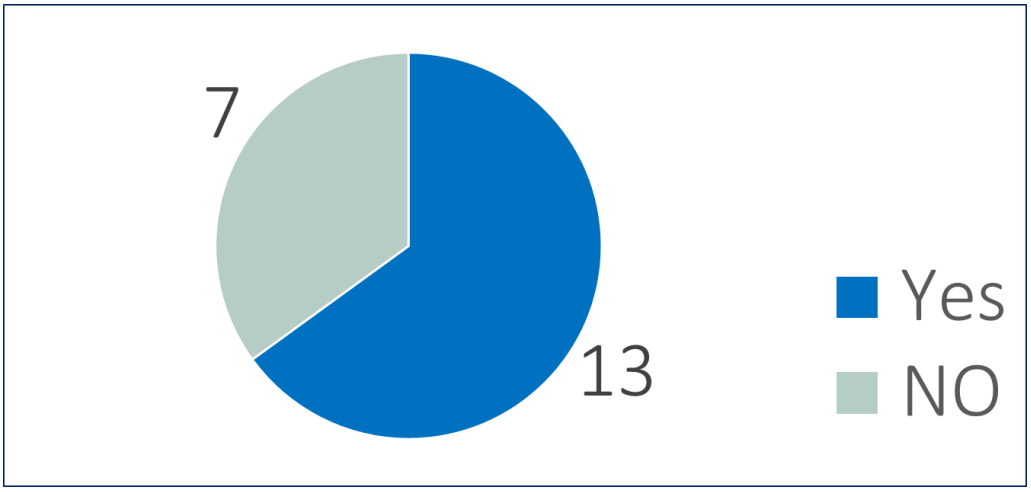


図 1　国内「主要大学」の WSD 導入状況（n=20）

これら導入 13 大学の内、OPAC を最初の検索オプションとする大学は、大半の 12 大学であった（図 2）。但し、WSD を最初の検索オプションにしている 1 大学は慶應義塾大学であったが、同大学では別の独立した OPAC を提供しておらず、製品としての WSD を資料検索サービスとして提供している。つまり、WSD を導入していても、OPAC が選択できる状況では、「主要大学」の全てが OPAC を最初の検索オプションとしていることとなる。

なお、慶應義塾大学では、WSD の運用方法として「本学で利用頻度が高いと思われるデータベース型の電子書籍コレクションのみに限定してディスカバリーを使用していく方針とした」とのことである（稲木 2017：15）。

東京大学は、2017 年 7 月に参照した時点では、WSD を最初の検索オプションとしていた。しかし、同年 9 月の時点では、Web サイトのリニューアルのタイミングにおいてであろうか、OPAC が最初の検索オプションと変更されていた。但し、選択するタブの位置としては、OPAC は左から 2 番目であった。その状況は 2020 年 8 月時点でも変更がない（URL 14）（図 3）。

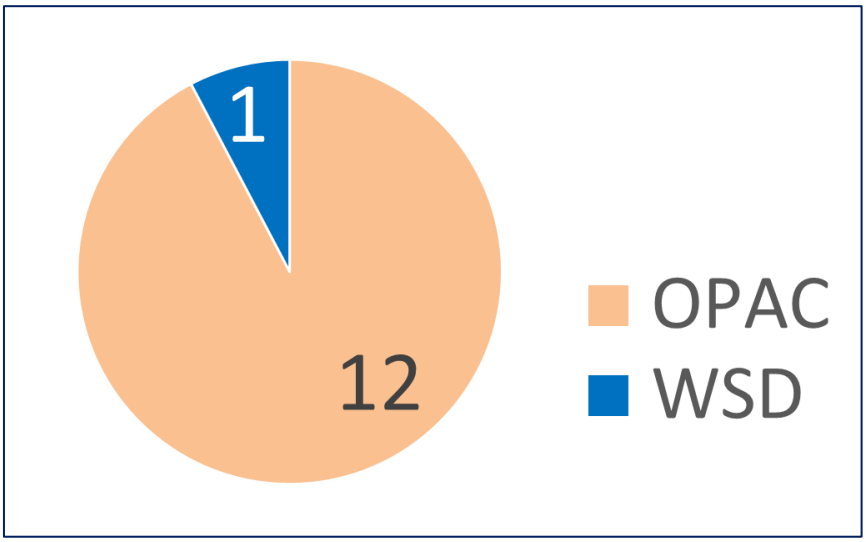


図 2　前掲 WSD 導入館の最初の検索オプション（n=13）



図 3　東京大学附属図書館 Web サイトから（2020 年 8 月時点）

さらに興味深いことは、これらの「主要大学」の内、10 大学が電子ブックを OPAC に登録していることである。WSD で電子ブックが検索できるはずであるが、WSD 導入の 13 大学でも 5 大学が電子ブックを OPAC に登録している。幅広い媒体の書誌データが提供できる WSD が存在するにも関わらず、OPAC の書誌データをリッチにしようとする傾向とも言える（図 4）。なお、電子ジャーナルを OPAC に登録しているのは、20 大学の内 7 大学であった。電子ブックや電子ジャーナルが OPAC に登録されているかの判断は、これらが OPAC 検索結果や詳細検索に表示されているかどうかを基準とした。

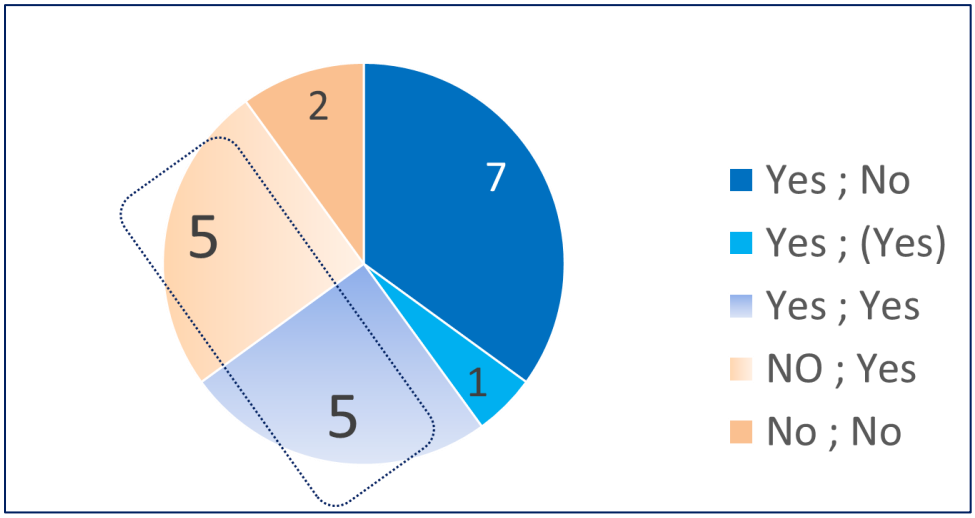


図 4　国内「主要大学」。WSD を導入しているか、および電子ブックを OPAC に登録しているか（n=20）。破線の囲み部分が、電子ブックを OPAC に登録している大学数。なお、OPAC について電子ブック登録を「(Yes)」としているのは、独立した OPAC のない慶應義塾大学。

以上のように、国内「主要大学」において、WSD 導入大学は半数を超えているが、WSD を導入していても、最初の検索オプションはほとんど全てが OPAC となっている。OPAC に電子ブックを登録している大学も半数に及ぶ。OPAC をメインツールとして提供している、いわば「OPAC 主義」とも言える状況が見られる。

上記の調査時点以降、注目すべき変化がいくつかあったため補記しておく。

まず、名古屋大学が WSD の提供を 2019 年 12 月で中止したことである。名古屋大学附属図書館 Web サイトによると「ディスカバリーサービス『Nagoya One Search』の提供は、12 月 25 日（水）17：00 をもって終了」とのことであった（URL 15）。

次に、立命館大学が WSD の表記を変更したことである。同大学では、最初の検索オプションは OPAC のまま、トップページでの WSD の表記が 2020 年 3 月から変更された（URL 16）。それまでは「RUNNERS Discovery」との表記だったと記憶するが、「まとめて検索」に変更された。筆者は時折同大学の図書館 Web サイトを参照しており、2020 年 3 月に変更されたことも恐らく間違いない。変更後のトップページのタブは、左から順にそれぞれ「蔵書検索」「まとめて検索」になっている。その右には「電子ジャーナル」「データベース」「電子書籍」のタブが続いている。

この変更は、2020 年 3 月 25 日からの Web サイトリニューアルよるものと思われるが、

理由などは言及されていない（URL 17）。また、蔵書検索のページでは、以前の表記がタブの中に「Discovery」と残っている（URL 18）。「まとめて検索」の解説ページにも「RUNNERS Discovery Service」といった記載もある（URL 19）。

そして、関西学院大学が図書館 Web サイトから WSD の検索窓を廃止したことである。同大学も、最初の検索オプションは従来から OPAC であったが、2020 年 3 月から「トップページからダイレクトに検索できるサービスを OPAC のみ」として、WSD の検索窓を廃止した（URL 20）。

関西学院大学について、筆者の記憶によれば、変更前は検索窓の上に 3 つのタブがあり、一番左が OPAC（最初の検索オプション）、一番右が WSD であった。変更後は、OPAC のみの検索窓が上部に表示されている。その下に「QUICK LINK」として、6 つのリンクが 2 行×3 列で表示されており、左上が WSD（通称 KWEST）となっている（URL 21）。トップページから WSD の検索窓が消えたこととなる。「まずは OPAC を使おう」という意図・デザインと推測される。

一方で、上記の「主要大学」には含めていないが、一橋大学では、2020 年 2 月から、図書館 Web サイトの最初の検索オプションを OPAC から WSD に変更した（URL 22）。一橋大学附属図書館の広報では、次のように説明されている（URL 23）。

> 「これまで附属図書館では、図書館の蔵書を検索するため『一橋大学オンライン目録 HERMES（以下、HERMES）』を利用者の皆さまに提供してまいりました」
>
> 「HERMES では（中略）（図書や雑誌）に収録されている個々の論文や記事の検索ができません。さらに、昨今急増している電子ジャーナルや電子ブックといった電子的資料の提供に関しても、HERMES では行き届かない部分が多々あることがわかってまいりました」
>
> 「『HERMES-Articles』を『HERMES-Search』と改称し、論文に留まらず図書館の蔵書や電子ブック、その他の電子的資料も含め、本学で利用可能な資料にスムーズにアクセスするためのツールとして整備しました。また、附属図書館ウェブサイトのトップページにも検索ボックスを配置し、附属図書館の中心的な検索ツールとして提供することにいたしました」

寺島（2020）もこの変更を簡単に紹介している。

比較的大きな大学で「OPAC 主義」とは反対の動きが見られたことは興味深い。今後の報告も期待される。

第 2 項　国内早期導入大学にも見られる「OPAC 主義」

上記の「主要大学」では、最初の検索オプションを OPAC とする傾向があったが、WSD の国内早期導入大学でも、同様の傾向が認められる。”kitone”（URL 1）により紹介された、2010～2014 年という比較的早期に WSD を導入した 42 大学を対象として、2017 年 7 月に調査した。その結果、約 7 割の 30 大学において、図書館 Web サイトでの最初の検索オプションは OPAC であり、OPAC を優先する傾向が認められた（図 5）。

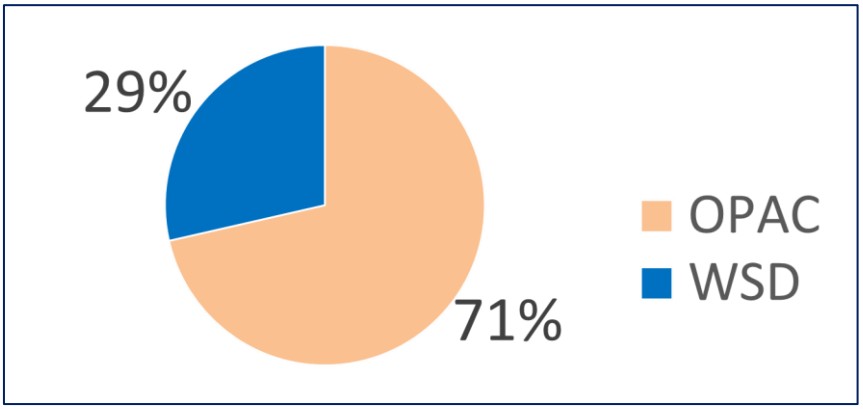


図 5　国内の WSD 早期導入大学での最初の検索オプション（n=42）

また、これらの最初の検索オプションが OPAC である 30 大学のうち、WSD の検索窓が図書館 Web サイトのトップページにあるかどうか調べてみた。結果としては、WSD の検索窓をトップページに置いていない大学が、約 4 分の 1 の 8 大学存在した（図 6）。予想外に多い印象があるが、これらの大学では、WSD を文献データベースの一種として扱っているのかもしれない。

なお、その 8 大学の内、ある大学は OPAC の検索窓もトップページに置かれていなかった。WSD を初期に導入した九州大学もこの 8 大学に含まれ、WSD の検索窓はトップページには置かれていなかった。さらに補足すると、これら 30 大学の内、2 大学では WSD の検索対象に OPAC が含まれていなかった。

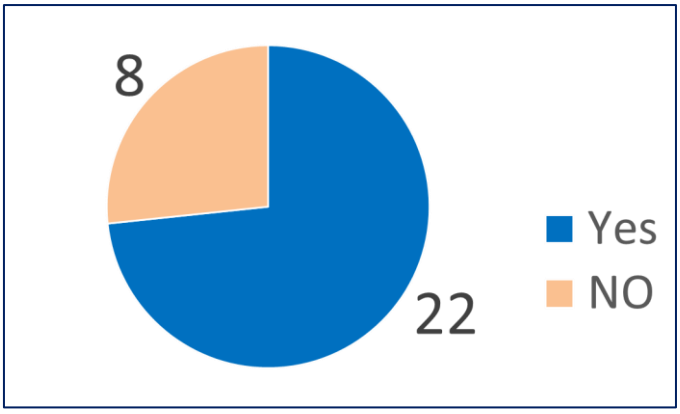


図 6　最初の検索オプションが OPAC である 30 大学のうち、WSD の検索窓が図書館 Web サイトのトップページにあるか（n=30）

補足として、OPAC が最初の検索オプションであるが、WSD を意識的に目立たせているケースが散見されたので、紹介しておく。なお、これらの図は、各大学図書館の Web サイトから、2017 年 7 月に取得したものである（URL 24；URL 25；URL 26）。

・東邦大学：　WSD は画面中央部で、面積は OPAC より大きい。ロゴやイラストもあり、OPAC より目立たせる意図があると思われる（図 7）。

・東京慈恵会医科大学：　WSD は、2 つ目のタブだが、意識的に目立たせている。「まずはここから」という吹き出しや、イラストがある（図 8）。

・金沢工業大学：　WSD は 1 つ目のタブであるが、デフォルトは 2 つ目の OPAC タブとなっている（図 9）。



図 7　東邦大学メディアセンターのトップページから



図 8　東京慈恵会医科大学図書館のトップページから



図 9　金沢工業大学ライブラリーセンターのトップページから

第 3 項　海外での導入事情

海外での WSD 導入事情はどのようなものであろうか。

“やわとしょ”(URL 13) が、アジアのトップ大学での WSD の導入状況を紹介している。アジアのトップ大学とは、Times Higher Education Asia University Rankings 2017 でのトップ 50 大学である。

これによると、2017 年 3 月の時点で、「トップページの検索ツール」を WSD としている大学は、46%であった（50 大学のうち 23 大学)。但し、WSD を導入しているが、検索対象を図書館の蔵書に限定している大学が、他に 3 校あった。WSD 導入率については、少なくとも 50%程度となる。

このように、アジアのトップ大学では日本の「主要大学」よりも、WSD を主たる検索ツールとして扱っている傾向が認められる。

さらに、世界のトップ 50 大学での WSD 導入状況はどのようなものであろうか。上記と同様に Times Higher Education の World University Rankings 2016-2017 から見てみる（URL 27)。

世界トップ 50 大学での WSD の導入率は、2017 年 9 月時点で、94%であった（50 大学のうち 47 大学)。最初の検索オプションを WSD としている大学は、80%であった（50 大学のうち 40 大学。図 10)。世界トップ 50 大学では、WSD はほぼ標準装備であり、主たる検索ツールとして位置づけられている傾向が確認できる。

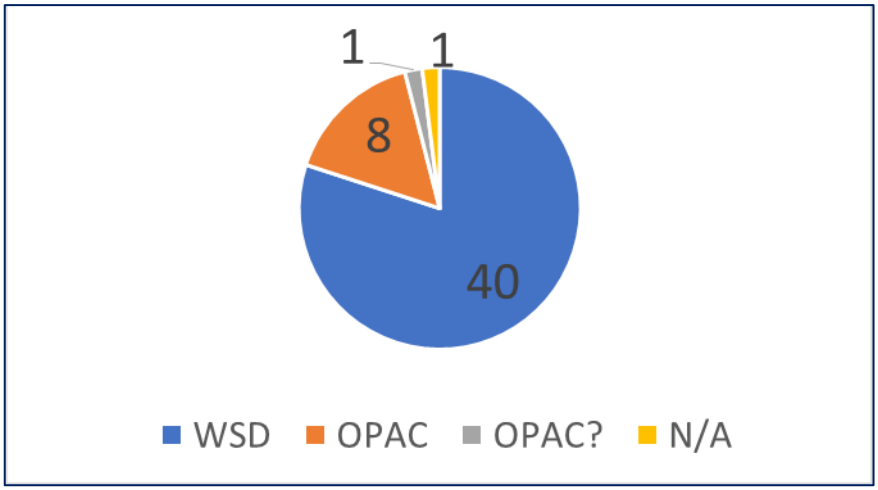


図 10　世界トップ 50 大学、図書館 Web サイトの最初の検索オプション

また、Hofmann and Yang（2012）によると、北米では、2011 年の時点で、Discovery tool と従来の OPAC を併用する図書館の 92%（72 館中の 66 館。調査対象は 260 館）が、Discovery tool を最初の検索オプションとしている。但し、蔵書検索用のサイトを別に持っている場合、37 館中の 23 館（62%）が従来の OPAC を最初の検索オプションとしている。少なくとも北米では、2011 年頃には、WSD が主たる検索ツールになりつつあったと推察される。

第 2 節　検討課題と先行研究

WSD やかつての次世代 OPAC の製品紹介・導入報告を含めて、検討課題や先行研究を整理しておく。

第 1 項　北米での OPAC 調査

北米では、Yang and Hofmann（2011）が、ランダム・サンプリングの 260 大学を対象に、2009 年 9 月から 2010 年 7 月の間で、各大学の OPAC が「次世代 OPAC」としての機能を有するか 12 の観点で調査している。Hofmann and Yang（2012）は同じ 260 大学を対象に、”Discovery tool”の導入機関が、2011 年時点において過去 2 年で 16%から 29%に増加したと報告している。

他に北米では、製品ごとの機能評価を行う研究（Chickering and Yang 2014）や、導入

に向けてのチェックポイントをまとめたもの（Deodato 2015）がある。

第 2 項　国内での機能紹介、製品の紹介

国内では、2008 年から「次世代 OPAC」という名前で機能紹介や導入面の課題が述べられてきたのは前述の通りである。2012 年頃からは WSD につながる製品の紹介や導入報告が行われてきた。安東（2012）や飯野（2012）は、「ディスカバリー・サービス」や「ウェブスケールディスカバリ」という名前で、特徴や機能を紹介している。宇陀（2012 : 13）は、「ディスカバリサービスの機能と利用者のメンタルモデルが合っていない」と、WSD の機能だけでなく、利用者側の意識面にも触れている。

林（2013a，2013b）は、海外の文献や研究を紹介する形で、「ディスカバリー」を巡る論点整理や、課題について触れている。林は、2013 年度岐阜県図書館・岐阜大学図書館研修会でも、「次世代 OPAC」「ディスカバリーサービス」について、国内や海外の動向や事例など幅広く解説している（URL 28）。

製品の紹介としては、平野（2010）、馬淵（2012）、中世古（2012）、北岡（2012）、齋藤（2012）、井手（2012）、シルビス・ニルジェス・新元（2013）、古永（2013）、平野（2013）などがある。

導入報告としては、佛教大学図書館の事例（飯野 2011）や、札幌医科大学（今野 2013）、神奈川工科大学（渡邉・尾﨑 2013）、奈良女子大学附属図書館（寺島 2013）の事例も報告されている。飯野はその後、日本語データベースの利用状況についても報告している（飯野 2014a）ほか、書籍の貸出数が増加したこと（飯野 2016 : 173-4）や、日本語データベースの利用が増加したことも報告（飯野 2017）している。稲木（2017）は、慶應義塾大学での導入事例として、主に電子書籍の面から述べている。

第 3 項　想定される利用者層・利用シーン

想定される利用者層・利用シーンについて言及する報告が、2014 年頃から現れてきている。

眞喜志（2014 : 184，187-8）は、比較的早期に導入した東邦大学の事例報告の中で、利用対象として初心者を想定したことや、想定する利用シーンについて言及している。同大学で 2011 年に導入した Summon（TOHO Search）について、「使い分けや検索に慣れていない図書館サービス利用の初心者（主に学部低学年生や病院職員のうち看護師やコメデ

ィカルスタッフなど）を想定」し、「とりあえずこれを使って探してみよう、と思ってもらえるような選択肢の一つとしてサービスを展開することとした」という。そして、各データベース特有の詳細な検索はできないので「より専門的またはより初歩的ユーザーは、その状況に応じたデータベースを利用したほうがよいケースもある」、「TOHO Search は，敷居の高かったデータベース検索を、まるで『ググる』という言葉に置き換えるようなレベルで、初心者に提供できるサービス」と述べている。

飯野（2015a）は、WSD の強みと弱みに触れつつ、「図書館のコンテンツ」をイメージして検索する利用者のイメージと、WSD の検索結果の違和感について言及している。安東（2015）も、利用者の反応として、「ヒットしすぎて使えない」というマイナス評価や、「ヒットした内容が全て学術情報で Google と違ってすごい！」、「必要な情報がすぐ見つけられた！」、「思いもよらない資料が見つかった」といったプラス評価を紹介しつつ、利用者の評価が分かれていることを紹介している。

飯野は、2014 年には、佛教大学における WSD である「お気軽検索の主要なターゲットは，専門教育に入る以前の学部の 1・2 回生や通信教育課程の学生であり，たとえば専門領域のデータベースに習熟しているような大学院生や，英語文献を自在に操るような教員を対象としたものではない」（飯野 2014a：102）と述べ、低年次の学生を WSD の対象と想定していた。2016 年には、佛教大学での WSD の利用で、日本語系キーワードの使用が多いことから、「おそらく『学部学生を中心とした初学者』こそが、お気軽検索の主要な利用者だという、佛教大学図書館の想定は間違っていない」（飯野 2016：188）としている。

しかし同時に飯野は、大学院生や教員の利用についても言及するようになった。飯野は、WSD の対象が初学者であるということは正しいとする一方で、学部生の利用が少なくなる 3 月や 9 月に英語文献の検索が目立つことから、「大学院生や教員の利用が一定数存在していることは明らかだ」（飯野 2016：192）としている。そして、ある大学院生にお気軽検索について研修会での発表を依頼したところ、「（当人は）本格的に利用してみると非常に便利であることに気づかされたという。（中略）こういった意見が出る以上、お気軽検索は、大学院生や教員にも十分に受け入れられる可能性がある」（飯野 2016：193）と述べている。国内で長く WSD に関わっている飯野でさえ、WSD の想定される利用者層についてつかみあぐねていたと推察できる。

北山（2017）も鹿児島大学における WSD の利用者層について、初学者だけでなく、研

究者にも有用ではないかという、興味深い報告をしている。同大学では、2015 年度までは、1 年生向けのガイダンスで WSD を扱っていたが、2016 年度から休止となり、OPAC、CiNii 中心の内容に変更となった。結果として、学生の利用が減る一方で、研究者による利用が微増または維持しており、「何故、研究者向けの案内を行っていないのに研究者の利用が増えているのか？」という指摘をしている。そして、WSD への評価として、次のように述べている。なお、下記の「まなぶた Search」とは、同大学における WSD である。

- 探したい情報が予め判っているケースでの利用は相性が悪い。（図書館の ILL 業務等）
- 情報検索の経験の少ない初学者のみならず、研究者の検索行動とも親和性が高い。
- 研究利用ネットワークからのアクセスが増加していることから、本学では既にまなぶた Search の有用性は充分認知されていると言える。

研究者にも有用ではないかという指摘の一方で、2016 年 4 月に導入した文教大学では比較的初心者を意識して導入したことが、WSD 日本代理店のセミナーの参加者により紹介されている（URL 29）。それによると、「Summon の主たるターゲットを『図書と論文の区別がつかない』層と『図書と論文の区別はつくけど、データベースの使い分けはできない』層に定めた。ただし、ガイダンスをしてみると前者には Summon を説明しづらい」という。最近 WSD を導入した大学による報告は非常に少なく、同大学の事例がどの程度一般的なものかはっきりしたことは言えない。しかし、近年導入した大学でも、比較的初心者を意識して導入したことが代理店主催のセミナーで報告されたのは興味深い。

ここまで、国内大学での WSD 導入報告を整理してきた。あくまで導入報告を調査した範囲、および筆者が見聞する範囲ではあるが、「WSD は学部生向け・初学者向け」という導入目的や印象が広がっていると言える。大学院生や教員にも有用ではないかという報告も現れているが、「学部生向け・初学者向け」との印象はまだ強いように思われる。そして、WSD の関係者の間でも、利用者層や利用シーンが明確に捉えられていないことが分かる。

第 4 項　既存 OPAC との関係

国内大学での WSD と既存 OPAC との関係や、大学図書館のアンケートに見られる利用者の志向を報告したものとしては、以下のものがある。

林ほか（2015）は九州大学での利用者アンケート調査について報告している。そのアンケートは、WSD である「世界の文献」が図書館 Web サイトの最初の検索オプションであ

った時期に行われた。結果として、OPAC である「九大コレクション」（機関リポジトリや電子ジャーナルなども含む）がトップにあってほしいとの回答の方が、「世界の文献」より多かったという。一方で、WSD である「世界の文献」がトップにあってほしいと、教員の53%、大学院生の 33%が回答しており、分野の偏りも認められず、かつ、学部生の回答は18%とニーズが少ないという。そして、「『ディスカバリーサービスは学部生向け』としばしば言われていることとのズレを感じる」（林ほか 2015：52）と興味深い指摘をしている。

続けて、林ほか（2016）は、2015 年 9 月に「九大コレクション」を最初の検索オプションに変更したのち、「世界の文献」のセッション数が激減したが、一定のセッション数は継続しており、「根強いユーザが存在していることが窺え」ると指摘している。これらの指摘も、当初言われていたような WSD が学部生向けであるという考えとは異なる点で、非常に興味深い。

また、法政大学が下記の要領で実施した「図書館利用ニーズ Web アンケート調査」の速報に、図書館のどのような Web サービスを利用するかという設問（複数回答可）がある（URL 30）。

・調査対象：　学部生・大学院生・通信教育部生。

・調査方法：　無記名式、Web 調査。

・調査期間：　2018 年 11 月 29 日～2019 年 1 月 31 日。

・回答件数：　3,420 名。

回答者全体では、利用する Web サービスとして、OPAC が 74.0%と跳び抜けている。続いて、データベースの 24.6%、電子ジャーナルの 16.1%、WSD である HOSEI Search の 15.9%となっている。回答者 3,420 名の内訳は、学部 1-2 年生が 43.0%、学部 3-4 年生が 36.9%、大学院生が 12.6%、通信教育部が 7.6%である。図書館 Web サイトの検索オプションは OPAC が 1 番目となっており、WSD は 2 つ目のタブとなっている（URL 31。2019 年 7 月時点）。図書館 Web サイト以外でどのような案内をしているか不明であるが、上記の 15.9%という数値からは、現状としては学部生の多くが WSD を利用していないということが示唆される。

第 5 項　利用形態の検証

利用形態の検証のうち、ログの分析からのものとして、以下があげられる。

佐藤ほか（2015）は、国立国会図書館サーチのアクセスログを分析し、8 割以上の利用

者が最初に簡易検索を用い、その約 8 割が 1 語による検索をしており、検索結果の絞り込みにファセット等の絞り込み機能を用いることが多いとしている。

大谷（URL 32）は、九州大学での Summon のログ分析を行い、「キーワードによる検索が大部分を占めた。日本語及び中国語韓国語の検索が全体の 60%程度であり、さらにその 70%が空白文字列で区切られていない一つの検索語として入力」と検索語の特徴を指摘している。

馬淵・長谷川（2016）は、大谷（URL 32）をベースに、Summon 利用 34 機関の検索ログを調査している。日本語の検索がほぼ 7 割とやはり多い。検索語数は医学・薬学・看護学のみの機関で 1.41 語であり、これらの分野は、全体と比較してより掛け合わせ検索をしているという。WSD 導入後の利用変化も、インデックスの手法や検索エンジンの質などにより結果が異なると推定している。そして、WSD を単に導入すればよいのではなく、有効性を日々検証すべきと指摘している。

北米では利用者対象の実験や調査が行われている。

Foster et al.（2011）は、University of Rochester で当時の次世代 OPAC の 1 つである eXtensible Catalog を開発する際に、利用者の行動を調査している。Lown, Sierra and Boyer（2013）はシングル・サーチ・ボックスについての利用者行動調査をログ分析の手法で行っている。

Asher, Duke and Wilson（2013）は、Bucknell University と Illinois Wesleyan University において、質的・量的調査により、EBSCO Discovery Service, Summon, Google Scholar, and Conventional Library Resources といった情報検索ツールについて学生の使い方を調査している。いずれの検索システムでも、学生達は効果的に情報源を評価できない結果、デフォルトの検索設定に大きく依存する結果を見せたと報告している。

Summon の満足度について、Ryerson University においてオンライン調査とフォーカス・グループを組み合わせ、検索結果の質の面で高い満足度があるとする Lundrigan, Manuel and Yan（2015）の報告もある。

Niu and Hemminger（2015）は、ファセット・インターフェースの効果について、サーバのログから量的研究を行っている。ほとんどの検索者が自然に、簡単にファセットのコンセプトを理解し、ファセットの有用性と正確性の向上を指摘するが、時間短縮には繋がらないと報告している。また、インターフェースの効果について、Sahib, Tombros and

Stockman（2015）の報告もある。

ユーザビリティ、インストラクション関連の報告としては、次のようなものがある。

Brett, Lierman and Turner（2016）は、WSD 利用のバリヤは技術的な問題でなく、「Peer Review」文献の意味や、雑誌と新聞の区別などといったタスクの理解が重要であり、一般的な指導は特に学部生にとって WSD やリサーチツールの効果的利用の必要条件（prerequisite）である、と指摘している。図書館 Web サイトの最初の検索オプションが WSD であるなど、WSD がある程度一般的な状況でのテストであり、そのまま日本国内の状況に当てはめることはできないが、興味深い指摘である。

Mahoney and Murray（2012）は、Franklin College での Primo 導入プロセスを報告している。その中で、インストラクションに、ディスカバリーサービスのインターフェースを取り入れる必要性や、広報の必要性にも触れている。

Nichols et al.（2014）は、2012 年に Primo を導入した中規模の学術図書館において、インストラクションなしで、どのように使われるか調査し、利用者は効果的な探索をしたと報告している。

Niu, Zhang and Chen（2014）は、次世代 OPAC の 1 つである VuFind から Primo へ更新する機会に、両者のログから利用者の情報探索行動、要望、認知を分析している。その結果、2 つのシステムの間での共通点として、a）キーワード検索が優勢、b）それに比べるとファセット検索は一般的ではない、c）ほとんどの検索セッションは 4 回以下のクエリーと短く、入力される語は通常 2～3 語、d）半数以上のセッションは元のクエリーを再定義 （reformulated）していることを報告している。

Comeaux（2012）は、20 人の参加者を対象に、5 つの典型的な情報探索シナリオを用いた調査を行っている。利用者は素早く新しいインターフェースに順応したことや、使いやすさは表示される用語に影響されることを報告している。

利用者の不満や誤解について言及するものとしては、以下のようなものがあり、大変興味深い。

Scott and Reese（2012）は、文献レビューの中で、WSD の懸念点（concerns）として、次のようなことを指摘する。すなわち、多すぎる検索結果、関連度の不足、検索対象でないコンテンツもあること、目録の特定性（specificity）の欠如、データベース機能の欠如、

利用者の知識の不足である。また、利用者が検索結果の最初のページしか見ないこと、利用者が特定のデータベースを使いたいと思う場面もあることにも触れている。WSD のデメリットに関する指摘として興味深い。

飯野（2017）は利用者の不満や誤解を生じさせるものとして、a)「スケールの錯視」、b)「思い込みやスキル」、c)「情報量や情報のデザイン」の 3 つをあげている。

a)「スケールの錯視」とは、利用者から見ると「図書館のコンテンツ」なのに、実態は Web に広がったコンテンツであり、リンク切れの対応などに時間がかかると図書館への不満を感じることを指す。b)「思い込みやスキル」とは、ポジティブな誤解としては、WSD は「万能ツール」で全ての情報を検索できるもので、簡単に自分でも使いこなせるという誤解から生じる不満である。ネガティブな誤解としては、WSD は難しくて使えないものであり、自分には必要ない、あるいは、大学院生や教員には意味がないといった誤解から生じる不満である。最後の c)「情報量や情報のデザイン」とは、検索結果が多すぎる；適切な結果が上位に出ない；結果表示後の次のステップが分からないといった理解不足による不満や、日本語検索のキーワードが認識されないといった機能不足による不満を指す。

その上で飯野は、現状の分析と理解、そして広報の重要性を指摘している。

飯野が触れるような「大学院生や教員には意味がない」という WSD への印象や、「学部生や初学者向けである」といった印象は、筆者の知る範囲では、比較的一般的なものと思われる。

特に、「検索結果が多すぎる」という不満は、WSD に対する不満としては最も代表的なものだろう。他の報告の中でも、検索結果の利用者にとっての違和感（飯野 2015a）や、「ヒットしすぎて使えない」という利用者の反応（安東 2015）などと触れられている。この不満は、筆者の印象ではあるが、図書館員が持つ不満としても最も大きいものと思われる。

WSD のインストラクションに関連した図書館員対象の調査もある。

Fawley and Krysak（2014）は、WSD に対するコンセンサスの欠如（進んで利用する図書館員、拒否する図書館員）を指摘しつつ、WSD をインストラクションで用いる大学図書館等のライブラリアンを対象に、WSD をどの程度好んで／進んで（likely）使っているか、およびその理由を調査している。

Gustavsson and Karlsson (2015) は、スウェーデン Vastra Gotaland の大学において、図書館員がインストラクションで WSD をどのように使っているか調査している。そして、すべての回答者がインストラクションの重要性を強調し、2 年生以降より 1 年生対象の方がインストラクションで多くの時間を WSD について扱うこと、情報評価の観点に触れる回答者が多いことを述べている。

一方、国内では WSD に関するガイダンスやインストラクションについて、言及は多くない。

野末（2014 : 5-6）は、ディスカバリーサービスなどが「文献探索法を指導する必要性を軽減することにつながっていくと考えられる」としながらも、ヒットした文献の種別（図書の一部なのか、査読論文なのか）の識別といった、学ぶべきことを「見えにくくしてしまう危険性もないとはいえない」と慎重な言い方をしている。

飯野は、「直感的なシステムに特別なガイダンスが必要だとは思えなかった」、「学部の１・２回生に代表されるような初学者であっても、それなりに使いこなしていることは明らかだ」と述べながらも、「教員や大学院生にもお気軽検索の利便性を周知したほうが、学修支援という点で、新たな展開が見えてくる可能性が高そう」とも述べている（飯野 2016: 194）。そして、WSD の利用が OPAC の 3 分の 1 に留まっていることから、WSD の長所や効率的な利用方法が「すべての利用者に十分に認知されているわけではない」（飯野 2016 : 195）とも述べている。そして、教員向けガイダンスを行ったところ、3 回で、のべ 19 名の参加があったということである。

このように、WSD は「ガイダンスをしなくても利用できる画面デザインであるべき」というのが、漠然とした一般論であったと思われる。しかし、その後、WSD のガイダンスについての報告はほとんど見られない。

第 6 項　その他

WSD 導入後の資料利用の変化については、米国 Grand Valley State University において、伝統的なデータベースの劇的な利用減少や、フルテキスト・データベースと電子ジャーナルからのフルテキスト利用の劇的な増加を報告するもの（Way 2010）や、カナダの the University of Manitoba において、電子ジャーナル利用の劇的な増加、電子ブックの利用は半数以上のプロバイダーにて増加、そして、印刷体資料の利用は減少したことを報告するもの（O'Hara 2012）がある。

同様に、WSD 導入が電子リソース利用率に顕著な増加をもたらしたという Clark, McDonald and Price（2014）の報告や、Western Carolina University において、WSD 導入後に、電子ジャーナルの大きな利用増加と、貸出の明確な減少があったという Calvert（2015）の報告もある。

国内では、飯野が次のような報告をしている。「入館者数が減少傾向であったにもかかわらず、図書の貸出冊数が、月平均で前年比 107%という増加（中略）。洋書の貸出冊数に至っては、2 倍近く」(飯野 2016：173-4)、「2013 年 3 月から Summon を公開した鹿児島大学附属図書館においても、図書の貸出が増加したといくつかのフォーラムで報告」（飯野 2016：174）、「図書の書誌レコードの内容が（中略）『リッチ』になったことで、利用者が求める資料に出会う可能性は高まった。（中略）閉架書庫に収められている学術雑誌について、カウンターへの出納依頼が増加」（飯野 2016：175-6）したという。

その他に飯野は、CiNii Articles のダウンロード回数の増加や、WSD に収録されていないジャパンナレッジ（オンライン辞書・事典検索サイト）、聞蔵Ⅱ（朝日新聞記事データベース）、京都新聞の利用が増加したことも報告している（飯野 2017）。飯野は、WSD を中心とした図書館 Web サイトのデザインの重要性を指摘し、サイトデザインの変更に伴い、トップページへのアクセス数が増加していることも報告している。サイトデザインの変更の結果、お気軽検索の利用状況が増加していることと、これも 1 つの要因としてジャパンナレッジ等の利用も増えていると、飯野は推測している。WSD だけを議論するのではなく、図書館 Web サイトのデザインなども考慮すべきという飯野の指摘は、WSD の利用される文脈を考慮するという点で重要と思われる。

なお、お気軽検索の利用増加の背景について、筆者が個人的に飯野に質問したところ、ガイダンスについては以前から同様の状況であり、サイトデザインや、その愛称設定が利用増加に作用していると推測しているとの回答があった。

WSD に関連して、日本語コンテンツの扱いについての報告としては、WSD に日本語資料の収録が進まない要因を考察した飯野（2014b）の報告や、デジタルアーカイブとの関係で WSD に言及した古賀（2017）の報告がある。また、江上（2017）は、日本のデジタル資料の少なさや、英語・ローマ字表記の不備について指摘している。

ここで日本国内での政策の流れも、簡単に整理しておく。

次世代 OPAC という言葉が国内で広がる前の 2007 年には、国立大学図書館協会の図書館システム検討ワーキンググループが「今後の図書館システムの方向性について」という報告文書を作成している（URL 33）。このワーキンググループの設置の目的は、「デジタル情報環境下に相応した将来の図書館システムの方向性について検討すること」（p.1）とされている。ワーキンググループ全体での一定の共通性として、「管理からサービスへ」、「ユーザ指向」、「ウェブ協調」などがあげられている（p.1-2）。

この報告書の第 2 章「管理しない図書館システム―管理志向からサービス提供志向へ」（p.10-4）で、茂出木は当時の OPAC の問題点を指摘している。図書館のシステム化や、学術情報の電子化が進む中で、「OPAC は目録カードに比べてどれだけの情報提供ができているのかというような点が問われる」（p.11）という問題提起をしている。具体的には、論文タイトルで OPAC を検索できないままの状況が変わっておらず、図書の検索においても「図書館蔵書として管理されている資料しか引けないカード目録の電子化の域を脱」していないと指摘している（p.11-2）。蔵書しか引けない問題点の具体例として、例えば、第 6 版が出版されている図書について、第 5 版しか所蔵していない場合、最新でない資料情報を提供してしまう、と茂出木は例示する。

さらに茂出木は、図書館システムパッケージの概念図に OPAC が中心に書かれてきたことを例に、「いわば OPAC 至上主義」（p.12）と指摘する。さらに「OPAC は『図書館が自分の持ち物を検索させる』システムから『利用者が必要なリソースを自ら発見する』システムへの展開を図る必要がある」ことに触れ、「OPAC を一つの情報サービス部品として位置づけ、OPAC を中心に置かなくても他のシステムやサービスとの組み合わせで提供することで、結果、利用者を支援するためのシステム設計が必要である」（p.12）と述べている。

茂出木が指摘するのは、OPAC に限らず図書館システム全体が他のシステムと有機的に補完しあうことである。近年、OPAC から CiNii Books など多くのサービスにハイパーリンクで遷移できることも一般的になっている。そのような機能を予言するような茂出木の指摘は、的を射たものだったと思われる。

2010 年には、文部科学省の科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会 学術情報基盤作業部会が、「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像」という報告書を作成している（URL 34）。

その中で「大学図書館に求められる機能・役割」の 1 つとして、「③コレクション構築と

適切なナビゲーション」を取り上げ、次のように WSD に触れている。「大学図書館には、多様な学術情報への的確で効率的なアクセスを確保することが求められており、例えばディスカバリーサービスのような、より適切で効果的なナビゲーションの在り方を検討することが重要...」（p. 9、下線は筆者）。あくまで例示ではあるが、蔵書にとどまらない学術情報へのアクセスツールとして、WSD に触れている。

2013 年には、文部科学省の科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会が、「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」を作成している。この報告書では、学術情報基盤整備の現状と課題を、コンテンツ、学修空間、人的支援の 3 つに整理している（URL 35）。

その「コンテンツ」の中で「印刷資料の整備とあわせて、電子資料の充実にも適切に対応する必要」（p.3）と言及されるが、WSD を含め提供方法についてはほとんど触れられていない。なお、他にコンテンツの論点としては、資料の電子化、オープンデータ、資料保存スペースが触れられている。

2016 年に国立大学図書館協会から発表された「国立大学図書館協会ビジョン 2020」では、重点領域１「知の共有」の「目標３」として、「国立大学図書館は、総合目録データベースをはじめとする学術情報システム基盤を高度化することにより、知の総体を対象として、必要な情報がより効率的・網羅的に発見できる環境を実現する」ことがあげらている（URL 36）。

そこでは「総合目録データベースをはじめとする」とされていることから、国内の大半の大学が参加する書誌・所蔵データベースである NACSIS-CAT や、その利用者側のサービスである CiNii Books/Articles の今後や、電子リソース管理が課題とされていると推察できる。学術情報の発見する環境に関連して、WSD については触れられていない。確かに、国内大学での WSD 導入率が 20%に届かない状況では、これに依拠した目標を立てることは困難だろう。

2017 年度からの文部科学省の第 9 期学術情報委員会では、審議事項（案）の 1 つとして「コンテンツの電子化等を背景とした大学図書館機能の強化について」があげられている（URL 37）。その論点例には、「大学図書館は利用者支援や情報流通機能の強化の観点から、プラットフォームやコンテンツをはじめとするデジタル基盤の提供等についてどのように対応すべきか」ということも触れられている。広い意味では WSD も含まれる内容ではあるが、あくまで審議事項（案）と論点例であるため、それ以上は具体的に記載されて

いない。

そこで、第 1 回（2017 年 4 月 12 日）から、第 15 回（2019 年 1 月 31 日）の議事録（URL 38）から、Web ブラウザ上で「ディスカバリ」の文字列検索をしてみた。その結果、以下の回次において、WSD と思われる用語として「ディスカバリーサービス」などの言葉が委員の発言に含まれていることが確認できた。それは、第 1 回（2017 年 4 月 12 日）、第 2 回（2017 年 5 月 31 日）、第 3 回（2017 年 6 月 21 日）、第 5 回（2017 年 10 月 18 日）、そして、第 7 回（2018 年 2 月 1 日）である。

委員会全体の流れや、発言の文脈についての分析はここでは省略するが、概ね現状の紹介や、学術情報の発見可能性を与えるツールとして紹介されていたようである。関係者の一部では、論点例の「利用者支援や情報流通機能の強化」の点で、WSD が有用なツールの 1 つであると認識されていた可能性がある。

以上のように、政策の流れとしては、2007 年頃までには OPAC の問題点は一部では認識されていた。そして、2008 年頃に国内で「次世代 OPAC」として機能紹介された頃に、アジェンダ設定されたと考えられる。但し、その後は関心が小さいまま推移してきたと思われる。2010 年に、前述の「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像」という報告書（URL 34）で触れられた、OPAC を超えた「より適切で効果的なナビゲーションの在り方」の議論は、政策面では進んでいない。あるいは、アジェンダが別の面に移っている状況かもしれない。

第 3 節　検討課題のまとめ

WSD に関して海外では多様な面から分析や報告が行われているが、国内では研究自体がごく限定的にしか行われていない。国内では、WSD の導入率も低く、OPAC に対して位置づけも小さい様子が見られる。想定する利用者層や利用シーンについても一定のコンセンサスもない状況である。

学術情報の提供方法については、OPAC だけでは不十分という指摘がされている。大学図書館の利用支援として、CiNii Articles/Books や各種文献データベースについての講習などは比較的よく行われているだろう。一方で、自館が所蔵しない資料を含めて統合的に検索できる WSD のメリット・デメリットや改善すべき点について、提供する側の大学図

書館関係者が共有する一般的認識がある状況とは到底言えない。

このような現状では、利用者への案内や利用指導方法、図書館 Web サイトでの見せ方に関しても、根拠を持って効果的に運用することは困難である。例えば、検索課題を基にしたユーザビリティ調査をするにしても、誰に対して、どのような検索課題を設けるのかについて検討することや、実験の仮説を設けるのも困難であろう。そこで、本研究では、発見的・探索的な手法を用いることとする。

第 3 章　WSD 利用者へのインタビュー調査

第 1 節　調査手法

WSD に関する研究が非常に限定的な国内の状況では、仮説検証型の研究は相対的に困難である。WSD の利用要因などについて、発見的・探索的に基礎的なデータを提供する本研究では一種の仮説を生成することとなるため、質的研究がより適していると考えられる。

量的研究に意味がないとは必ずしも言えないが、WSD の導入が大学数ベースでまだ少なく、導入大学でも構成員に認知されていないことも多いと想像される。まずは、可能な限り、利用者の考えや、利用場面を具体的に明らかにすることが大事な段階だと考えられる。また、WSD の認知度や利用度を量的に研究することについては、WSD の広がりが十分ではない現状では、利用者の認識や活用シーンにフォーカスする方が有意義である。他に、検索課題を作ってユーザビリティ調査をすることも検討したが、本研究の手法の方が現時点では有意義であると言える。

質的研究やインタビュー調査の手法については、次のような知見がある。

西條（2007：19-32）によれば、先行研究ですでに分かっていることを確認するような仮説検証型の研究や、何らかの仮説が出されていて、それに一般性があるかどうかを確認するような研究は、質的研究に適していないとされる。そして、質的研究は仮説生成に向いているとする。

鈴木（2005：48-9）は、フォーカス・グループ・インタビューの利点として、次の事柄をあげている。

1) 多くの出席者に一度に集まってもらい、多様な意見を収集できる。面接実施から事実の発見までの時間が短く、効率的。
2) 比較的安価。
3) 出席者の相互作用により、より豊富な情報が得られる。
4) 出席者に直接接触できるため、人々の考えや理由など、より正確で率直な情報を得られる。
5) 単独でも利用でき、量的調査などを含めた多様なデータ収集が可能。
6) 定量的な調査では得られない豊かな情報を集められるため、探索的な調査に最適。
7) 幅広い意見を収集するため、行動の理由を明らかにする調査にも有用。

8) 出席者の意見の中には、調査者の予想を超える、結果の解釈に役立つ貴重な情報が存在する。

また、Vaughn, Schumm and Sinagub（1996=1999: 8-9）は、フォーカス・グループ・インタビューの定義として、次の点をあげている。

・ある特定の話題に対して、比較的同質な人々がメンバーとなる。
・よくトレーニングされた司会者が、仮説と質問を準備する。
・目標は、特定の話題について参加者の理解、感情、受け止め方、考えを引き出すこと。
・人々がどのように行動しているか、また、それはなぜか、ということを説明することを助けるためにある。
・人々の意見の広がりを理解することにある。
・より構造化され、より形式的な部分がある。
・合意形成が目標でなく、それぞれの人々の視点を発見し、また人々に異なった視点を表現することを促す。
・人々の意見の強さを正確に測定することを目標としているのではない。
・調査研究の最初の段階においてしばしば用いられる。

谷ほか（2016：55-6）は、ラーニング・コモンズでの利用者の行動分析の中で、フォーカス・グループ・インタビューを使用した理由として、「（質問紙調査や観察法では）調査者側が認識した利用方法のみに注目しがちとなり、対象者の認識を正確に把握することは難し」く、「インタビュー調査では、対象者自身の発言から、彼らの実際の行動や空間の使い方，新しい環境についてどのような考えを持っているのかを分析できるため、より実態に即した分析が可能」としている。

以上のようにインタビュー調査について述べられた点は、本研究に即した考え方であり、インタビューだからこそ聞き出せることがある。利用の仕方、WSD に対する印象の詳細など、単に 5 件法などで表現しにくいことがある。また、質問紙調査の場合、調査内容が調査者の利用イメージに限定されることや、予備調査等で把握できた範囲の質問項目になってしまうことが懸念された。それよりはインタビュー調査によって調査対象者の考えを具体的に聞くことが有効であり、利用場面を思い出しつつ、考え方を掘り下げることができる。

半構造化インタビューについては、調査目的に沿った内容以外にも、開放性や文脈情報の取得の点で特長があるとされる（Flick 2009=2011：209）。これも同様に、調査者側が認

識している点以外にも調査対象者が認識していることを引き出すのに有効な方法と考えられる。

グループインタビューと１対１のインタビューを比較した場合、グループインタビューの方が効率的に複数人からの発話を得ることができる。しかし、1 人に対して発話内容を深めたり、広げたりすることを考慮すると、グループインタビューの効率性を重視するより、1 対 1 のインタビューで各人の考えを聞く方が望ましいと考えた。

以上の点から、本研究では、1 対 1 のインタビュー調査とする。形式としては、半構造化インタビューを用いる。

第 2 節　本研究での調査方法

第 1 項　対象

調査対象者は、WSD 利用者、ないし利用経験者とする。より具体的には、「WSD を利用したことがあり、一定の印象を持っている者」とする。「一定の印象」ということを操作的に定義することは困難であるが、自分の言葉で印象を語れる調査対象者を募集するようにした。

当初は調査対象者として、WSD を比較的頻繁に利用し、ある程度習熟している「活用者」を募集して、WSD に対する明確な意見を集めることも考慮した。しかし、そのような「活用者」は多くないことが予想され、募集するのは困難と想定された。同時に、WSD をどのように利用していると「活用」と見なせるのかを調査者が定義することも不適切と考えた。「活用」の基準を仮に明確にしたとしても、その基準を元に対象者を募集することは相当煩雑で、対象者の募集が円滑に行えるとは到底思えなかった。

実際の調査対象者の選定は、西條（2007 : 102-3）の述べる「関心相関的サンプリング」を参考とする。この選定方法は「自分の関心（リサーチクエスチョン）に照らして（相関的に）対象者をサンプリングする」ことである。西條は、より具体的に「研究を構成するすべてのツールや材料は、①現実的制約を勘案しつつ、②リサーチクエスチョンや研究目的に照らして選んでいくことになる」と述べている。本研究のような発見的・探索的な手法の場合、単に応募者を対象とするより、研究目的を実質化するために相関的にサンプリングすることが適切と考えた。

本研究においては、調査対象者の所属は、大阪大学、および同志社大学とする。両大学

とも、大規模な総合大学であり、WSD 導入後数年経過している。導入時期は、同志社大学は 2013 年 3 月（URL 39）、大阪大学は 2012 年 10 月（大阪大学附属図書館 2012）である。いずれの大学も、筆者の記憶する限り 2016 年以降、図書館 Web サイトの最初の検索オプションは OPAC である。同志社大学だけでなく、大阪大学を含めた方が、医学・薬学など生物学系の対象者をカバーできる可能性も考慮した。

また、いずれも筆者の勤務先と通学先であり、各大学の状況や背景を比較的知っているため、調査結果の分析時に調査対象者の行動をより理解できると考えた。

但し、両大学が使用している WSD の製品は、大阪大学が EDS（EBSCO Discovery Service）、同志社大学が Summon と異なっている。導入製品は異なるが、インタビュー予備調査の過程で、製品の違いが発話に影響することは大きくないと理解できた。そのため、WSD に対する印象は製品の違いを超えて調査可能と判断した。調査結果の分析時には、発話が製品自体によるものかを考慮することとする。

なお、検索結果を見ると、両大学の WSD ともに OPAC は検索対象に含まれていた。いくつかの専門文献データベースや新聞記事データベースのほとんどが検索対象外であることは推定できたが、電子ブックや雑誌論文を相当広く検索対象としているため、両大学の WSD ともに調査対象として十分な機能があると判断した。

対象者の身分については、特に限定せず、学部生、大学院生、教職員とした。学習研究分野については、総合・人文社会・理工・生物から幅広くなるよう募集した。

人数は、実質的な分析作業のボリュームも考慮して、15 名を目標として募集し、15 名に達した時点で募集を中止した。なお、上記の「利用経験者」に該当し、インタビューに十分答えられると判断した場合、それぞれの大学の卒業生・退職者も含めることとした。

そして、関心相関的サンプリングに基づき、学年や身分、研究分野において、一定の多様性が確保されるように募集した。但し、多様性といっても限界があり、インタビューに要する時間的制約もあるため、過度に多様性を意識すると、調査自体が破綻する恐れがあった。実際、インタビュー予備調査の段階で、知人の教員などに打診すると、WSD を知らない／使っていないという回答も多く、WSD 利用者が多くないことが推察できた。

また、対象者の考え方の多様性や、WSD や情報メディアに対するスキルの多様性について、調査者が事前にフィルタリングすることは、実質的に困難である。逆に調査者の考えを反映させてしまうことになりかねない。そのため、これらの点については、調査対象

者の選定の際、特に考慮することは避けることとした。

なお、調査者の恣意的なサンプリングを防ぐとされる「スノーボール・サンプリング」については、インタビュー予備調査の際も WSD の利用者がそれほど多く見つけられず、この方法により有効に調査対象者を選定できるとは想定できなかった。そのため、当初はこの方法を採用しないこととした。しかし、募集を継続している段階で、応募者に知人の紹介を依頼することもあった。

第 2 項　募集方法

対象者の募集は、多くの方法で行った。対象者の多様性を確保するという目標はあったが、それ以前に応募者が多くないという懸念もあった。そのため、対象者の多様性を意識しつつ、様々な方法で募集した。

具体的な方法は以下の通りである。

・知人である教職員や学生への紹介依頼・拡散依頼、直接の打診。
・筆者の所属するゼミのメーリングリスト（拡散依頼含む）。
・予備調査の対象者、かつてインタビューを打診した人への依頼（紹介依頼・拡散依頼含む）。
・司書課程担当教員（同志社大学）経由での受講者関連メーリングリスト。
・筆者自身の Facebook。
・インタビュー対象者への紹介依頼・拡散依頼。
・Facebook のグループ「阪大生全員集合」、「大阪大学情報共有ページ（α 版）」。いずれも登録 ID 数は 2,000 を超える。但し、あまり活発ではない様子があった。現役の学生がどの程度含まれるかは不明であった。
・他に、宿泊先でアルバイトしていた複数名の学生、WSD を授業で取り上げていた教員にも打診したこともある。

応募に当たっては、事前アンケートを含む Web 応募フォームに入力いただくようにした。この段階で、WSD をほぼ使っていないという回答のあった応募者については、丁寧に説明した上でインタビュー対象から除外させていただいた。

応募者の人数が 15 名に近づけば近づくほど、身分や学習研究分野が偏らないように募集した。なお、15 名の対象者の内、予備調査の対象であった人は 3 名であった。

筆者の以前からの知人については 6 名であった。知人の場合、分野などの偏りが懸念さ

れるが、多様性は確保できたと考えている。この 6 名の身分は、6 年制学部卒業者 1 名、修士院生 2 名（内 1 名は修了者）、博士院生 2 名、教員 1 名であった。分野は、2 名を除いて重なりはなく、その 2 名も大学院生と教員で、身分は異なっている。この 6 名には、応募が少ないことが予想された理系の学生が 2 名、教員（文系）が 1 名含まれている。また、知人の場合、対象者の紹介を依頼しやすいということもあった。

他 9 名の対象者の募集手段は、結果的に、同志社大学での司書課程メーリングリスト：3 名、知人からの拡散：2 名、対象者からの拡散：2 名、拡散された第 3 者の Facebook の投稿から：1 名、知人の家族：1 名、という内訳であった。

性別は、女性が 6 名、男性が 9 名だった。

対象者の詳細は後述するが、ある程度の多様性は確保できたと考えている。

第 3 項　調査期間や場所など

インタビュー調査を実施した期間は、2020 年 2 月 17 日から 4 月 21 日である。

インタビューの場所は、なるべく静かで話しやすいところを選択した。Skype を希望した対象者の場合は、Skype で実施した。

Skype 以外の実施場所は、大学内の共有スペースや、ラーニング・コモンズ、教室や演習室、図書館のグループ学習室とした。

インタビュー実施時期が、新型コロナウイルス感染症（COVID-19）の感染拡大が問題となっている時期と重なっていた。そのため、インタビューに当たって、必要以上に心理的負担が生じないように配慮した。インタビュー時期の状況に応じて、対象者に対して、延期やオンラインへの変更を照会した場合もある。

特に 4 月に実施したインタビューについては、オンライン実施を第 1 候補とし、対面かオンラインかは、対象者の希望に沿うようにした。対面で実施の場合でも、窓を開放して換気を行い、マスク着用にて感染防止策を取った。

調査対象者には、2,000 円分の図書カードを謝礼として準備した。

インタビュー前には、説明文書を提示し、研究目的、調査実施者および指導教員の氏名・所属、インタビュー内容の取扱い、個人が特定される形で公開を行わないこと、参加の辞退は自由であること、辞退や回答内容によって不利益が生じないことを説明した。併せて、インタビューに正しい答え・間違った答えがあるわけではなく、考えを率直に聞かせていただきたいことを説明した。さらに、意思疎通がスムーズにできるように、用語の確認を

行った。具体的には「OPAC」は蔵書検索を意味することに加えて、調査シートに記載された「WSD」は、大阪大学では「まとめて検索」、同志社大学では「DOGS Plus」と呼ばれるものであること、筆者が誤って「ディスカバリー」と発言する懸念もあったため、それは同じものであることも念のため説明した。

なお、両大学とも OPAC 画面に CiNii Books などのタブがあり、切り替えることで蔵書以外の検索も可能であったが、OPAC という用語は蔵書検索と理解されていると想定できたので、その前提でインタビューを進めた。タブ切り替えのことを再確認すると時間を要することのほか、インタビューの焦点がずれる懸念があったためである。もし対象者が OPAC 画面から蔵書以外の検索をしている発話があった際には、その旨を確認しつつインタビューを進めることとした。

インタビューに当たっては、対象者の許可を得て IC レコーダで録音し、後日文字起こしを行った。インタビューは筆者が実施した。インタビューの際には、調査対象者の発言内容を誘導することにならないように注意して実施した。

第 3 節　インタビュー項目精査のための事前調査

インタビュー項目を精査するために、事前調査として、同志社大学での授業レポートを参考にした。また、インタビュー予備調査を行った。以下に概略を述べる。

第 1 項　同志社大学での授業レポート

筆者の指導教員である原田隆史教授が担当する授業で受講生に WSD に関するレポート提出が指示された。その結果について、インタビュー予備調査を検討する際に参考にした。例えば、メリットとして多く挙げられたことを一部インタビュー項目に含めるといったことを行った。

その授業レポートの概要は以下の通りである。

・対象：　同志社大学　2017 年度・春学期「図書館情報学概論」受講者。

・方法：　授業レポートして、担当教員から指示、担当教員が回収。

・レポート課題の内容：　DOORS（同志社大学での OPAC）と DOGS Plus（同志社大学での WSD）の両方を使い、その感想を述べよ。分量は限定しないが、最低でも 1 ページ。その際、最初に DOORS と DOGS Plus の使いやすさについて、5

段階で答える（1＝とても使いにくい ～ 5＝とても使いやすい)。

また、DOORS（またはDOGS Plus）が使いにくいと感じるようなことがあるか（大きな違いはあるか)、あるとしたら、どの部分がどのような点で使いにくいと感じるかを含めて書く。

・調査時期：　2017年7月。

・回答者：　97名　（いずれも調査に使用することを許諾いただいた)。

この授業レポートの内容を簡単にまとめてみた。内容は以下の通りである。

・同志社大学のOPACとWSDの使いやすさの評価に、全体としては大きな差は見られない。ただし、「多機能＝よいこと」という印象が、「使いやすさ」評価を押し上げた可能性もある。

・OPACでプラス評価の多かった項目：

「様々な角度」での検索（詳細検索や分類検索など)、「検索結果画面」、「My DOORS」、資料の「書誌・所在情報」を適切に表示すること。

「検索対象の広さ」は、プラス評価とマイナス評価が同じ程度見られた。

・WSDでプラス評価の多かった項目：

「検索対象の幅広さ」、「ファセット」、「詳細検索」、「関連資料の提示」、「画面デザイン」など。但し、OPACにも存在する「ファセット」、「詳細検索」などは、必ずしもWSD固有の機能とは言えないものである。

・WSDの「検索結果の数」が多いことをマイナス評価する回答者は10名以上見られたが、それよりも「検索対象の広さ」をプラス評価する数が多い結果が得られた。

・検索対象が特定されている場合はDOORSが適しており、不特定の場合はDOGS Plusが適しているという意見が多く見られた。検索対象の広さによって、不特定の場合はDOGS Plusが適しているという意見につながったと推測する。一方で、逆の声（特定されている場合にDOGS Plusが適している）が一定数存在した。

なお、レポート内容が機能を単に記述したのか、プラスないしマイナス評価の記述をしたのかの判別が困難なものもあった。また、回答者が、パソコンの画面を見ているのか、スマートフォンで見ているかは不明であった。

第 2 項　インタビュー予備調査

先行研究等を参考に、本調査を想定したインタビューシートを作成し、インタビュー予備調査を行った。この調査の概要は以下の通りである。

・対象：　WSD を利用している教員・大学院生・学部生。
・募集方法：　同志社大学・原田隆史ゼミのメーリングリスト、SNS、ブログ、同志社大学・総合政策科学研究科の教員への紹介依頼、知人。
　＊謝礼として、500 円の図書カードを準備した。
・調査方法：　半構造化インタビュー。1 対 1 のインタビュー、ないし 3 名までのグループインタビュー。
・調査日：　2018 年 2 月 11 日～17 日、および 3 月 1 日～16 日。
・対象者：　14 名。
　内訳 : 学部生 7 名（大阪大学 1、立命館大学 3、筑波大学 2、佛教大学 1)。
　大学院生 5 名 (同志社大学 2、大阪大学 1、京都大学 1、筑波大学 1)。
　教員 2 名（同志社大学 1、大阪大学 1)。
・インタビュー場所：　図書館のグループ学習室、空き教室、大学内の共有スペース等。

この予備調査を通じて、前述のように研究目的との対応確認、有用な発言が得られるかの点から、インタビュー項目の一部削除などの調整、話しやすくするための順序の調整、所要時間の検討を行った。なお、予備調査では効率性を重視して、グループインタビューも行った。

また、予備調査で浮き上がってきた課題が、対象者のスキルや習熟度の面での統制である。WSD に習熟し、活用している利用者を対象にする方が有意義な結果が得られるという考えもあったが、何ができていれば「習熟」と見なすのか定義するのは困難であり、仮に定義したとしても、調査結果に調査者のバイアスが強く影響する懸念もあった。

実際に予備調査を行ったところ、WSD を「あまり使っていない」と話す対象者から当人なりの利用方法が説明されることもあった。これを「不適切な利用」と結論付けるのは不適当であり、利用方法の 1 つと見なすべきと考えた。なお、1 回程度しか使っていない対象者や、何年か前に利用して以来使っていないという対象者からも、興味深い結果が得られたことも付言しておく。

どの程度使用していれば「活用」あるいは「習熟」なのか、対象者自身は分からない。そこで、WSD 利用の「頻度」と「理解度」を、対象者募集時のアンケートで質問し、それをインタビュー時に確認することとした。

なお、「頻度」については、文献検索の場面で WSD をどの程度使用しているか質問することとし、「理解度」については、WSD の使い方を「自分なりに」どの程度理解しているかを質問することとした。併せて「理解度」を類推することも兼ねて、WSD の「利用期間」と、他のツールとの「使い分け」をしているかを質問することとした。

これ以外の点として、対象者の所属大学を 1 つに限定するかという点も検討した。ソフトウェアという要素を統一するためには限定する方がよいとも考えたが、本研究では画面の詳細について調査するわけではない。同一規模の総合大学であれば、対象者の個別性はあったとしても、調査自体は汎用的に聞けることが多いと考えた。

他には、WSD を活用している対象者からは、WSD のメリットが発話に多く現れる一方で、改善材料となり得るデメリットの発話が少なくなると考えたが、これについてはあくまで利用経験者を対象とした本研究の結果と受け止めることとした。

第 4 節　インタビュー項目

インタビュー項目については、先行研究を参考に、あるいは一部借用して、内容を構成した。前述の予備調査の結果も参考にした。本研究の目的との整合性を考慮して、修正を加えた。また、質問の順序については、話しやすさを考慮した。

以下、インタビュー項目と、その根拠としたことを記述する。

なお、学習・研究分野や、WSD の利用頻度、理解度・使い分けの自己認識などについては、応募時のフォームに入力していただくようにした。これは、応募者の属性を確認しつつ、なるべく多様な対象者の募集を進めるためである。

■対象者の学習・研究分野

分野は、平成 29（2017）年度科学研究費補助金の「系・分野」を採用した（URL 40）。併せて、より詳細な分野名を確認することとした。

なお、平成 30（2018）年度の科学研究費補助金より使用されている「審査区分表」の分野は、分け方が細かくなっており、インタビューの際に対象者に余計な混乱を引き起こす

ことを懸念した。平成 29（2017）年度の分け方がより円滑に進められると考え、これを採用した。

■導入

・「図書」を探す際に、好んで使うサービスは何か。その順位付けはどのようなものか。

・「雑誌論文」を探す際に、好んで使うサービス何か。その順位付けはどのようなものか。

これら 2 つは、2017 年 10 月にアメリカで開催された EBSCO User Group 2017 において、Comeaux, D. and Waugh, M. が発表した Louisiana State University での図書館員・利用者調査をアレンジした。本調査では、対象者の慣れやルーティンを把握する意味で質問した。なお、本発表資料は非公表であるが、筆者は参加者として入手した。

・他によく使う文献調査ツールは何か。

これは上記を補足するものとして質問した。

・文献検索の頻度はどの程度か。

対象者の回答背景を理解するために、文献検索の頻度を質問した。回答を簡便にするために選択肢を設けた。その選択肢は倉田ほか（2009）を参考にした。

■WSD 全般について

・「文献検索の場面で」、WSD をどの程度使うか。

前述の予備調査で課題となった、WSD「活用度」を類推するための「頻度」についての質問である。

・WSD の存在を知ったきっかけ、使い始めたきっかけは何か。それはいつ頃か。

大学図書館側の広報などの参考になると想定した質問である。

・どのくらいの期間、使っているか。

・WSD の使い方を、「自分なりに」理解していると思うか。

・WSD の使い分けを、「自分なりに」していると思うか。

これらも調査対象者の「活用度」を類推するための「理解度」についての質問である。

「自分なりに」としたのは、単に「どの程度理解していると思うか」と質問すると、回答に謙遜の要素が含まれることを懸念したからである。客観的な基準がないことから、回答はいずれにせよ自己認識となる。そのため謙遜の要素をなるべく少なくして、対象者の認識が分かることを期待した。

・WSD の満足度はどの程度か。

対象者の WSD に対する意識を問う質問である。回答を簡便にするために選択肢を設けた。その選択肢は Lundrigan, Manuel and Yan（2015）を参考にした。

■最近の WSD 利用、あるいは自分の一般的な WSD 利用方法

利用場面の質問については、Flanagan（1954）によるクリティカル・インシデント法を参考にした。この手法は、第 2 次世界大戦の際、米軍の取組の中で発展したとされ、特定の状況での行動に関連する一定の重要な事実を収集する手法とされる。

併せて、同法を職務分析に適用し、Situation（状況。文脈や、行動を引き起こしたイベントを含む）、Response（反応）、Outcome（反応による成果）を分析する調査（Harvey et al. 2007）、同法を参考にした老年看護実習での事故分析で「いつ」「なぜ」「どのように」「結果」「どう感じたか」「他の行動」に触れた調査（中野ほか 2007）も参考にした。

・最近いつ利用したか。

・利用した直接的な状況はどのようなものか（レポート、発表等）。

・利用したきっかけ、理由は何か（〇〇について調べる、〇〇がなかった等）。

・何を調べたか（図書・雑誌論文、日本語・英語、または具体的に）。

・どんなキーワードを使ったか。

これらは、上記のクリティカル・インシデント法による質問である。但し、「どう感じたか」や「他の行動」については、前述の予備調査で対象者からあまり有用な発言が得られず、インタビュー時間も考慮して、質問内容に含めなかった。

・利用する場面はどのようなものか。

対象者が、最近の具体的な利用場面よりも、一般的な利用場面の方が話しやすい場合は、一般的な場面を回答してもらうこととした。

・WSD 以外のツールについて、最近使用したなら、それはいつか／きっかけは何か／何を調べたか／キーワードは何か／どんな情報を入手したか／何を感じか。

WSD のことだけを質問すると、対象者の文献検索行動の全体が見えないことから、WSD 以外のツールについても質問することとした。これにより、調査対象者の WSD に対する意識が推定できることも期待した。

■WSD のメリット（とされること）について

・WSD の好きな点・良い点はどこか。

まず、調査対象者に予断を与えずに、WSD の好きな点・良い点を発言してもらうため、オープンに質問することとした。

・雑誌記事、多様な媒体などを含めて検索対象が広いことについて、どのように思うか。

・ファセットでの絞り込みについて、どのように思うか。

・詳細検索について、どのように思うか。

・関連資料がヒットすることについて（検索語に関連する資料、予想していない媒体など）、どのように思うか。

・表記の違いや、不完全ワードでもヒットすることについて、どのように思うか。

これらは、WSD のメリットとされる点について、調査対象者の印象を質問するものである。発言を誘導することにならないように、メリットと「言われている点」と強調してインタビューした。

これらのメリットとされる点については、WSD や次世代 OPAC の代表的な文献や資料、前述の予備調査での回答内容を参考にした（表 2）。原則的に文献などで言及されている数が多いものを選択した。

	統合検索、対象の幅	ファセット	詳細検索	関連資料	表記の違い	ソート	基本表示	シンプル検索ボックス	他のWebと連携	関連語サジェスト	目次や要約	フルテキストへリンク	利用者参加	RSS	その他
工藤・片岡(2008)	○	○			スペルチェック	○	表紙イメージ、アイコン			ワードクラウド			コメント	○	
久保山(2008)	○	○		リコメンド	スペルチェック	適合度		○		○	○				
兵藤ほか(2010)	○	○					○	○	○		○				
飯野(2015a)	Web Scale	○													
飯野(2016)での要件	○					適合度		○							クラウド
Summonリーフレット(サンメディア2014頃?)	○	○	○		類義語検索、スペルチェック	○	視覚的に表現		貸出状況など表示	オートコンプリート		○			プレビュー、カスタマイズ、書誌情報エクスポートなど
Primoリーフレット(ユサコ2017)	○	○		異なる版		関連度	シンプルなインターフェース	○	貸出状況など表示			○			個人スペースなど
EDSリーフレット(エブスコ2018頃?)	○	○		○	＊別の製品紹介にあり	適合度			図書館システムとのAPI連携	オートコンプリート	○	○			検索精度、カスタマイズなど
Yang and Hofmann(2011)		○		リコメンド	スペルチェック	適合度	表紙イメージなど	○	SNS				タグやコメント	○	パーマリンク
事前調査、同志社大学での授業レポート(97名)。10名以上が言及	○	○	○	○			デザイン				ジャパンナレッジ、あらすじ				プレビュー、保存
言及数	9	9	2	5	5	7	6	5	5	4	4	3	2	2	

表 2　文献などに WSD のメリットとして言及された機能。「○」ないし文字で記載したものが言及された機能。塗りつぶし項目はインタビューに採用。

質問内容への採用／不採用について、以下、少し補足しておく。

「詳細検索」については、言及数は少なかったが、予備調査でこれに魅力を感じている複数の回答者がいたため、質問内容に含めた。「ソート」機能はメリットとしての言及数が多いが、適合度順表示の不適切さという点でデメリットとして言及されることも多いため、デメリットの質問内容に含めた。「基本表示」機能や「シンプル検索ボックス」、「他の Web との連携」なども言及数が多いが、答えにくさや、重要度、インタビュー時間全体を考慮して質問内容に含めなかった。

■WSD のデメリット（とされること）について

・WSD の好きでない点・悪い点はどこか。

メリットでの質問と同様に、まず、予断を与えないように、オープンに質問することとした。

・「検索結果が多すぎて使いにくい」という声も聞かれるが、どのように思うか。

・「検索結果に関係のない（小さい）資料が上位に出てくることもある」と言われるが、どのように思うか。

・検索対象になっていないコンテンツもあるが、どのように思うか。

これらは、WSD のデメリットとされる点について、調査対象者の印象を質問するものである。発言を誘導することにならないように、メリットについての質問以上に、「○○と言われることもあるが」と強調してインタビューした。

ここで取り上げた点は、メリットと同様に、WSD や次世代 OPAC の代表的な文献や資料、前述の予備調査での回答内容を参考にした（表 3）。

	検索結果	適合度	非対象コンテンツ	利用者の思い込み	日本語KW非認識	その他
飯野（2015a）	違和感					
飯野（2015b）	多すぎる。スケールの錯視	○	○	○	○	
Scott and Reese（2012）	多すぎる	○	○			目録の特定性（specificity）の欠如、データベース機能の欠如
事前調査、同志社大学での授業レポート（97名）。10名以上が言及	多すぎる					レスポンス
言及数	4	2	2	1	1	

表 3　文献などに WSD のデメリットとして言及されたこと。「○」ないし文字で記載したものが言及されたこと。塗りつぶし項目はインタビューに採用。

■WSD について、見解の異なる印象論について

・WSD は、文献データベースの使い分けを（それほど）意識しなくて済むため「学部生向け」とか「初学者向け」と言われることもあるが、どのように思うか。

この質問は、先行研究や事例報告で触れられたように、WSD は学部生や初学者向けなのか、大学院生や研究者にも使われるものなのかという点について、利用者自身の考えを聞くために質問するものである。

・「日本語論文を調べるなら、CiNii Articles が十分で、的確」という意見もあるが、どのように思うか。

・学部生の場合、紙の図書で学習やレポート作成をするから、WSD ではなく OPAC を優先して使う（使用を推奨する）という意見もあるが、どのように思うか。

これらは、認知度が高いと思われる CiNii Articles との比較や、WSD が「学部生向け」と言われることとは逆の観点から、学部生は OPAC 優先という意見について利用者自身の考えを聞くために質問するものである。

これらに質問も、対象者自身の考えを話していただくことを強調してインタビューした。

■メジャーな検索ツールの存在

・日本語論文の検索に CiNii Articles を利用しているか。利用するとしても、WSD を使っているか。

・個別の文献データベース（あるいは、ご自身の研究分野で、メジャーな文献検索ツール）を利用するか。利用する場合、それはどのようなものか。WSD との使い分けはするか。どのように使い分けをするか。

・Google Scholar を利用するか。WSD との使い分けはどのようにするか。使わない場合、理由は何か。

・OPAC を利用するか。WSD との使い分けはどのようにするか。使わない場合、理由は何か。

これらの質問は、WSD 以外の代表的な文献検索ツールとの比較や併用について、質問するものである。これにより、調査対象者にとっての WSD の位置づけがより明確になることを期待した。

■文献調査の流れ、および全体の振り返り

・WSD を文献調査の初期段階で、最初に使うことがあるか。

・WSD だけで文献調査全体が（時には WSD だけで済むとしても）完結することはないか。

インタビューの最後に、文献調査の流れを質問しつつ、インタビュー全体を確認するようにした。

インタビューシートの一部を、参考までに以下に示す（表 4)。但し、筆者のメモを削除するなどの編集を加えている。

42	■WSDのメリット（とされること）について		
43		・WSDの好きな点・良い点はどこですか。	
44			
45		・雑誌記事、多様な媒体などを含めて検索対象が広いことについて	
46			
47		・ファセットでの絞り込みについて	
48		－ 使っている　→便利／便利でない　→理由 － 使っていない　→他のツールでは？	
49		・詳細検索について	
50		－ 使っている　→便利／便利でない　→理由 － 使っていない　→他のツールでは？	
51		・関連資料がヒットすることについて （KWに関連する資料、予想していない媒体など）	
52			

表 4　インタビューシート（一部）

また、前述の予備調査を経て、内容やインタビューに要する時間の点で、除外した項目もある。以下、主なものを紹介する。

WSD の個別機能のいくつかについて、調査対象者の印象を質問することは除外した。具体的には、あらすじや目次の表示、Summon に見られるジャパンナレッジの用語解説の表示や、検索結果画面でのプレビュー、そして検索結果の保存機能などである。これらは、前述の事前調査の 1 つである、同志社大学での授業レポートで言及数が多かったものであり、WSD ベンダーの説明で触れられることもあった。しかし、予備調査で有用と思われる発言はあまり得られなかった。検索結果の保存機能については、使用しているという回答がほぼなく、あえて本調査で質問する必要はないと判断した。

「文献調査する際のスタートページ」についての質問も、予備調査の途中で除外した。

調査対象者の日常的な検索行動を把握することを期待したが、本研究の目的から離れること、および、インタビューの所要時間の点から、除外した。

最近の WSD 利用について「検索後に情報を入手したか。したとしたら、どんな情報を入手したか」については、本研究の目的につながらないと判断したため、除外した。「どう感じたか」や「他の行動」についても、前述の通り除外した。

「WSD がなければ、英語論文はどのように調査するか」についても、除外した。当初は、調査対象者は英語論文をまとめて検索できることに魅力を感じていると想定していたが、予備調査から必ずしもそうではないことが分かった。あえて含める質問ではないと判断したため、除外した。

「OPAC で電子ブック・リポジトリ・学位論文などが検索できることについて、意識して使用しているか。どのような印象を持っているか」については、本研究の目的から離れること、および、あまり有用な回答が得られないと判断したため、除外した。

「図書館からのガイダンス、画面上の案内への期待」については、先行研究で触れられることがあったが、本研究の目的から離れること、および、あまり有用な回答が得られないと判断したため、除外した。なお、この質問に対して予備調査において、ある大学の学部 3 年生（当時）から、「画面が味気ない。楽しい色にしてほしい。気持ちが下がる」という旨の発言もあった。

「WSD の印象」、「探しているものが WSD で見つけられるか」、「フルテキストへのアクセスは簡単か」、「WSD の利用はどの程度簡単（難しい）か」については、先行研究で質問しているものもあったが、本研究の目的からやや離れること、および、インタビューの所要時間の点からも、あえて含める質問ではないと判断したため、除外した。

第 4 章　インタビューの結果

第 1 節　対象者の概要

調査対象者を以下に示す（表 5)。計 15 名である。

No.	所属大学	学部・研究科	身分	分野	予備調査	Skype	利用頻度	理解度	利用期間	使い分け	満足度
1	大阪大学	工学部	B1	理工		○	**b**	**b**	c	c	5～4
2	同志社大学	文学部	B2	人文社会			**b**	**b**	a	b	4
3	大阪大学	医学部	B3	生物		○	c	**b**	b	b	5～4 (4に近い)
4	大阪大学	外国語学部	B4	人文社会			**b**	c	a	c	4
5	同志社大学	文学部	B4	人文社会			**b**	c	a	a	3
6	大阪大学	医学部	学部卒	生物	○	○	**b ＊「a」に近い**	**a**	a	a	4
7	大阪大学	言語文化研究科	M1	人文社会			c	c	d	a	3
8	大阪大学	人間科学研究科	M2	人文社会			**b**	**b**	a	b	Z
9	同志社大学	文化情報学研究科	M2	理工			c	d	b	a	4
10	大阪大学	国際公共政策研究科	修士修了	人文社会		○	**b**	**b**	a	b	4
11	大阪大学	理学研究科	D2	理工	○		c ＊修士では「a」	**b**	a	b	4
12	大阪大学	文学研究科	D3	人文社会			**b**	c	c	b	3
13	同志社大学	文学研究科	D4	人文社会			d	**b**	a	a	Z
14	同志社大学	政策学部	教員(退職)	人文社会	○		**a**	**b**	a	a	5
15	同志社大学	文化情報学部	教員	総合			c	**b**	a	b	4

表 5　対象者一覧(学年順。教員は最後に記載。同じ場合はインタビュー日順)
＊利用頻度：　文献検索での WSD 利用頻度。a：比較的頻繁、b：時々、c：あまり使わない、d：(現在は) ほぼ使っていない。
＊理解度：　WSD を自分なりに理解しているか。a：そう思う、b：ある程度はそう思う、c：あまりそう思わない、d：そう思わない。
＊利用頻度と理解度のいずれかが「a」は濃い塗りつぶし、いずれかが「b」は薄い塗りつぶしとした（対象者 13 を除く)。

大学別の内訳は、大阪大学：9 名、同志社大学：6 名である。

身分別の内訳は、学部 1-2 年：2 名、学部 3-6 年：4 名（6 年制学部卒業者 1 名含む)、大学院生：7 名（修士修了 1 名含む)、教員：2 名（退職者 1 名含む）である。

なお、対象者 1～3 は、インタビューは 4 月に実施したが、身分は 2020 年 3 月時点で記

載している。

対象者には卒業者などが 3 名含まれている。いずれも対象大学を離れてから、1 年ないし 2 年である。対象者 6、14 は予備調査の対象者でもあったため、誘導にならないよう配慮しつつ、予備調査時の発話を伝えて当時の印象などを思い出してもらいながら実施した。

分野は、総合：1 名、人文社会：9 名、理工：3 名、生物 2 名である。文系理系という面では、それぞれ、9 名と 6 名である。

予備調査のインタビューの対象者だった者は、表に「○」を付した。Skype でインタビューした対象者は、表に「○」を付した。

WSD の利用頻度（文献検索の場面で）は、「a：比較的頻繁」・「b：時々」・「c：あまり使わない」・「d：(現在は) ほぼ使っていない」と区分した。これについては後述するが、「b：時々」と「c：あまり使わない」で 13 名を占めることになった。

事前アンケートで「ほぼ使っていない」と回答した方はインタビュー対象から除外させていただいたが、対象者 13 はインタビューでの発話内容から、否定的な理由で使用を中止され、最近はほぼ使っていないことから、「d：(現在は) ほぼ使っていない」と区分した。分析対象とするか検討したが、利用経験はあり、司書などの立場も経験されていることから、メリットに関する発言などは分析対象とした。一方、否定的な理由で利用を中止された人のデメリットや利用状況についての発話などは、本研究の目的に含まれないと判断したため、分析から一部除外した。なお、本調査では、対象者として WSD をその人なりに利用されている方を想定していた。しかし、募集時の案内で卒業生なども想定して、対象者を「使われている方、使われた経験のある方」と不十分な表現としてしまったためと思われるが、本調査では不使用者に近いと見なせる方が対象者に入ってしまった。

WSD を自分なりに理解しているかについては、「a：そう思う」1 名、「b：ある程度はそう思う」9 名、「c：あまりそう思わない」4 名、「d：そう思わない」1 名、という内訳であった。

これら利用頻度と理解度について、便宜的に表の上で塗りつぶしの濃さで分けた。いずれかが「a」となる対象者は、濃い塗りつぶしとした。いずれかが「b」となる対象者は薄い塗りつぶしとした（利用頻度が「d」となる対象者を除く）。

WSD の利用期間は、「a：1 年以上」が 10 名、「b：半年～1 年未満」が 2 名、「c：3 ヶ月～半年未満」が 2 名、「d：2 ヶ月未満」が 1 名という内訳であった。本調査の対象者は、

比較的長く利用している者が多かった。

WSD の使い分けを自分なりにしているかについては、「a：そう思う」が 6 名、「b：ある程度はそう思う」が 7 名、「c：あまりそう思わない」が 2 名という内訳であった。本調査の対象者は、ある程度 WSD について理解しており、他のツールと意識して使い分けをしている者が多かった。

WSD の満足度については、比較的満足度が高い者が対象者となった。ある程度 WSD の利用を継続していることから、当然のことかもしれない。内訳は、以下の通りだった。

- 「５（非常に満足）」　１名（対象者 14）
- 「５～４（普通に満足）」　２名（対象者 1、3）
- 「４（普通に満足）」　７名（対象者 2、4、6、9～11、15）
- 「３（どちらでもない）」　３名（対象者 5、7、12）
- 「Z（分からない・評価しがたい）」　２名（対象者 8、13）
- 「２（不満）」や「１（非常に不満）」　０名

インタビュー時間は、概ね 45 分～1 時間 20 分の間であった。Skype を用いた場合は、事前にインタビューシートをメールで送付した。そのためか対面形式よりも淡々と進むと感じられたこともあった。時間も短くなる傾向があった。なお、対象者 10 はインタビューシートに回答を一部記入したものを、インタビュー前に自発的に送っていただいた。そのため、以下で対象者 10 の発話を紹介している場合、そこに記入された文言の場合がある。

以上のような対象者の傾向を念頭に置きつつ、以下ではインタビューデータの分析を述べる。

第 2 節　インタビューデータの分析

インタビューデータの分析は、主に以下の方法で行う。

まず、インタビューシートの項目に沿って、分析を行う。文字起こしのテキストを繰り返し読み込んだ上で、発話からキーワードやキーセンテンスを見出し、分析シートに抜き出しを行った。抜き出した発話を同じ概念の下に類型化できる場合、その概念の下に発話を整理した。Yes/No や肯定/否定のように、複数に分けやすい内容は単に多肢選択のように整理し、背景や理由をさらに整理できる場合は、同じ概念の下に類型化した。これらの作業は一度で妥当な分け方にはなりづらいため、妥当性が十分と思われるまで繰り返し行

った。

分析シートの一部を、参考までに以下に示す（表 6）。但し、筆者のメモを削除するなどの編集を加えている。

	■好きな点・良い点				
<概念> ------ 対象者	a) 幅広さ （11名） （検索対象が幅広い）	b) 画面デザイン （9名） （画面表示全般について。例えば、見やすさ、情報提示の分かりやすさ、操作のしやすさなど）	b) 画面デザイン ・全文入手の案内表示 （内4名）	c) 全文利用 （5名） （全文の入手ができる）	d) 絞り込み（5名） （ファセット等で検索結果・対象を絞り込むこと）
1		・「**見やすい**ので、すごい」 「（書籍なら）正面のタイトルのところが見え、**画像で（表紙が）載ってる**」 「（検索結果一覧で）**出版年とかもパッと見で、すごい見やすく**なってる」			・「数少ない論文を（英語で）検索する時」 「（画面左の「スペースに自動的にANDを入れて検索」は）すごい助かりましたね。1、2回くらいしか調べてないですけど」 「ANDで勝手に繋げてくれるんだったらいいかなって調べたら、いい感じに（なった）」
2	・「**いろんな雑誌論文**とかの資料を見ることができること」	・「視覚的に見た時に見やすい」 「（検索結果一覧で）**図書なのか、雑誌のオンラインなのか**」	・「雑誌論文だった**ら本文があるか**どうか」		
3		・「デザインがPubMedとか他と比べても結構**シンプルに統一されてるイメージ**」 「最初に初心者が探す時とかでも、便利で使いやすいのかなっていうイメージ」 ・「**詳細（検索）のところが、ほんとにどこを拾ったらどういう検索になりますよっていう指示が分かりやすい**のかなっていう気がします。（「検索モード」のところで）スペースに例えば"AND"を入れて検索とか」		・「さっきのあのフルテキストの話」 （**PubMedで見られないけど、WSD・イチョウマークから見られる**）	

表 6　分析シート（一部）

次に、インタビューシートの想定を超えた発話もあったため、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）に基づき、木下（2003：187-206）を参考に、分析ワークシートを作成した。この分析ワークシートには、概念名・定義・ヴァリエーション（具体例）・理論的メモを記載した。

この分析ワークシートの一部を、参考までに以下に示す（表 7）。但し、一部を削除するなどの編集を加えている。

概念名	WSD自体の名称、イメージ
定義	WSDの名称から伝わる機能のイメージについて、プラスおよびマイナスの評価。あるいは、WSDに対するイメージ。
ヴァリエーション（プラス）	・「名前が僕はすごい良いと思ってて。ここに入れたらなんか出てくるんだなって思ってやってみたのが最初だったのはありますね」（対象者6） ・「『まとめて検索』っての名前がすごい僕は（良いと思ってて）、『あ、これは多分まとめて検索してくれるんだな』って、そういうの全部」（対象者6） ・「"まとめて検索"っていうそのキーワードは（自分の記憶に）あった…と思いますね。結構これはいい機能なんじゃないかなっていうのが、そのキーワード見て思って、ちょっと使うようになったっていう」（対象者7） ・「電子ジャーナルとか全部検索したいなって思ったら、名前でこれだったら多分その全部のデータベースでやってくれるんだろうなっていうの分かったんで、たぶん使ったって感じだったと思います」（対象者11）
ヴァリエーション（マイナス）	・「Google Scholarとか…CiNiiとか…JSTORとかっていうのは…世界的には、あるいは日本の中で信頼できる（ツール）としては、まあ認識されてますよね」 「そういう意味でそれらは安心して使えるんですけど、これ（WSD）は信用してないっていうわけではないんですけど…まあ言ってしまえば、ちょっと得体が知れないというか」（対象者7） ・「ブランド名が足りないですね」「あまり知名度がない」 「運営されてる団体の規模みたいなのってどんな感じなんだろうっていう時に、ぱっとは出てこないと思うんですよ。Google Scholarさんと違って」 「Google Scholarでぱって聞いた時に…検索専門の会社で、世界一の会社だし…アカデミックの人ともすごい関わりがあるだろうから、まさか下手はこかないだろうみたいな。そういう謎の安心感がある」（対象者9）
理論的メモ	・名称によって、利用者に伝わる機能のイメージは大きく異なる。 ・WSDの「サーチ（検索）でなく、"ディスカバリー（発見）"」と提供側で言われることのある、ポジティブなイメージやブランド力は、利用者に伝わらない。

表７　分析ワークシート（一部）

なお、以下の記述では、便宜的に発話者数を示しているが、本研究はあくまで質的研究であるため、発話者数が対象者の傾向を示すだけであって、全体的な傾向を示唆するかどうかは、さらなる検討が必要である。

第１項　インタビューシートの項目から

本項では、基本的にインタビューシートの順に、全般的なことから好きな点・良い点など個別的なことについて、下記の①から⑫に分けてインタビュー結果を整理する。

①『図書』／『雑誌論文』を探す際に WSD を利用するか

②WSD 利用頻度

③WSD の存在を知ったきっかけ、使い始めたきっかけ

④WSD を利用した状況、調べたこと

⑤利用目的

⑥WSD の好きな点・良い点

⑦WSD のメリットとされることについて

⑧WSD の好きでない点・悪い点

⑨WSD のデメリットとされることについて

⑩WSD について、見解の異なる印象論

⑪メジャーな検索ツールの存在

⑫文献調査の流れ

①『図書』／『雑誌論文』を探す際に WSD を利用するか

インタビュー冒頭で、「『図書』／『雑誌論文』を探す際に、好んで使うサービス、順位付け」を質問した。ここでの発話に、WSD がどのように現れるか整理してみた。但し、利用頻度は考慮せず、明示されなくてもインタビューの文脈から推定できる場合は、推定によった。

・「図書」を探す際に WSD を使用： 5 名（対象者 1、2、5、10、14）

・「雑誌論文」を探す際に WSD を使用： 13 名（対象者 2～12、14、15）

図書を探す際に、WSD を利用する対象者は 5 名に留まった。その内 4 名は、OPAC がメイン（対象者 1、2）、WSD 以外でほぼ完結（対象者 5）、WSD は「補足的に」（対象者 10）と、利用頻度は低いようであった。一方、利用頻度の高い対象者 14 は、和書でも洋書でも「DOGS Plus をメインに使うようになってた」という発話があった。

逆に、雑誌論文を探す際に WSD を利用する対象者は多かった。利用しない 2 名の内 1 名は、学部 1 年生の対象者 1 であり、もう 1 名は WSD を現在はほぼ使用しない対象者 13 である。つまり、学部 2 年生以上の対象者全員は雑誌論文を探す際に WSD を利用していたこととなる。利用頻度の高い対象者 14 は「これ（WSD）を知ってしまった後は、こっち（WSD）だけ」というほどであった。

②WSD 利用頻度

本調査の対象者の WSD 利用頻度は以下の通りである。

・a）比較的頻繁：　1 名（対象者 14）

・b）時々（毎回ではないが自分の行動パターンにあり）：　8 名

（対象者 1、2、4～6、10、12）　＊対象者 6 は「a」近い。

・c）あまり使わない（まれに使用/最後の手段的に）：　5 名

（対象者 3、7、9、11、15）　＊対象者 11 は修士課程の時は「a」。

・d）（現在は）ほぼ使っていない：　1 名（対象者 13）

本調査の対象者は、「b）時々」～「c）あまり使わない」が大半であった。WSD 以外にメインとなる検索ツールがあり、WSD はサブツールとして使用する対象者が多かった。「a）比較的頻繁」は、対象者 14 の 1 名であった。対象者 6 は「b）時々」であるが「a）比較的頻繁」に近いとのことで、「大学の中のサービスでは僕一番頼りにしてた」、「もう（検索）行動の中にもちろん入ってました」という発話もあった。対象者 11 は、修士課程の時は「a）比較的頻繁」とのことであった。

筆者がインタビュー対象者を募集した時の印象としても、調査対象大学では WSD を高い頻度で使用している者が多いとは感じられなかった。

③WSD の存在を知ったきっかけ、使い始めたきっかけ

・a）自ら発見：　9 名（対象者 1、6、9～15）

・b）授業・ガイダンス：　4 名（対象者 2～5）

・c）他の教員や学生から：　1 名（対象者 8）

・d）その他：　1 名（対象者 7）

WSD を知ったきっかけとして、「a）自ら発見」が多い傾向があった。これは予備調査でも同じであった。本調査の対象者は学習や研究に積極的であり、文献情報の入手にも積極的と推察できる。それも背景となって WSD の存在を自ら発見した者が多かったと考えられる。

「b）授業・ガイダンス」の内 2 名は同志社大学の司書課程の授業で知ったとのことでる。これを除くと 2 名だけとなる。調査対象大学での授業やガイダンスの状況では、授業・ガイダンスによって知るという者は少数になるだろうと推測される。

以下、これらの内容を詳しく紹介する。

「a) 自ら発見」9 名の内、4 名は「検索ツールを自ら探していた時」という意味の明示的な発話があった（対象者 6、10、12、14)。他の 4 名は、図書館サイト（OPAC 含む）を使っている内に偶発的に知ったとのことであった（対象者 1、9、11、13)。もう 1 名の対象者 15 は、図書館員が講師を務める授業を、教員として「後ろで聞いていて、おー！という感じ」で知ったとのことであった。この発話は受講者として知ったというより偶発的に知ったと判断して、こちらに区分した。

「b) 授業・ガイダンス」4 名の内、2 名は同志社大学の司書課程授業で知ったとのことであり（対象者 2、5)、同志社大学での個別な事情と思われる。

他の 2 名は、対象者 3 と 4 である。対象者 3 は、3 年生の時（インタビューの約 1 年前）の図書館員による文献検索についての授業で知り、「先行の研究を調べる時に、その時に新しく WSD というものがあったので、試しに使わせてもらおうかなと思った」、「使いやすかったし、結構便利だと思いました」とのことだった。対象者 4 は、2 年生の時（インタビューの 2 年以上前）自由参加の図書館主催の説明会で知ったとのことである。

「c) 他の教員や学生から」という対象者 8 は、「文献が見つからないってぼやいてた時に（中略）先生がその場でパパパってほら WSD 出して『ほらあるわよ』って」教えられたという。「まとめて検索」の言葉自体は「(以前に）聞いたことはあったけど、何なんだろうと思ってた」とのことであった。

「d) その他」の対象者 7 は、「過去にちらっと目を通したことがあるかもしれないっていうくらい」で、明確に認識したのは「今回のアンケートのご連絡をいただいた時」とのことであった。

「c) 他の教員や学生から」に関連して、複数の大学院生の対象者から、WSD 以外の検索ツールや図書館のサービスは周囲から教えてもらうという発話があった。インタビューの打診をしている時にも、複数の大学院生から（WSD は知らなかったが）通常使っている検索ツールについては周囲から教えられるという発言もあった。

これらのことから、調査対象大学では、WSD を周囲から教えられることが相当少ない可能性がある。併せて、WSD の使用者が少なく、存在を認識している者自体も少ない可能性がある。他に、対象者 11 からは「研究室では、だから（WSD を）使ってない人が多いっていうのも、多分教えてないんかなーと思います」という発話もあった。

使い始めるきっかけを詳細にインタビューできなかったが、検索対象の広さなどについ

て、なんらかの価値認識をして使い始めたという発話もあった。それ以外には、検索エンジンに関心ある対象者 9 や 15 は、検索エンジンへの興味として使ったという発話もあった。学部 1 年生の対象者 1 からは、「何が違うのかなとか、その OPAC（を）見てた時にそっち（WSD）で検索したりとかっていう感じ。なんであんまりその、使い始めたって感じじゃない」という発話もあった。

④WSD を利用した状況、調べたこと

WSD の最近の利用、あるいは一般的な WSD 利用法について、話しやすい方を話していただいた。話の展開から、その両方に渡る場合もあった。その発言をいくつかの概念に分けて整理した（対象者 13 の発話はなかった）。

利用した状況については、授業や論文作成など広い意味で学習・研究の過程という発話が大半であった。しかし、対象者 1 からは、「（レポートなどではなく）自分が読みたい本を検索するのに使ってました」という発話もあった。

調べた対象について、この場面での発話を整理した。明確な発話がなかった場合、文脈から推定して区分したものもある。一般的な利用法を話していただく際、何を調べたかなどについて詳細を確認しにくかった場合もあった。

図書／雑誌論文という区分では、以下の通りであった。

・a）図書：　1 名（対象者 1）

・b）雑誌論文：　13 名（対象者 2～12、14、15）

・c）その他：　2 名（「b」と重複回答）（対象者 5、10）

明示的に「a）図書」を調べたという発話があったのは、対象者 1 のみであった。対象者 5、11 は、図書も対象に利用していたという発話があったが、「①」の好んで使うサービスを質問した場面では、図書を対象に WSD はほぼ使っていないということであった。

「b）雑誌論文」を調べたという発話があったのは、他の 13 名全員からであった。

「c）その他」は、「新聞記事とかやったり、いろんな記事」（対象者 5）や、書評（対象者 10）であった。書評については「例えば 3 種類くらい読むと、この文献には何が書いてあって、位置づけとか内容まで分かっちゃう」（対象者 10）という発話もあった。

このように WSD の利用法を質問して、学部 2 年生以上の対象者全員から「雑誌論文」

に触れる発話があった。「図書」に触れる対象者が非常に少なかったのは、対象者の学年が高いことも影響した可能性も考えられるが、調査対象大学では、WSD は主に「雑誌論文」の検索に利用されていることが示唆される。

また、高学年の方が雑誌論文を多く使用するという仮定に立てば、「WSD は学部生向け」という考えとは反対の結果となる。

⑤利用目的

対象者が WSD をどのような目的で利用しているのか、発話からいくつかの概念に分けて整理した。以下はそれぞれの概念に触れる発言をした対象者数であり、人数は重複している（対象者 13 の発話はなかった）。

- a）補完的に：　12 名（対象者 1～9、11、12、15）
- b）幅広く：　9 名（対象者 4～6、8、10～12、14、15）
- c）全文を入手する：　5 名（対象者 3、4、6、11、14）
- d）特定の文献を探す：　4 名（対象者 6、10、11、14）
- e）その他：　3 名（対象者 1、14、15）

「a）補完的に」とは、「他に文献検索のメインツールがあるが、サブツールとして使用する」というものである。対象者 10 と、WSD がメインツールであるという対象者 14 以外の全員がこれに触れる発話があった。対象者の利用頻度から、ある意味当然の結果かもしれない。しかし、利用シーンが見えてきたのは興味深い。

以下のような発話があった。

- 「（優先順位の高いツールを使って）それでも見つからない時に（中略）ディスカバリーサービスを主に使っている」（対象者 4）
- 「いつも使っている（中略）データベースでなかなかこう引っかからないテーマがちょっとありまして」、「広く検索できる DOGS Plus を一度使えば何か新しい情報が得られるのではないかと思って」（対象者 5）
- 「この 2 つ（Web of Science、CiNii Articles）で調べて何も出なかった時に、同じ検索ワードとかで調べる。だから最終手段みたいな感じ」（対象者 11）
- 「手の届かないというか目の行きづらいところを、ちょっと多少役に立つかなぐらいの（中略）かすかな希望を抱きながら」。「（自分がメインで使うツールでは）哲学関

係の文献はほとんど出てくるんですけど、僕の分野だと例えば、政治学とか社会学とかそういう分野でも研究がされてる場合があって。そういうのがちょっとカバーされてなかったりする」。「（WSD で調べると）出てくる文献がやや違うんですよね」（対象者 12）

「b) 幅広く」とは、「文献検索の際、なるべく幅広く検索する」というものである。

これに触れる対象者も比較的多かった。「a) 補完的に」の概念と近いものであるが、媒体・言語・関連文献などの点で幅広く調べる発話があった場合は、これに区分した。

WSD の特長から導き出された利用目的と考えられる。

以下のような発話があった。

- 「自分のキーワード探しみたいな感じ」。「何かもし何か見つかればそこから文献辿ったりとか、その人の本、（その）人自体の本（を）探したりしたい」（対象者 5）
- 「（自分の研究テーマでは）先行研究が多くないんで、とにかくいろんな文献が欲しいって感じだった」（対象者 11）
- 「当たり感」。「7-8 年間の間にちょっと離れていて、またそのテーマに再び関心をもって戻ってきた時に、その 7-8 年間でその分野について、また全然違った見方とかが論文で発表されてるかもしれない」。「そういう時にばって調べて、で、こう、タイムスパンで区切って最近めのに絞って、で大体論文を全部読むわけじゃなくて、こうアブストラクトだけ、だーってもう上の方に載ってる奴から数ページ見て、ああ大体こういう傾向なんやなっていうことを、”当たり”として感じる」（対象者 14）

「c) 全文を入手する」とは、「全文を入手するために使用する」というものである。全文の入手は文献を探す際にニーズの高い機能だと思われるが、明示的に発話があった場合、これに区分した。

メインツールで全文が入手できずに、WSD で調べてみたという以下のような発話があった（対象者 3、4、6、11）。

- 「フルテキストがやっぱり、そのままだと PubMed だと少なくて。どうしても調べたい内容のところまで、どういうデータの分析の仕方で出したのかとかっていうところまで見きれなかった時に、WSD に移ってみると、全部あったってことも少なからずありました」（対象者 3）

・「結構マイナーな論文が多くて（中略）PubMed でフルテキスト読めない」。「”まとめて検索”に入れたら大学のフィルターを通るから読めるんじゃないかなと思って」（対象者 6）

・「Web of Science とかからだと結構入手できないのがあったりとかするので、そういう場合に結構”まとめて検索”で調べてみたりとか」（対象者 11）

「当たり感」を得るためという対象者 14 は「気になったやつをダウンロードその場でして、でオンラインとかに置いといて、帰りに電車でアブストだけ読んで、電車で読んで帰ってあーこういうもんかーって思ってる時とかも」あるとのことであった。

「d）特定の文献を探す」とは、「特定の文献を探したり、入手したりする」というものである。

「b）幅広く」とは逆の目的であるが、この発話があった 4 名とも「b）幅広く」にも触れる発話があった。但し、対象者 10 は「d）特定の文献を探す」が WSD 利用の主な目的とのことだった。対象者 10 の発話としては、以下のようなものがあった。

・「特定の文献にダイレクトにアクセスしたかった」

・「先生からのお勧めで、本を紹介してもらうと。それで参考文献に出てきて、参考文献一覧とかを見て、で特定の文献、これをさっと見たいなという」

・「この分野の研究する場合は、この文献が重要だよっていう一覧があったりとかするんですけど。そういうものから始めないと、量が膨大になって」

・「ゼロからっていうのはやらなかったですね。特に英語だと、あんまり判断できないというか。例えば日本語やと僕の分野だと、もう著者名とかでだいたい分かっちゃったり」

対象者 10 以外では、PubMed で全文が見られないので、WSD に論文タイトルを入力したり（対象者 6）、「昔の博論とかを調べたい時とかは、CiNii で調べてそういうのが出てきた時とかに、結構”まとめて”に行ってるって印象」（対象者 11）と、特定文献の全文の入手のために WSD を利用するという発話があった。対象者 14 は「レファレンスで載ってるところの中から調べる時に」「その時はもうピンポイントで年代とかも分かってるわけなんで。著者名と年代で入れてパッてたたく時、たたいて調べ出す時は、このやり方をします」とのことであった。

利用目的として「b) 幅広く」に触れる対象者 6、11、14 は、特定の文献を探す際にも WSD を使用するということとなる。

「e) その他」の発話は 3 名からあった。

対象者 1 は「本の題名とかは別に決まってなくて（中略）関連のものとか、何語のものがいいとか、そういうのがある時は、”まとめて検索”使ってるかなっていう気がします」と漠然と検索する時に使用するという発話があった。

利用頻度が高い対象者 14 からは、最近の年代で 10 年より細かくに絞って検索するとのことで、「年代（は）絞りますね、結構」、「もっと僕の場合（10 年より）細かい」との発話もあった。「ザッピングする時と、精読（細かく検索）する時があるということです。そういう使い分け方を僕は DOGS Plus の中でもしてる」とのことであった。

対象者 15 は、学生指導の中で「自分がやりたいテーマに関する関連研究っていうのを調べさせて、それで報告させるんですけど、そこん中で漏れがないか」という使い方もしているとのことだった。

以上の概念の他に、WSD を知るきっかけとなった授業での説明が「補完的に」「幅広く」だったという発話があった。

対象者 5 は、「(WSD は）結構最終手段のイメージがあって」と述べつつ、「(司書課程の)授業でもそういう感じで先生（が）お話して」、「どうしても引っかかんない時とかなんかそういう時は、こういう機能もありますとかっていう」。「なんかまず Doors とか CiNii とか紹介した上で、来ましたね、これがなんか最後に。それは覚えてます」

周囲からどのようなものだと説明されるのかによって、初期の利用方法がある程度影響を受けることは、一般的にあると思われる。

⑥WSD の好きな点・良い点

対象者が感じる WSD の好きな点・良い点を、発話からいくつかの概念に分けて整理した。以下はそれぞれの概念に触れる発言をした対象者数であり、人数は重複している。

- a）幅広さ：　11 名（対象者 2、5～8、10～15）
- b）画面デザイン：　9 名（対象者 1～3、6～11）
- c）全文利用：　5 名（対象者 3、5、6、11、13）

・d）絞り込み：　5 名（対象者 1、7、10、14）

・e）学術的な対象コンテンツ：　2 名（対象者 5、8）

・f）アクセスのしやすさ：　2 名（対象者 7、12）

・g）検索結果の適切さ：　2 名（対象者 4、9）

・h）文献の影響度表示：　1 名（対象者 10）

「a）幅広さ」とは、「検索対象が幅広いこと」である。これは、WSD の特長から導き出された点だろう。予備調査でも、これに触れる発話が最も多かった。

これについての発話は比較的よく似た内容であるが、以下のようなものがあった。

・「いろんな雑誌論文とかの資料を見ることができること」（対象者 2）

・「広範囲に調べられるっていうのはすごいなって思ってたので。これが一番だと思ってたので」（対象者 5）

・「検索をここですれば引っかけてくれる、文献を出してくれるっていうことに、分かりやすさと安心感がすごいある」（対象者 6）

・「これ以外の（中略）データベースで出てこなかった論文も結構ヒット」（対象者 7）

・「あらゆるものから探してくれる」。「日本語・英語、まぁ、書籍・論文・雑誌とかも」（対象者 11）

・「自分の知らない雑誌とか媒体も含めて、自分の調べたいテーマのキーワードとかを検索すれば、勝手に拾ってきてくれる」（対象者 14）

他には、次のような発話もあった。

・「（遠回りだけど）でも結構引っかかってくれて、新しい発見は毎回ある」（対象者 11）

・「”当たり感”ていうのを分かるというのは、このやり方でしかできないと思ってる」。「自分が常に注目してる EU（欧州連合）のある雑誌」で流行が分かっても、「それはあくまでその中での流行に過ぎないのかもしれない」（対象者 14）

特定の文献を探すことが多いという対象者 10 からも次のような発話があった。

・「ざっくり出てくるので、ざーっと関連してるものを見れる一覧性が気に入っている」（対象者 10）

「a）幅広さ」の発話のなかった 4 名も、利用目的としては「a）補完的に」に当たる発話があった。

なお、この質問はオープンに質問したものであり、対象者が言いよどんだ時にも筆者から例示などはしなかった。インタビューシートでは、「好きな点・良い点」の項目の次に「検索対象が広いことについて」の項目が記載されているが、ちょうど次のページになっていた。そのため、対面インタビューでは対象者がその文言を見て、「a) 幅広さ」が多いという結果に影響した可能性は低い（但し、1 名は事前にインタビューシートを送付した）。Skype でのインタビューの場合、事前にインタビューシートを送付したので、その文言を見て、発話に影響した可能性は否定できない。

「b) 画面デザイン」とは、「画面表示全般についてのプラス評価。例えば、見やすさ、情報提示の分かりやすさ、操作のしやすさなど」である。予備調査と比べると発話が多かった印象がある。発話のあった 9 名の内、大阪大学の対象者は 7 名、同志社大学の対象者は 2 名であった。

以下のような発話があった。

- 「（検索結果一覧で）出版年とかもパッと見で、すごい見やすくなってる」（対象者 1・大阪大学）
- 「デザインが PubMed とか他と比べても結構シンプルに統一されてるイメージ」（対象者 3・大阪大学）

これに関する発話を詳細に見ていくと、「全文入手の案内表示」に関する発話が 4 名からあった（対象者 2・同志社大学、9・同志社大学、10・大阪大学、11・大阪大学）。「雑誌論文だったら本文があるかどうか」（対象者 2・同志社大学）、「（PDF があるかどうか）画面上で視覚的に分かる」（対象者 10・大阪大学）などである。

「いろいろデザインするのが好き」という対象者 9（同志社大学）からは、DOGS Plus について、「1 個 1 個の論文がどこからどこまでなのかっていうのが、結構きっちり見やすく分かれてて」、「（左のファセットと、検索結果のエリアを分ける縦の線に）影のデザイン（中略）シャドウがついてる」、「開発者の方すごいこだわって作ってらっしゃる」という発話もあった。

「c) 全文利用」とは、「WSD 経由で全文（抄録含む）が入手できること」である。通常の Web 検索や他の検索ツールとの比較で全文入手がしやすいという意味や、WSD によって所属大学のメリットが活かせるという意味の発話もあった。

以下のような発話があった。

・「(Web 検索より) DOGS Plus で出てきたものは、大体こう内容抄録とかも見れたりして、そこで確認できたりとかするので、詳細な情報が出てきたりする」(対象者 5)

・「阪大通して何かをしようとした時の、手続きへのアクセスの良さみたいなのは、”まとめて検索”の方が便利だと思ってる」(対象者 11)

「d) 絞り込み」とは、「ファセット等で検索結果・対象を絞り込むこと」である。年代や言語、ソースタイプで絞り込みできることを良い点とする発話があった。

・「(画面) 左の『ソースタイプ』」。「電子書籍であるとか」(対象者 10)

・「(最近のことを調べたいのに) 昔のが出てきても困るので (中略) これ (年代の絞り込み) ができるのもだいぶ大きい」(対象者 14)

「e) 学術的な対象コンテンツ」とは、「学術的なコンテンツが検索対象になっていること」である。

以下のような発話があった。

・「(Web 検索より) 客観性とかがあるの (が検索対象) かな」(対象者 5)

・「Google Scholar (筆者注 : 普通の Google の言い間違いか) みたいにその有象無象が出てくるんではなく」、「ちゃんと論文がヒット」(対象者 8)

「f) アクセスのしやすさ」とは、「WSD 画面への到達のしやすさ」である。発話のあった対象者は少なかったが、文献検索時の使いやすさとして重要な点と思われる。

以下のような発話があった。

・「阪大 (図書館) のサイトから入れますんでかなり手軽」(対象者 7)

・「図書館のホームページ最初にあるっていうのが大きい」。「アクセスしやすい」(対象者 12)

「g) 検索結果の適切さ」とは、「適切な検索結果が得られること」である。

以下のような発話があった。

・「結構調べたいところにピンポイントで答えてくれる」(対象者 4)

・「検索語に対して、ちゃんとその意味をくみ取った適切なものが出てくる」(対象者 9)

但し、対象者 4 に対して質問を重ねていくと、色々調べている中で、対象者の頭の中が整理された結果も作用しているかもしれないとの発話もあった。具体的には、メインツールである CiNii Articles や Google Scholar で検索するうちに、「何を調べたいのか、だいぶ焦点が定まって」、「急にディスカバリーの際に、言葉（検索語）を変えて」検索したとのことだった。

好きな点とは逆に、「好きでない点・悪い点」として「検索結果の表示順」に触れる対象者もいたため、これは対象者の使い方や分野による可能性もある。

「h）文献の影響度表示」とは、「大阪大学の EDS（EBSCO Discovery Service）で見られる『この文献の影響度』」のことである。これは、一部の検索結果に表示されることがあり、引用数などを知ることができる。全ての検索結果に表示されるわけではなく、この表示に気付いている対象者も少ない印象がある。

⑦WSD のメリットとされることについて

代表的な文献などで WSD のメリットされることについて、対象者の印象を質問した結果を整理する。

●雑誌記事、多様な媒体なども含めて、検索対象が広いことについて

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった。

・肯定：　12 名（対象者 2、4、5、6、7、9～15）

・気にしていなかった：　3 名（対象者 1、3、8）

「肯定」の発話が多い結果となった。今回の対象者は WSD を「補完的に」「幅広く」利用する者が多いことから当然の帰結と言えるだろう。

後述するが、デメリットされる「検索結果が多すぎて使いにくい」に対する印象に対しても、本調査の対象者は大半の 13 名が「不満なし、気にしない」と類型化される発話があった。WSD を「補完的に」「幅広く」利用する者は、検索結果の多さに関わらず、幅広さを好むことが示唆される。

「肯定」の対象者の発話としては、以下のようなものがあった。

・「その分野を網羅的に見たい時に使ってるので、なのでいっぱい引っかけてくれるから嬉しい」（対象者 6）
・「幅広いのはやっぱり（雑誌記事・学術論文・本をそれぞれ探す）場面に応じて使い分けられるっていうのが非常にデータベースとしてはいいのかな」（対象者 7）
・「雑多な情報も含めて、ブラウザで調べるよりは精度が少しだけ高く、OPAC よりは広い」（対象者 10）
・「新しいことを始める時、いろんな文献をとにかく手に入れたい時はやっぱり、”まとめて検索”が便利」（対象者 11）

WSD を最近はほぼ使わないという対象者 13 は、「長所でもあり短所でもあると思ってます」としながら、「メディアごとの区切りを分けて、ある 1 つまとまりとして描くにはいいのかな」という発話もあった。

検索結果が多い場合は、回避策を取るとの発話もあった。発話は以下の通りである。

・「（検索）ワード数を増やします」（対象者 4）

ともかく広さが大事と認識していると思われる発話も 2 名からあった。発話は以下の通りである。

・「もし（検索対象が）少なかった場合はどうにもならないじゃないですか」（対象者 4）
・「そもそもその範囲内に入っていないと引っかかりすらしないので」（対象者 9）

WSD はサブツールなので、検索精度より広さを求めるという発話も印象的であった。発話は以下の通りである。

・「とにかくいろいろ出してみてほしいなっていう要求の方が強いので、たぶん（要求として検索精度が）出てないのはそれもあるかなと思います」（対象者 9）

「気にしていなかった」の発話としては、以下のようなものがあった。

・「OPAC を見てからも、すごい、大学ってすごいなとかって思ってたんで、多くて」（対象者 1）
・「CiNii もいろんな媒体の記事結局出てくる」（対象者 8）

●ファセットでの絞り込みについて

ファセットに関して、使用／不使用という点で発話を類型化すると、次のような結果と

なった（対象者 13 を除く）。

・使用（頻度は問わない）：　11 名（対象者 1～7、9、10、14、15）

・不使用：　3 名（対象者 8、11、12）

使用している対象者が多いという結果となった。対象者 11 は「不使用」に類型化したが、予備調査の際には積極的に使用していたという発話があった。

予備調査では、不使用という対象者の方が多かったが逆の結果となった。一方で、佐藤ほか（2015）による国立国会図書館サーチのアクセスログ分析では、ファセット等の絞り込み機能を用いることが多いとの調査結果もある。これらのことから、ファセットが WSD 使用者に浸透していることが示唆される。

「使用」の対象者からは、以下のような発話があった。

・「それ（電子書籍など）を省くために使ってるイメージ」。「雑誌と、あと専門誌と見たい時にチェックマーク入れたり」（対象者 3）

・「何年から何年までのをしっかり調べたいっていう時には要る」（対象者 6）

・「私の場合やったら、結構最近の話題がまず上に結構来てしまいがちだったので。ちょっと歴史のこと調べたいなっていう時とかは、ちょっと古めにしたりとか」（対象者 10）

・「学術文献とかそういうので思いっきりやります」（対象者 15）

どのような項目で使用しているかを類型化すると、次のような結果となった（重複回答あり）。

・資料タイプ：　6 名（対象者 1～3、5、10、15）

・年代：　4 名（対象者 5、6、9、14）

・言語：　2 名（対象者 1、7）

・本文あり：　1 名（対象者 5）

・自大学に所蔵あり：　1 名（対象者 5）

・主題件名：　1 名（対象者 4）

使用しているほぼ全員から、ファセットの機能は「便利」と類型化できる発話、ないし

文脈から「便利」という認識であると推定できる発話があった。但し、対象者 15 の発話は「よく絞らない限り、それこそ色んなもの出てくる」と、「便利」とは少しニュアンスの異なるものだった。

不使用の対象者からは、以下のような発話があった。

・「全部見たい」（対象者 8）

・「そもそも存在を知らなかった」。「WSD はすごい雑にしか使ってなくて。ババババって見るぐらいなんで」（対象者 12）

この 2 名は、他の文献検索ツールでは、ファセットを使用しているということであり、ファセット自体を全く不使用というわけではない。

対象者 11 は予備調査の際にはファセットを積極的に使っていたが、現在は不使用である。文献に対する知識が増えたことがファセットの使用に対して影響を与えたという。発話は以下の通り。

・「最近使わなくなりました」。「なんか上から見てってます、今は」（対象者 11）

・「（かつては）”苔”とかって入れると、結構文学作品とかも出てきちゃったりしてて、たぶんそれ（中略）を分けるためにたぶん使ってたって思う」。「たぶん知っている文献が増えたから、”これは本だ”っていうのがもう（ファセットで）分けなくても自分で分かるようになったのかもしれない」（対象者 11）

●詳細検索について

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・時々使用：　2 名（対象者 3、5）

・全く／ほぼ不使用：　12 名（対象者 1、2、4、6～12、14、15）

予備調査でこれに魅力を感じている複数の回答者がいたため、質問内容に含めたが、今回の対象者では大半が「全く／ほぼ不使用」という結果となった。ファセットとは逆に、検索語入力の場面で条件を絞り込む利用者は限定的ということかもしれない。

「時々使用」という対象者からは、以下のような発話があった。

・「（基本検索画面で）情報絞りきれなかったら、詳細検索のタブを開いて使ってるイメ

ージ」（対象者 3）

・「自分の求めてる資料の種類とかに適して選んだり」（対象者 5）

また、この 2 名からは、詳細検索は便利であるという発話があった。

「全く／ほぼ不使用」という対象者からは、以下のような発話があった。

・「あんまり（基本検索の検索ボックス）1 個だけで困ったことがなかった」（対象者 1）

・「左のやつ（ファセット）で絞り込んでいくのとあんまり変わらへんのかな」（対象者 10）

また、対象者 9、14、15 の 3 名は詳細検索の存在を認識していなかった。

「全く／ほぼ不使用」の対象者に、他のツールでは使用するか明確に質問することはできなかったが、対象者 11、14、15 の 3 名からは他のツールでは使用するとの発話があった。

さらに、存在を認識していなかった対象者 14 は、詳細検索の画面を見ながら、知っていれば使っただろうと、以下のような発話があった。

・「この学問分野のジャンルを選べる（中略）これは多分使っただろうと思いますね」。「これはね（知っていれば）使った。絶対使っただろうな」（対象者 14）

・「単に EU（欧州連合）ってバって検索したら、例えば工学かそういう分野で EU っていう言葉が含まれている単語が（中略）検索されたり」。「そういうのを避けようっていう時には、こういう分野で絞り込んだ上でやるということをするはず」（対象者 14）

●関連資料がヒットすることについて（キーワードに関連する資料、予想していない媒体など）

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった。

・肯定：　12 名（対象者 2～4、6～10、12、13～15）

＊内 4 名は否定的な経験にも言及（対象者 4、6、7、14）

・否定：　2 名（対象者 5、11）

・気にしていなかった：　1 名（対象者 1）

「検索対象が広いことについて」と似た質問のためか、それの結果と同様に「肯定」が

多い結果となった。これも WSD を「補完的に」「幅広く」利用する対象者が多いことから、当然の帰結かもしれない。

「肯定」の対象者からは、以下のような発話があった。

- 「思ってたのとは違う視点というか」。「こういう資料を調べられるんやっていう」（対象者 2）
- 「なかなか気づかないやつとかですね、目次にしかそうキーワードがなかったりとか、出てきたら嬉しい」。「（画面をスクロールして）100 件くらい見る感じ」（対象者 12）
- 「おそらくそれがあるから、最後の確認とかにして使ってるんだと思います」（対象者 15）

「肯定」の発話があった内 4 名からは、否定的な経験を含む発話もあった。例えば、以下のようなものである。

- 「（検索結果が）ちょっと自分が考えてるのとは違うなっていう点から、やや不便なところはあるにしろ、それでもプラス（評価）」（対象者 4）
- 「え、これ引っかけるんや、みたいなこともたまに起こる。けど、それは自分のフィルターで排除できる」。「まええかなみたいな」（対象者 6）
- 「中国語のソースがヒットしたのは（中略）ちょっと残念に近い感情という意味では（予想していない媒体ということに）当てはまりますかね」（対象者 7）
- 「（書評がヒットするのは）第一印象としては、これじゃないねんっていうマイナスの感情がまずある」。しかし、「学術雑誌の中の終わりの方に書いてある書評の部分」も「ちゃんと幅広く拾ってくるっていうこと」については「嬉しさがある」（対象者 14）

「否定」の対象者 5 からは、「ノイズ（中略）なんかもう多いな（中略）前に検索した時に思いました」とする一方で、「もうしょうがないかなって」と許容する発話や、「頑張ってここの（ファセットで）絞っていくしかないかな」と回避策に触れる発話もあった。但し、「（キーワードで絞ると）そこから漏れちゃう資料があるのが怖くて」と、幅広さのメリットが小さくなることを懸念するような発話もあった。

同じように「否定」の対象者 11 からは、「分野外のもの（医学系の論文など）が引っかかってくるっていう意味ではちょっと、逆にやっぱり（否定的）」という発話もあった。

「気にしていなかった」対象者 1 からは、「(自分の求めてるものが割とダイレクトに)出てきてる感じです。ま、大量に出てくるなって感じはする」という発話があった。

●表記の違いや、不完全ワードでもヒットすることについて

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった。

・肯定： 8 名（対象者 1、4、5、8、10、11、14、15）

＊内 2 名は否定的な経験にも言及（対象者 4、14）

・気にしていなかった： 6 名（対象者 2、3、6、7、9、12）

・その他： 1 名（対象者 13）

「肯定」の発話をする対象者が比較的多かった。対象者が普段よく使う検索語によって、印象は左右されると考えられるが、「否定」に分類される対象者がいなかった。これも WSD を「補完的に」「幅広く」利用する対象者が多いことが影響しているのかもしれない。なお、「肯定」の発話があった対象者の所属大学は、大阪大学が 5 名、同志社大学が 3 名で、製品の違いが大きく作用したとは考えにくい。

「肯定」の中で、具体例に触れた発話には以下のようなものがあった。

・「バイオリン／ヴァイオリン」（対象者 1）

・「ペルシャ／ペルシア」（対象者 4、このワードで検索したことはあまりないとのこと）

・「クウェート／クウェイト」「バーレーン／バハレーン」（対象者 8、「すごいありがたくて」と）

・タイプミス（対象者 1、10）

対象者 11 は予備調査では、自分の分野では用法に意味があるため「コケ／苔」は区別して検索したいとのことだったが、「絞っちゃっても逆にちょっと問題かなっていう気がしますね、今は」という発話があった。

他には、「引っかからないよりかはいいのかなぁ」（対象者 5）や、「(検索システムとして）やらないといけないんじゃないですかねって思ってるぐらい」（対象者 15）という発話があった。

「肯定」の発話があった内 2 名からは、否定的な経験を含む発話もあった。対象者 4 か

らは「”イラン”って書いて、ヒートア”イラン”ド現象が出てきた」との発話があったが、「(検索語の) あとに何かの言葉をつなげたら、そしたら特に問題なく」と回避策に触れる発話があった。対象者 14 は、姓名の順番でヒット件数が変わることに触れつつ「両方で調べたら済む話なんで」と回避策に触れる発話があった。但し、「ただそれ (は) 冷静に考えたら手間なんで、両方ともに全部出るようにしてほしいなとは思います」という発話もあった。

「その他」の対象者 13 から「不完全だけど当たったとかは正直分かんない」との発話があった。

検索システムとしては、上記で対象者 15 が触れたように、幅広くヒットするように開発されていくように思われる。ここで見られたような否定的な経験も生じざるを得ない面もあるだろう。それを機能面や使い方の伝達によって少なくすることが必要だろう。

⑧WSD の好きでない点・悪い点

対象者にとっての WSD の好きでない点・悪い点を、発話から概念に分けて整理した。以下はそれぞれの概念に触れる発言をした対象者数であり、人数は重複している (対象者 13 を除く)。

- a) 検索対象： 4 名 (対象者 7、9、12、15)
- b) 全文利用： 4 名 (対象者 5、6、10、14)
- c) 論文の引用数表示： 3 名 (対象者 6、9、11)
- d) 検索結果の表示順： 2 名 (対象者 7 、10)
- e) デザイン： 2 名 (対象者 6、7)
- f) その他： 6 名 (対象者 3、5、6、8、9、11)
- g) 不完全さを許容： 2 名 (対象者 4、15)
- h) 不満なし： 2 名 (対象者 1、2)

「好きでない点・悪い点」に触れる延べ数は少ない結果となった。「好きな点・良い点」では延べ 37 人だったが、「好きでない点・悪い点」は延べ 21 人となった。対象者の半数以上が触れる概念もなく、比較的ばらけた結果となった。対象者が WSD を継続的に利用

している者であるため、現れる不満が相対的に少なかったという背景（あるいは、不満が少ないから継続的に利用している背景）もあると考えられる。

予備調査では「多すぎる検索結果」に触れた対象者が数名いたが、本調査ではこれに触れる対象者はいなかった。これも WSD を「補完的に」「幅広く」利用する対象者が多いことが影響していると考えられる。

それでも使用者の感じる不満から得られる知見も重要と思われる。以下、結果を整理する。

「a) 検索対象」とは、「検索対象についての不満全般」のことである。

これに触れた内の 3 名から、WSD の検索対象が不明という点について発話があった。

- 「データベース自体の信頼性というか、どこの情報を持ってきてるのかなっていうのはちょっと、気に入らないっていうか、ちょっとそこを知りたい」。「JSTOR とか CiNii ではないような部分を引っぱってきてるのか、それともそれらも含めて引っぱってきてるのか」（対象者 7）
- 「どこからどこまで網羅されてるのか（分からない）」（対象者 9）
- 「ひとつ敢えて言うとすると、どういったものを検索の対象にしてるのかっていうのが分からないところ」（対象者 15）

これ以外には、対象者 12 からは、以下のような発話があった。

- 「僕が見てるデータベースの中でヒットするものが、全くヒットしなかったりする」。「普段使ってるデータベースと同じキーワードなんだけど、こっちは出てこない」（対象者 12）
- （WSD の検索結果画面を示しながら）「（一方で）同じ奴がいっぱい出てくるじゃないですか。これは大丈夫なのか？って」。「同じ文献が 5 つか 6 つくらいバーっと出てきて、これは要らないんじゃないか（と思う）」（対象者 12）

対象者 12 はさらに、「自分の分野の先行研究を見てく上で、信頼に足るのかなっていう」と不安を述べ、「だからまぁ最後に使うというか」と、WSD がサブツールになる背景にも触れた。対象者 12 は、WSD の使用期間が「b) 3 ヶ月～半年未満」と比較的短いが、人によっては、このような経験が WSD 利用を躊躇させることになるかもしれない。

他に、対象者 7 からは、「（検索対象が）全言語に設定されてるとかだったら、（中国語が出てきてしまうこともあり）ちょっと逆に不便かな」と、幅広さに対する不満とも分類で

きそうな発話もあった。

なお、不満としての発話ではなかったが、対象者 14 からは「強いて言えば、残念感が多いのは（中略）書評に当たってしまった」という発話があった。但し、「深刻なことではないですよ。そんなこともあり得るって思えばすぐ慣れる」と述べ、インタビューの別の場面では、書評もヒットすることについて「嬉しさがある」とも述べている。

「b) 全文利用」とは、「全文が見られないことや、全文入手の過程についての不満」のことである。発話として現れたのは 4 名だったが、全文の入手は文献を探す際にニーズの高い機能だと思われる。

これに触れた内の 3 名は、ある文献がヒットしても全文が見られないことについての不満であった。以下のような発話があった。

- 「（フルテキストが見られないものを載せても）意味ないじゃないですか」（対象者 6）
- 「eBook と呼ばれるもので本になった途端、大学に所蔵がないことがあまりにも多くて。もう（留学中の）オランダ時代と比べて。オランダやとほとんど本が電子書籍で学内から見れるんですよ」（対象者 10）
- 「当たった以上は全部見れるのかという期待のもとに行くので」。「見れないこともあるというその残念感は否めないです」（対象者 14）

もう 1 名（対象者 5）からは、リンクリゾルバとの関係がよく分からないことや、以下のような発話があった。

- 「難しい英語のサイトに行ってしまって。もう一回そこで所蔵とかを調べないといけないじゃないですか」。「検索（で）出てきた記事・本文がどこに記されてるかを繋げてくれる（機能がほしい）」。「この記事が全国のどこにあるのかっていうのが、その場ですぐ分からなかった」（対象者 5）

「c) 論文の引用数表示」とは、「ヒットした論文の引用数が表示されない不満」のことである。

文献の引用数が検索結果一覧にも表示される Google Scholar との比較で、以下のような発話があった。

- 「Google Scholar（は）大体の引用件数みたいなのが出ることがある」。「それがないのは、辛いです」（対象者 9）

また、EDS（EBSCO Discovery Service）には引用数などを参照できる『PlumX Metrics この文献の影響度』というリンクが検索結果一覧に表示されることもあるが、それに関しては、以下のような発話があった。

・（『PlumX Metrics この文献の影響度』という表示は）「あるなっていうのは見ていましたね。でも触ったことないです」（対象者 11）

対象者 11 にとっては、『PlumX Metrics この文献の影響度』というリンクの意味が伝わっていなかったと思われる。

「d) 検索結果の表示順」とは、「検索結果の表示順に関する不満」のことである。

以下のような発話があった。

・「中国語のやつが（検索結果の）一番最初に来てたり」。「そこがちょっと。まあ戸惑った」（対象者 7）

対象者 10 からは以下のような詳しい発話があった。不満を述べる一方で、回避策に触れたり、メリットにつながる発話があった。不満はあるが、やはり「幅広さ」の魅力が強いようであった。

・「関連度順の精度はやっぱり低い気が（する）」。（インタビュー中に検索しつつ）「4 つ目ぐらいにほんまに絶対関係ないくない？みたいなやつが出てくるんで、こういうのはちょっとうっとうしい」

・「いろんなやつも出てきてくれるのありがたいです。まあこっちが 5 ページぐらいまで見たらいいかな」。「この議論はここに応用されてるんだ、とか。この人は、この前よく出てくる著者がこの人の書評書いてるんだ、とか。そういう関連が見えてきたりする時もある」

・「関連度順の精度が低いから、うっとうしいから使わないとかは全くない」。「絞り込み過ぎちゃうと、なんかあんまり WSD を使ってる意味ないかな」

「e) デザイン」とは、「画面デザインに関する不満全般」のことである。

以下のような発話があった。

・（リンクリゾルバへのリンクである、阪大マークの意味が分からないことに加えて）「（フルテキストを見ること）以外に一杯（アイコンなどが）あるんですよ、一杯書いてある」。「その辺はなんか乱雑に見えます」（対象者 6）

・「詳細検索っていうのが、なんとなく画面としてちょっとややこしそう」。「ちょっと使ってみようっていう風にならない場合が正直ある」（対象者 7）

「f) その他」は多様であるが、順に発話を紹介する。

・「詳細検索のところで（中略）直近 5 years とか 10years でパッと指定（できないことが）（中略）ちょっと不便かなというイメージ」。「PubMed の方で、タイトルだけじゃなくて、アブストラクト自体も全部載せてくれる機能があって、結構より詳細に且つ速く複数の文献見ていくことができるっていう機能があるんで。それがないのがちょっとなんて言うかなっていう気がします」（対象者 3）

・「結構”遠回り”っていうイメージが（ある）」。「直接行けるには OPAC の方が速いっていうイメージがあって、それが先行してやっぱり使ってしまう」（対象者 5）
但し、次のような許容する発話もあった。「遠回りするのも、これを使っている以上当然のことといえば当然と思うので」。「検索対象もデータベースも一杯あるので、そこにあまり不満を感じたら何も使えないので」。（対象者 5）

・「OPAC は（中略）BSH とか下に出てきたりする」。「（WSD で）キーワード広げる過程をそこでしたいのに」（対象者 5）

・「（検索語や検索結果を?）保存してくれるのも一時的じゃなくて、永続的にほしい」。「そういう機能があれば研究経過とかデジタルでも取っておける」（対象者 5）

・「タイトルの引用、最後のリファレンスに載せたりする時に書くフォーマットで出てこない」。「そのままコピー&ペーストで写せない」。「文献が見つかった後に（中略）いろいろ加工、情報を引っ張りたいんだけど、それはできない感じ」（対象者 6）

・「他のサービスとの区別が付きづらい」。「図書館のサイトの位置、同じ場所にあって、じゃあ何が違うのって」。「タブが並んでるだけ」。「区別がよく分からない。で、教えてほしかった」。「学部生とか他の大学から来た院生の人と話すと、全然図書館の使い方が分からないっていう」（対象者 8）

・「ブランド名が足りないですね」。「あまり知名度がない」。「運営されてる団体の規模みたいなのってどんな感じなんだろうっていう時に、ぱっとは出てこないと思うんですよ。Google Scholar さんと違って」。「Google Scholar でぱって聞いた時に（中略）検索専門の会社で、世界一の会社だし（中略）アカデミックの人ともすごい関わりがあるだろうから、まさか下手はこかないだろうみたいな。そういう謎の安心感が

ある」（対象者 9）

・「年代の調節がなんかバーみたいなのになってるのが、めっちゃ使いづらい」（対象者 11）

「g) 不完全さを許容」とは「ある程度の不完全さを許容」ということである。

対象者 4 からは、「ディスカバリー特有でちょっと不便だなって思ったことはなかった。あんまりないんです」。「ちょっと時代がずれていたりとか」、「別のワードがヒットしたりとか」、「（他の検索ツール）にも共通しているんで」との発話があった。

対象者 15 からは、「どの検索サービスも（中略）完全ではないので。そういうもんやと思わされてる点がダメですかね、唯一」との発話があった。

「h) 不満なし」とは「不満がないとの発話があった」ということである。

以下のような発話があった。

・「特にそんな、これが嫌だなみたいなことはないです」（対象者 1）

・「使ってる中で不満とか、特にそういうのはあんまり無いです」（対象者 2）

対象者 1 は WSD を「補完的に」図書の検索で使うとのことであり、使用期間と使用場面の少なさが「不満なし」につながったのかもしれない。対象者 2 は、「期待してないの、（期待がない）裏返しとか、そんなんでは全然なく」、「自分の性格上みたいなのも（ある）」、「あんまり（マイナスのことは）口にしたくない」との発話もあった。対象者の考え方が影響した面もあるが、WSD の使用を止めるような大きな不満はなかったと推察できる。

この 2 名とも学部生だが、その属性が「h) 不満なし」という発話につながったというよりも、WSD の使い方や個人の考え方が影響したと推察する。

また、特に分類しがたい発話として、対象者 14 から、「Doors しか知らなかった頃からの進歩に比べれば、（自分の残念感は）全然些末なことではあるはずなんですけども、慣れてしまったらそう思わざるを得ない」との発話があった。便利な状況に慣れてしまうと、それを当たり前に感じてしまうことは事実であろう。違う見方をすれば、メリットやデメリットに感じることも、時間経過や状況の変化に伴って変わっていくものと思われる。

なお、対象者 14 は別の場面で、「Doors しか知らなかった自分との比較」すると、「（WSD は）飛躍的な違いだった」、「コピー機でピーって手動でしてたやつが、その必要がなくな

ったに近い感覚」とも述べている。

⑨WSD のデメリットとされることについて

代表的な文献などで WSD のデメリットとされることについて、対象者の印象を質問した結果を整理する。

結果を要約すると、本調査が WSD を使ってる者を対象にしているためか、不満なし・気にしない・許容する・回避策を取るといった発話が多い結果となった。

大学図書館側で触れられることの多いデメリットについて、WSD 利用者は大きな問題と捉えていない、ないし許容する傾向があると示唆される。

●「検索結果が多すぎて使いにくい」という声も聞かれるが、どのように思うか。

発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・不満なし、気にしない：　13 名（対象者 1～4、6～12、14～15）

・不満：　1 名（対象者 5）

この「検索結果の多さ」に関して、本調査の対象者の大半が「不満なし、気にしない」という結果となった。不満と感じるかどうかは使用者の受け止め方が影響しているかもしれないが、WSD を「補完的に」「幅広く」利用する者は、「検索結果の多さ」を不満に感じない傾向のあることが示唆される。

「不満なし、気にしない」の対象者からは、以下のような発話があった。

・「そんな（ふうに）に思ったことはないです。むしろ沢山出てくるんで、見ても見てもまだ次があるって嬉しさがありますね」。「論文とか調べるようになって、時間がなかったらそう思うのかもしれないですけど。今のところはそうはあんまり思わない」（対象者 1）

・「文献をたくさん読むこと自体が当たり前だと思ってきたから（中略）（多くの検索結果に）ありがとうございますっていう。感謝の気持ちしかない」（対象者 8）

・「2-3 頁くらいまで見れば、一応その文献の『周辺の情報』はざっくり知れるので便利。論文や本の中身、目次を見て重要性は判断すればよい」（対象者 10）

・「むしろそれが良いところだと思ってる」。「なるべく 100 件くらいは見るようにして

る」（対象者 12）

回避策に触れる発話も 4 名からあった（対象者 4、6、7、15）。以下のような発話があった。

- 「（検索結果が多いと、検索ワードを）多くするしかないでしょう」（対象者 4）
- 「（検索結果を順に見て自分の意図と）離れてきたら、この辺はもう違うなって自分で勝手に判断して、もう見ないようにする」（対象者 6）
- 「（検索結果が多いのは）当たり前じゃないですか」。「だから絞り込まないといけない」（対象者 15）

許容する発話もあった（対象者 7、9、15）。但し、対象者 9 と 15 の研究分野が検索エンジンに関連するものなので、個別性の強い発話の可能性がある。

- 「それはもう仕方ないですよね。まあどういっても、もうちょっとそれは仕方ないですね」（対象者 7）
- 「網羅できる範囲が広いっていうのは検索エンジンとしては必須ですし、その上で結果が多くなっても、もうそれはある程度はしゃーない」。「（検索結果）を上から見ていって選ぶのが、ユーザの仕事なのかなって」（対象者 9）
- 「『あ、これはいける』って思えるものっていうのは半分あれば良いくらいなので。それは DOGS Plus に限らず、どれもあまり期待せずに。これは数打って行かんかったらやっぱり探せないな」（対象者 15）

使用者の能力に触れる発話があった（対象者 3、10、15）。使用する側から、その能力に触れる発話があるのは意外な印象を持ったが、WSD を使用するのに何らかの能力が必要という発話が使用する側からあったのは興味深い。

発話を、少し長くなるが紹介する。

- 「使用者の能力も問われるんじゃないかなという気がしますね」。「Google Scholar とかで”この言い回しって他に学界用語で何かないのかな”っていうのも見ながらやってたりして。それで改めて検索してみたら一気に絞り込めるっていうのを思ったりするので。なんで使い手次第な気もします」（対象者 3）
- 「こういう文句が出るうちは、その分野に対して詳しくないと思いますね」。「見てれ

ば分かると僕は思います」。「最初そんなこと言えなかったですけど（中略）やっぱり研究が進んでくると、いや知ってるやろみたいな。自分の中でその地図じゃないですけど。そういうのができてくれば、こういうのも使いやすくなる」。「（最初は検索結果が）1 万件とかあって、あれ全部読まなあかんのみたいなまず気持ちになると思います」。「（自分も）書評とかも最初、なんで本やのに PDF で 2 ページとかになってるんだろうみたいな。分かんなくて。まず書評っていう存在自体もよく分からなくて。そういうのがちょっと判断できないうちは使わない方がむしろいいんじゃないかという、気がします」。「（大学院生になって、分野の地図ができてくると、そんな不満は）解消されるんですよ」（対象者 10）

- 「そん時どんなキーワードを入れていけばいいのかってことを知っておかなきゃいけない」。「ある程度自分で知識持ってこないといけないなとも思う」（対象者 15）

他に自分の使用法では、ヒット件数が多くないという発話もあった（対象者 6、11）。実際にどの程度少ないのかインタビュー中に深めることはできなかったが、求める文献数に対して一覧するのが苦にならない程度のヒット数だったと推察している。以下のような発話があった。

- 「パラオのことを 2 年前は特にやってたので、もともと文献の数自体がそんなに多くない」（対象者 6）
- 「私が検索してるものが多分、そんなに出てこない分野だから、多分そこまで思わない。むしろ出てきてくれて嬉しいみたいな、感じ」（対象者 11）

また、「不満なし、気にしない」の対象者からは、条件付けのような発話もあった（対象者 7、9）。条件とは、自分がほしいと思う文献が検索結果に入っている、というものである。当然求めることだろう。以下のような発話があった。

- 「自分が思ってるようなキーワードの論文とか、こういう内容が欲しいと思ってんのに、そういう論文とかまあ記事なりが出てこなかった場合、やっぱりまあ使いにくいっていう評価に」（対象者 7）
- 「一応検索結果の中の範囲としては、下位の方であっても入ってくれてるのが前提かな」。「私がだらだらと 7、8、9 ページ目ぐらいまでずっと見るタイプだからだと思うんですけど」（対象者 9）

「不満」の対象者は 1 名だった。発話としては「見るのが煩雑でという気持ちが正直になってしまう」（対象者 5）であった。

但し、この対象者 5 は、検索結果の多さは「不満」ながら、検索対象の広さ自体は歓迎している。「好きな点・良い点」として幅広さに触れる発話もある。例えば、「いろんなリソースに引っかかってくれることが一番便利」、「広範囲に調べられるっていうのはすごいなって思ってたので。これが一番だと思ってたので」という発話である。検索対象が広いことについても、「使いたいなっていうのは思います。積極的に使いたいと」との発話があった。

●適合度表示の不適。「検索結果に関係のない（小さい）資料が上位に出てくることもある」と言われるが、どのように思うか。

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・不満なし、気にしない：　8 名（対象者 2、4、7～10、12、15）

・現象を認識せず：　6 名（対象者 1、3、5、6、11、14）

本調査の対象者の発話は、適合度表示の不適について、気付いていても「不満なし、気にしない」とする傾向があった。許容したり、回避策に触れる対象者もいたので、厳密な意味で「不満ゼロ」ということではないと思われる。しかし、一種の誘導のような質問にも関わらず、不満の要素が含まれる発話がほぼなかった。

適合度表示の不適について、利用者はそこまで重要な点と認識していない可能性がある。また、WSD を「補完的に」「幅広く」利用する者は、適合度表示をそれほど重要視しない傾向があるとも考えられる。

一方で、適合度表示の不適を感じている対象者が比較的多かったことから、適合度表示の精度も改善されるべきと思われる。

「不満なし、気にしない」の対象者の発話で、適合度表示の不適に関するものとして以下のようなものがあった。

・「使えそうだと思っていたら、いざ中身を見たら、そしたら時代が全く違うっていうケースとか結構ありました」（対象者 4）

・「キーワードを反映してないような論文とかもなんか出てくる時があるんですよね」。「中国語の文献がそうだったんですね」（対象者 7）

・「甘い気がします」。「関連度順の精度は正直あんまり高くない気もするんですけど」（対象者 10）

・「スペシフィックに決まるものだと上に来てるんでしょうけど。やっぱ上手いキーワードとかが入れてない時は全然ダメ」（対象者 15）

「不満なし、気にしない」の対象者からは、許容する発話が多くあった（対象者 2、7～10、12）。単に気にしないというものや、完璧を求めていないもの、無視する（見れば分かる）というもの、そして、WSD への期待値の低さが影響しているというものもあった。

・「現実問題やっぱり起こりますよね。他のデータベースでも」。「もう受け入れないと仕方ないとは思います」（対象者 7）

・「ちょっとイラッとするくらいで、あのー、スルーします」。「気にしないでフンフンくらいの」（対象者 8）

・「検索エンジンは完璧じゃないので仕方ない」。「（自分の検索と関係ないものが出てくることは）ありますね。でも、それに関しては Google Scholar も一緒かな」（対象者 9）

・「ちょっと精度低い情報も出てきますけど、そういうのは瞬時に無視すればいいだろう」（対象者 10）

・「その程度だろうという」（対象者 12）

なお、「無視すればいい」という対象者 10 からは「無視できるくらいまで、その分野を知っている必要はある」という発話もあった。

適合度表示の不適の原因として、自分の検索方法に触れる発話もあった（対象者 7、10、15）。

・「検索の仕方が悪いのかもしれないですから」。「検索リテラシーを上げる方法を知りたいなというように、そういうような思考に繋がることも、一方ではありますよね」（対象者 7）

・「そういうのは結局こっちの探し方も悪いのが多分あって」（対象者 10）

・「自分が入れて、自分が欲しいもの来てなかったら、このクエリ悪かったんだなって

思わなきゃいけない」（対象者 15）

研究分野が検索エンジンに関連する対象者 15 の発話は個別性の強い発話の可能性があるが、他の対象者からも発話があったのは、検索結果と自らの検索方法を照らし合わせながら検索している利用者がいることを示唆するのかもしれない。

回避策に触れる発話は、ここでも現れた（対象者 4、10）。

以下のような発話があった。これも他の対象者から発話がなかっただけで、何らかの回避策を取っている可能性はある。

- 「そういう時は、言語を変えるか、調べ方を変えるかのどっちかしか方法がないですね」。「指定キーワードを変えたり」（対象者 4）
- 「ちょっと力業になるんですけど 5、6 ページ見て、やるっていうのがいいのかな」。「別にこちらが 3、4 ページぐらいざーっと見ればいい話」（対象者 10）

「現象を認識せず」の対象者からは以下のような発話があった。多くは、特に適合度表示の不適を気にしたことがないというものだったが、概ね適当な表示順だという発話もあった。

- 「経験上は（検索結果に関係のない資料が上位に出てくることは）ないです」。「大きく検索して、色々見てみるみたいな感じの方が多いので」（対象者 1）
- 「イメージがよく分からないんですけど、僕はそれ自体はファセットで絞り込んだりして除外してるのかもしれない」（対象者 3）
- 「そういう（関係の小さい）資料はあんまないんじゃないかと思います。なんか私が使ってる時の感じだと、なんも一切ゼロ、なんにも出ないか、まぁ何十個か出るかみたいな」（対象者 11）
- 「大体的を得たヤツが上に来てくれてる感覚はあります」（対象者 14）

また、対象者 11 からは、分野外のものが出てくるのは歓迎しないとしつつ、「（関係の）小さいものはむしろ出てきてほしい」という発話もあった。幅広さを求める志向に重なるものだと思われる。

●非対象コンテンツ。検索対象になっていないコンテンツもあるが、どのように思うか。

発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・不満なし、気にしない：　1名（対象者2）

・非対象コンテンツを許容：　5名（対象者、4、7～9、14）

・認識せず：　8名（対象者1、3、5、6、10～12、15）

インタビューでは、非対象コンテンツについて認識しているかどうかを特に確認しなかったが、特に認識も意識もせずに利用している利用者が多いことが示唆される。一方で、主なものは検索対象となっている期待を述べる対象者もいたように、主なデータベースも含めて広く対象となっていることを期待する利用者が多いことが示唆される。

また、予備調査では、新聞データベースや個別分野（国文学など）のデータベースを使用している数名から、それらをWSDの対象にしなくてよいという発話があったが、今回の対象者からはこういった発話はなかった。それらを活用している利用者が含まれていれば、違う結果になったと思われる。本調査には、個別分野のデータベースを利用する対象者が含まれていたが、WSDを「幅広く」「補完的に」利用することから、WSDの対象にしなくてよいという発話がなかったと思われる。

検索対象としてニュース記事や書評なども想定すると、どこまでカバーすれば「全て」網羅していると言えるかは、利用者のニーズによっても変わると思われる。しかし、多様な学術情報を一括して検索できることを目指すのであれば、検索対象をなるべく広くすることが求められるだろう。その上で、WSD画面上のファセットなどの表示や、別画面などで検索対象および非対象コンテンツを利用者に示す方法についての検討も必要と思われる。

非対象コンテンツがあることを認識（推定）していると発話に現れたのは、対象者4だけであった。対象者4は、「実際に検索してみて、明らかにない時代とか、そういうのはありましたんで。ひょっとしたらただの検索不足、検索・サーチ不足っていう可能性ももちろんあるんですが」との発話があった。

「不満なし、気にしない」の対象者2は、「あんまり（マイナスのことは）口にしたくない」ということも影響してか、「特に気にしてない」ということだった。

「非対象コンテンツを許容」の対象者からは、以下のような発話があった。

・「ある物で済ますしかない」。「論文がだめだったらニュースで、と。現代史だったん

で、そのやり方が結構効いたっていうアドバンテージがあるんですよね」（対象者 4）

・「（検索対象が含まれていても、検索エンジンによって検索結果が異なるなら）やはりまあ、うーん。まあ別々にやっぱり使う必要があるのかなっていう風には感じましたね」（対象者 7）

・「Google Scholar 使えばよいんじゃないっていう、別に・・・。」（対象者 8）

・「Google Scholar に載ってないものが、見つかればいいなーとか」（対象者 9）

・「運命としてあきらめる感覚に近い」。「多くあってほしいという希望は常にありますけれども、強く不満に思わない」。「なぜかと言ったら、Doors 時代で過ごしてきた自分の方が長いからです」。「そのメリット感ははるかに大きいので、多少捕捉できてない部分があっても構わない」（対象者 14）

なお、「好きでない点・悪い点」として、「WSD の検索対象が不明」に触れた対象者の内、対象者 7 と 9 は、ここでは「非対象コンテンツを許容」の発話があった（もう 1 名の対象者 15 は「認識せず」）。

「認識せず」の対象者からは、以下のような発話があった。非対象コンテンツについて意識していないという発話や、「全て」というイメージを持つ発話、非対象コンテンツがあることより何かが出てくることを期待する発話があった。

・「あんまり気にしたことはない」（対象者 3）

・「対象になってないのがあるんですか」。「なんか全てっていうイメージが」（対象者 5）

・「”まとめて（検索）”なのに、まとまってなかったのが悲しいです」（対象者 6）

・「そもそも検索対象になってないというものがあるのを知らない」。「そもそもそこは別にあんまり求めてなくって」。「なんか出たらラッキーぐらい」（対象者 12）

上記以外の点では、「主なものは対象という期待」を述べる対象者があった（対象者 5、6、14）。これについては、発話に現れなくとも、利用者の期待としてあるだろう。以下のような発話があった。

・「（全て）網羅してくれてるのかな、みたいな、、、主なものを」（対象者 5）

・「ちゃんとしたジャーナルは、大学の”まとめて検索”は少なくとも入れてるだろうなと思ってて」（対象者 6）

・「捕捉できてない部分がメジャーな部分というか、それを外してくれてるのは嫌です

けど」（対象者 14）

また、上述の「非対象コンテンツを許容」と一部重なるが、検索対象の網羅性よりも、「補完的に見つかる期待」を述べる対象者もあった（対象者 9、12)。以下のような発話があった。

・「違う検索エンジンで、例えば関連度が低いのに下にあるようなものが偶然上にきたらいいなーぐらいなので。ただメインで使ってたら恐らく気にはなったかなと思いますね」（対象者 9）

・「（おもちゃのガチャガチャみたいに）100 円入れてガチャってやって、なんか良いの出てきたらラッキーくらいの気持ちでやってます」（対象者 12）

⑩WSD について、見解の異なる印象論

ここでは、WSD は初学者向けなのかなど、見解の異なる印象論について、いくつか質問した。以下、結果を述べる。

●WSD は文献データベースの使い分けを（それほど）意識しなくて済むため「学部生向け」「初学者向け」と言われることもあるが、どう思われるか。

インタビューの際には、WSD はまとめて検索できるので、文献データベースの使い分けをそれほど意識しなくても済むという意味で、「学部生 1-2 年生向け」や「初学者向け」と言われることがあると説明した。しかし、対象者の中には、「初学者」をあるテーマについて研究を始めた段階という意味で理解されて、その前提での回答もあった。

そのため、結果の整理が少し分かりにくくなった部分もあるが、以下補足しつつ結果を整理する。

この質問に対する発話を理由も併せて類型化すると、次のような結果となった（対象者 11 は「肯定」と「否定」の両方に該当する発話あり。理由は重複あり）。

・肯定（学部生・初学者向けである）：　6 名（対象者 3、4、8、9、11、15）

a）幅広さ　5 名（対象者 3、4、9、11、15）

b）機能として問題なし　3 名（対象者 3、8、9）

c）図書館員が推奨と理解　1 名（対象者 15）

・否定（学部生・初学者に不適）：　6 名（対象者 6、10～14）

a）一定の知識が必要　5 名（対象者 6、11～14）

b）検索対象が広すぎる　3 名（対象者 10、13、14）

c）まず書籍、OPAC を利用　3 名（対象者 10、11、14）

・特に印象なし。利用対象を限定しない　4 名（対象者 1、2、5、7）

「学部生向け・初学者向け」を否定する発話は、学部 1～4 年生の対象者には現れず、6 年制学部卒業者および大学院生以上から現れた。6 年制学部卒業者以上から「否定」の発話があったことは、注目に値すると考える。

「肯定」とは、「WSD が学部生向け・初学者向けという考え方を肯定する」というものである。「肯定」の理由を類型化すると、「a）幅広さ」、「b）機能として問題なし」、「c）図書館職員が推奨と理解」と分けられた。

「a）幅広さ」とは、「幅広い範囲から検索できる」ということである。以下のような発話があった。

・「（検索結果の）識別。そうはあんまり意識してない気がしますね、みんな」。「必要なデータ等が揃いさえすれば（他の学部生たちは）文句を言わないイメージ」（対象者 3）

・「まず最初、当てずっぽうで、広い範囲で絞って、検索して、段々（中略）調べたいものを絞っていくっていう」。「学部生レベルにとっては、十分、えー、十分力になれると思います」（対象者 4）

・「広いところから始めた方がいいのかなと思います」。「最低 1 個でも（中略）イメージ通りのが引っかかれば、そこから語彙がまた増えるので」（対象者 9）

・「（学部 1-2 年生的な初心者ではなく、ある程度論文をもう使えて）研究者としての初学者みたいな」。「初学者向けっていうのは、今回の私の結果を見ても、（修士課程で、先行研究をたくさん調べたかった）昔の方が使ってたっていうのは、確かに初学者だったからかもって思います」。「知識があんまりなくて、いろんな情報を集めたいみたいな人には確かによいのかもしれない」（対象者 11）

・「使い分けするよりも、それでボンと串刺しした方が全然楽じゃないですかみたいな話ですよね？」（対象者 15）

また、対象者 9 は、WSD の検索対象が広すぎるという反論に対しては、「検索精度そのものの向上」と「クエリ投げる側の語彙の発展」が「ある程度解決するかなー」という発話もあった。

対象者 11 は「研究者としての初学者」という限定があり、後述のように、論文を使わない学部 1-2 年生を想定すると、WSD は学部生向けではないとの発話もあった。

「b) 機能として問題なし」とは、「学部生・初学者でも利用できる機能がある」ということである。以下のような発話があった。

- 「漠然と検索するだけだとしたら、必要な機能も備わってると思うので」（対象者 3）
- 「Google Scholar よりは学部生が使いやすいかなと思います」。「詳細検索もそんなに難しい訳ではない」（対象者 8）
- 「見やすくて分かりやすい」（対象者 9）

但し、対象者 8 からは根拠に確証が持てない発話や、技量が必要という発話もあった。具体的には、次のようなものである。

- 「何を根拠に言ってるのかって言われたら、あんまり根拠が言えないんですけど」。「学部生の子、今年見てて、、、検索ワードの選び方が分からないっていうのが、まずあったので、まあ何回も使って検索ワードの使い方、検索ワードの探し方に慣れるっていう訓練もできるのかなと思います」。「使う側の、技量というか、結局どのサービス使うにも必要なので」（対象者 8）

「c) 図書館員が推奨と理解」とは、「講習会での図書館員の説明から、WSD 推奨と理解した」ということである。

「c) 図書館員が推奨と理解」の発話として、以下のようなものがあった。但し、この発話のあった対象者 15 は教員であるため、個別性の強い発話の可能性がある。一方で、図書館員の説明方法によって、検索ツールのイメージや利用目的の伝わり方が変わることを示している事例と思われる。

- 「（学部 1-2 年生を想定して）Plus 付いてるやし、図書館の人たちも DOGS Plus の話ししてはるから、こっち使う方がええんかなっていう感じだった」。「（WSD で検索を）やる方が図書館の方々のまぁ知見と思ってたので」。「講習会の（中略）話の構成からして（中略）これから DOGS Plus（推奨と）言ってるような気が、僕はして

いましたね」（対象者 15）

但し、「Doors か DOGS Plus という感覚はなかったです」という発話もあり、強い確信ということではないようである。

「否定」とは、「WSD は学部生・初学者に不適」というものである。「否定」の理由を類型化すると、「a）一定の知識が必要」、「b）検索対象が広すぎる」、「c）まず書籍、OPAC を利用」という概念が見られた。「b」と「c」は似た概念であるが、発話によって分けて整理した。

「a）一定の知識が必要」とは、「WSD は学部生・初学者向けでなく、WSD 利用には一定の知識が必要」ということである。以下のような発話があった。長くなるが紹介する。

- 「『学部生向け』っては思ってなかったと思います。『初学者向け』っていう感じでもなかったかな」。「最終的にこう行きつく先かなっていう感じで」（対象者 6）
- 「情報の信用性、文献の重要度を測る能力が必要」。「（ページ数や資料タイプについて）いくつかの基準があって、自分に必要か必要じゃないかを判断していくんですけど。初学者だと、そいうのはやっぱりできないんかなって」（対象者 10）
- 「むしろこれは玄人向けだと思いますね」。「これに最初頼るのは危険だと思います」。「最後に使うべきなんじゃないかなと思いますね」。「僕らの分野だと、やっぱりまず権威とされる研究書があって」、「（その研究書に）引かれてるものを辿ってくっていうのが（中略）そういう文系の研究をやってる人にとっては王道の、そういう先行研究の探し方」。「データベースで頼るっていうのは、やっぱり雑多というか、アルゴリズムよく分からないので。研究書の中に紹介されてるものだったら分かるじゃないですか、これが重要だっていうのは」。「研究書、で重要データベース。で更にそっから、更に調べたい時に、WSD っていう感じで、頭の中でやってますね」（対象者 12）
- 「（検索結果画面で様々な表示・記号が一杯書いてあること）を理解できるのは、ある程度普通の OPAC を使ってたり、他のデータベースに慣れてる人、CiNii Books を見てたりしたりしてる人は、ちょっと分かると思うんですけど」。「（最初に使う人は）そこでもしかして躓いちゃうんじゃないかな」、「どこに何があるか全然分からんし。そしたら Doors で調べたら、まずは自分の図書館から調べていこうっていうことで」。「（自分が 18 歳で入学して、多くの）蔵書数のある大学図書館に行ってみて、DOGS Plus 使ってみて、パンクじゃないけど、処理はできないですよね」。「（WSD で『本

学蔵書に絞る』機能があるが）その『本学蔵書』の意味が多分わからないんだと思う」（対象者 13）

・「初学者向け的なイメージはないです。専門家向けなイメージ」（対象者 14）

但し、対象者 14 からは、対象者 11 が「肯定」の理由として「研究者としての初学者みたいな」と述べたように、「修論レベルで、自分のテーマで、よく分からないって時は（中略）当たり感をつかむためのザッピング的なものとして有用だと思います」と同じ趣旨の発話もあった。

「b）検索対象が広すぎる」とは、「WSD の検索対象が幅広いため、その識別が必要」ということである。以下のような発話があった。

・「WSD は雑多すぎ」（対象者 10）

・「様々な情報を正しく判別できるかどうか」（対象者 13）

・「幅広すぎて問題になるっていうことがそのまま当てはまると思います。初学者の場合」。「幅広すぎて、どれがその中で大事なのかっていう感覚が分からない人にとっては、ばーって与えられたら分からないと思う」。「（修士 1 年、社会人の人に）最初に思うのは、学術書と一般書の価値観の違いってのをまず判らない」。「（そういう）感覚が、社会人の人ですらもある。それは学部生だとなおさらですね。本やったら本やんと思ってる」。「DOGS Plus みたいにしてぶわーって出てきたら、その区分け感が分からないまま行くので。だからデメリットだと思います。幅が広すぎると」。「そこは教えてあげないといけない」（対象者 14）

・「大学 1 年生くらいのイメージ」で、「学問カテゴリー自体をまず認識してないことが多いです。例えば、社会科学と人文科学とかっていう、自然科学とかっていう区分けを分かってない」。「（学部 3-4 年生でリテラシーが付いてきたような）人だったら大丈夫だと思いますね」。「DOGS Plus みたいなもので検索して、同志社にはないんや残念、と思っても、『あ、京大の図書館に行けば手に入る」と思ってじゃあ行こって思える風になってる人だったらよい」。「その労力に行く前と、行く以前で僕の中に区分けがあります」（対象者 14）

「c）まず書籍、OPAC を利用」とは、「学部生・初学者は、まず書籍を利用する場合が

多い。書籍だけなら OPAC でよい」ということである。以下のような発話があった。

- 「初学者は OPAC に親しんで、図書館に行ってその棚を眺める方がいい」。「(初学者は) やっぱり教科書とか、先生の参考文献表とか、そういうのに頼って、いくべきだと思っているので。それで、そうなるとやっぱり OPAC を使うことになると思います」。「図書館のその番号のところに行って、その棚の周辺の本を眺めたりとか、読んだりした方がいいんじゃないかな」(対象者 10)
- 「(理系の場合) いわゆる『学部生向け』っていうのは研究室に入る前みたいな、授業しか受けてない学生だと思うと、あんまり使う機会ないかなと思います (論文を使用する機会が少ないので)」。「学部 1-2 年で、特に論文探してるとかじゃなかったら、あんまり。情報量多すぎるかなっていうのは (2 年前の予備調査の時の考えと) 変わらないです」(対象者 11)
- 「本当の初学者のレベルだと (中略) 図書館で実際に借りれるやつを最優先で選ぶとかいうふうになる」。「図書館の中にあることが最優先されるケースが多い」。「そうであれば、Doors だけでいいんですよ」(対象者 14)

「特に印象なし。利用対象を限定しない」とは、「そのような印象は特にない。学部生・初学者に限らず、広く利用できる」というものである。

これに該当する発話があったのは、学部生と、利用期間の短い大学院生だけであった。意識していなかったことについて、あえて言語化していただいたような印象もあるが、以下に発話を紹介する。

対象者 1 と 2 からは、特に印象がないという発話があった。

- 「特別そういう印象があるわけではない」(対象者 1)
- 「学部生向けとか、初心者向け、っていう感じでは、特に私自身使ってる中でそういう印象を持ったことはない」。「別に院生とか、まぁ、先生方とかも (中略) 取りあえず、誰でも使えると、思う」(対象者 2)

対象者 5 と 7 は、学部生時代に WSD をあまり使わなかったことや、スキルが必要ではないかという発話の揺れがあったが、利用対象を限定しないという発話があった。

対象者 5 からは、学部生向けとは思わないという以下のような発話があった。

- 「全然そんな (学部生向けという) 印象はなくて」。「DOGS Plus の持つイメージが、あるデジタルの百科事典みたいな感じ」。「文献探索の入口みたいなイメージがあり

まして。全然その対象が限られるとかそんな印象はなかった」。「初学者にとっては簡単だと思う」。「Google 検索とかと同じような感覚でできる」（対象者 5）

しかし、対象者 5 自身の経験では、学部生の時はあまり使わっていなかったという。

・「やっぱり簡易性が違う。なんか DOGS Plus はやっぱり難しいイメージがあって。やっぱり学部生として簡単に調べられる Doors とか CiNii Books 最初に使っちゃって」。「なんか学部生の時はあんまり使わなかったですね。（中略）本当にこの春休みとかも結構修士論文のテーマのために今キーワード広げてる時なので、（WSD を）使ってるっていう感じで」。「（WSD は）見るのが煩雑でという気持ちが正直になってしまう」。「なので学部生の時は Doors とか CiNii Books で調べてたっていうのもあります」（対象者 5）

利用期間の短い対象者 7 は、「（初学者向け）だけではないっていうのが多分一番自分も、同意できるとは思います」。「色々データベースとかのことも気にしないで、もうまとめてポンって出てくるという機能自体は初学者には向いてる」。「すべての人（学部 3-4 年生、修士の大学院生も）が使えるんじゃないでしょうか」という発話があった。一方で、「情報を分類するかとか、絞り込みするかとかとか、そこは検索リテラシー必要ないのかな？　とは思いますけど」というスキルが必要ではないかという発話もあった。

●「日本語論文を調べるなら、CiNii Articles が十分で、的確」という意見もあるが、どのように思われるか。

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった。

・肯定：　3 名（対象者 10、12、13）
・否定：　6 名（対象者 2、5、7、9、11、14）
・どちらとも言えない：　2 名（対象者 4、15）
・日本語論文は不使用：　3 名（対象者 1、3、6）
・明確な回答なし：　1 名（対象者 8）

日本語文献に対する CiNii Articles の網羅性や、利用者への浸透度から、「肯定」の発話者がもっと多いと想像していたが、意外に少ない結果となった。「否定」の発話者が意外と多いという印象を持った。

本調査の対象者が WSD を「幅広く」「補完的に」使用する者が多いことが、「否定」つ

まりは「CiNii Articles だけでよいとは思わない」という考えにつながる要素になったと思われる。そのような利用方法をしている者は、CiNii Articles のように相当の認知度が高いと思われるデータベースがあっても、WSD を活用しようとすることが示唆される。

「肯定」の理由を類型化すると、発話のあった 3 名とも「CiNii Articles で十分。慣れている」となった。

以下のような発話があった。

・「日本語やったら CiNii でいいかなっていう気はしますね。まあほぼあるんじゃないかなっていう。CiNii に」（対象者 10）

・「WSD も日本語文献目的に使ったことない」。「CiNii あるからいいじゃんっていうのがあって」（対象者 12）

・「論文調べるなら、もうすぐ CiNii Articles 使った方がなんていうか見慣れてるし、画面を」（対象者 13）

対象者 12 に、さらに「学部生・院生を指導するとして、彼らが日本語文献を探す場合に、どれを勧めるか」と投げかけたところ、「あー、もう CiNii ですね、はい」という発話があった。

「否定」の理由を類型化すると、以下のようになった。

・幅広く調べる：　5 名（対象者 2、5、7、9、14）

・文献入手のため：　1 名（対象者 11）

「幅広く調べる」の発話としては、以下のようなものがあった。

・「自分のやっぱり学問とかを考えると」、「CiNii Articles だけでは見つからないことも。CiNii（中略）が全部こう全ての雑誌を網羅してるかっていうと、そうでもないので」（対象者 5）

・「CiNii とは違う論文がこっち（WSD）に出てくるんであれば、これを使う価値はあるとは思います」（対象者 7）

・「僕の中では大は小を兼ねるの方が勝つ」。「（CiNii Articles）以外の漏れてるのがあったら嫌だなって、どっちかというと思う方です」（対象者 14）

また、対象者 2 と 7 からは、「（CiNii Articles で）十分やっていう意見としては、確かにその通りやとは思いますけども」（対象者 2）や、「（CiNii Articles は）一番日本語の論

文のデータベースとしては、自分も信頼してる」（対象者 7）といった、CiNii Articles の信頼性に関する発話もあった。

もう 1 つの理由「文献入手のため」の発話には、以下のようなものがあった。

・「CiNii で調べ後に”まとめて検索”で調べたりすることは、自分自身はあるので」。「取り寄せしたい時は、結構”まとめて検索”使ってる気がします」。「阪大通して何かをしようとした時の、手続きへのアクセスの良さみたいなのは、”まとめて検索”の方が便利だと思ってる」（対象者 11）

この「アクセスの良さ」の具体的な内容について掘り下げて聞くことはできなかったが、同じような発話は、対象者 6 からも別の場面であった（「”まとめて検索”に入れたら大学のフィルターを通るから読めるんじゃないかなと思って」）。一部の利用者は、WSD というものは各大学が個別に提供していることから、それぞれに最適化されているというイメージを持っているのかもしれない。

「どちらとも言えない」に類型化した 2 名からの発話も紹介する。利用者の慣れに言及したものや、あくまで幅広さを評価する発話であった。

・「その人にとってディスカバリーが CiNii より馴染み、使い勝手が良いと感じたり、馴染み深いのであるならば、それはもちろんその考えもある」（対象者 4）

・「最近（CiNii Articles に）色んな分野のも入ってきてくれるようになったので、その意味ではすごくいい感じになってきた」（対象者 15）

●学部生の場合、紙の図書で学習やレポート作成するから、WSD ではなく OPAC を優先して使う（使用を推奨する）という意見もあるが、どう思われるか。

これに対する発話を理由も併せて類型化すると、次のような結果となった（理由は重複がある）。

・肯定（OPAC を優先する）：　6 名（対象者 4、10～14）

a) 広すぎて混乱　4 名（対象者 10～12、14）

b) OPAC が簡便　3 名（対象者 4、12、13）

c) 図書の利用で十分　2 名（対象者 10、11）

d) OPAC で基本を学ぶ　1 名（対象者 14）

・否定（OPAC を優先しない）：　8 名（対象者 1～3、5～8、15）

a）蔵書以外の利用　6名（対象者1～3、5、8、15）

b）自分の分野では図書を調べることは少ない　3名（対象者3、6、15）

c）論文を探す訓練になる　1名（対象者7）

・どちらとも言えない　1名（対象者9）

「肯定（OPACを優先する）」の発話は、学部4年生の対象者4および大学院生以上からであった。学部生に対して「肯定（OPACを優先する）」という発話が、学習・研究の段階が進んでいる大学院生以上に現れたことは、WSDが「学部生向け」とされてきたことに疑問を投げかける結果となると考えられる。

「否定（OPACを優先しない）」の発話のあった身分は学部生から教員と幅は広かった。理由として「a）蔵書以外の利用」の発話は6名からあった。しかし、本調査の対象者がWSDをある程度利用しており、学部生でも対象者1以外は雑誌論文を利用している。CiNiiやPubMedといった文献データベースも利用している。そのため、WSDを利用していない学生の考えを反映したものではないとも言える。

また、「b）自分の分野では図書を調べることは少ない」の3名は医学分野および情報分野であり、個別性の大きな発話と考えられる。

したがって、本調査の対象者からの発話を総合すると。学部生に対しては、「OPACを優先する」という考え方が強いと読み取れると考えられる。あるいは、学部生がWSDを活用するには、多様な学術情報について理解できるよう働きかけていくことがポイント、と言えるかもしれない。以下、詳細に見ていく。

「肯定（OPACを優先する）」とは、「学部生はWSDよりOPACを優先して使用する（使用を推奨する）という考えに同意する」というものである。「肯定」の理由を類型化すると、「a）広すぎて混乱」、「b）OPACが簡便」、「c）図書の利用で十分」、「d）OPACで基本を学ぶ」という概念が見られた。

「a）広すぎて混乱」とは、「WSDの検索対象が広いため、学部生は混乱する」ということである。以下のように、WSDの幅広さが、学術情報や学問分野の基礎が分かっていない者には混乱の原因となるという発話があった。

・「（学問分野の）地図とか、あと基準が自分の中にないと、やっぱり雑多な情報が全部入ってきちゃうので。あっぷあっぷになる」。「最初からある程度限定されてる方法を

使った方がいいのかなって」。「（自分が）学部の時はあんまり使いこなせなかった」。「やっぱり雑多っていうのがあって」。「その文献の重要性とか種類とかを判断できなかったので、当時は。キーワードで検索しても 1 万件とかいきなり出てくるので、それに目をくらったというか。なんで、逆に OPAC とかの方が限定、OPAC・CiNii の方が限定されてる分、使いやすかったっていうのが、なんか学部の時はありました」（対象者 10）

- 「学部生の方だと、WSD で一回あのバッて見ちゃうと情報量が多すぎる」。「OPAC でそういう研究書を調べて、そん中に入ってる参考文献やら何やらを見てく方が多分効率いい」（対象者 12）
- 「（権威ある学会誌のフルテキストが利用可能になるまで時間がかかるので）エライ先生が適当に書いた論文とかの方がヒットしちゃう。でそれを、フルテキストですぐアクセスできるから、それだけ見て（学生達がレポートを）書いちゃうってことがあるので、それかなり良くないなあとはちょっと思ってる」。「新しく大学生になるっていうことだったら、もしかしたら DOGS Plus の方が（中略）あの始まりとしては、やっぱいいのかもしれないな」、「少ないキーワードで文献が多く出てくる」。「（けれど）大学生が使う場合を考えた時に、うーん、そこまで広く出されても、うーん、あんまり辿り着く気力が」（対象者 13）
- 「（学問分野の全体像を学ぶ途中の人が）全く訳分からない所に放り込まれる感が。溺れちゃうと思う」。「（多くの情報の中で『本学蔵書』と）目指すものが分かってる場合は、全然（大は小を兼ねる WSD で）大丈夫なわけですよ」（対象者 14）

「b) OPAC が簡便」とは、「OPAC の方が簡便で基本的」ということである。以下のように、OPAC が基本ツールといった発話や、自分の経験として主に図書を使っていたというものがあった。

- 「蔵書検索の際には、OPAC の方が特に知名度が高い」。「市内の図書館なんかでも使ったり」。「OPAC の方が、蔵書検索の際には特に馴染み深いのではないのかな」。「実はレポート書く上であまり論文を扱ったこと（中略）いや、論文ほとんどないんですよね」。「主にディスカバリー、僕は論文検索に使っていた」（対象者 4）
- 「最初は OPAC でいいんじゃないかな」。「簡単だし、今一番誰でも利用しやすい」（対象者 12）

・「Doors とか CiNii がまず初手として入ってて、DOGS Plus は応用編みたいな感じになってしまう」。「結局 WSD については、ぼんやりとしか分からない。ま司書課程の、課程をとって司書として働いていても、多分わかってるとはほとんど言えない」（対象者 13）

「c) 図書の利用で十分」とは、「学習するのに図書で十分」ということである。以下のように、分野を限定しながらであるが、図書で十分という発話があった。

・「（政治学系だと）正直学部生、CiNii も使わん方がいいと思いますね」。「本でいいと思いますね」（対象者 10）
・「理系の場合は、体系化されたものをまず勉強。いわゆる本で勉強する」（要約）。「（自分が学部生に戻ったとしたら）なんならもう OPAC 使わないでもう、本棚を見に行くことの方が多いかもしれない」。「なんで本棚かなんですけど、要するに（理系で最初に勉強する）体系化された理論は全部一緒なんで、どうせどの本を借りても書いてることは一緒なんですよ」。「タイトルはほとんどみんな『電磁気学』とかなんですけど、その（中略）書き方が違うみたいな。ので、だから OPAC で電磁気学なんか調べたら、もうめっちゃ出てるじゃないですか。で、（本棚に）あることはもう分かってるので、どれが良いのかっていうのをやっぱ本棚で見る方が、うん、多いかなって思います」（対象者 11）

「d) OPAC で基本を学ぶ」とは、「OPAC を使いながら、学術情報や学問分野の基本を学ぶ」ということである。発話として、以下のようなものがあった。

・「（何が基本文献か）を教えた上で（基本文献に）当たってほしいですし、教えれない場合でも、当たりながら自分の中で認識していくようになってほしいんですよ。まったくその分野の中で（中略）こういう第一人者的な奴がいて、こういう名前の奴なんやって、やってたら気づいていくわけですよ。色々当たっていくと」（対象者 14）

「否定（OPAC を優先しない）」とは、「学部生は WSD より OPAC を優先して使用する（使用を推奨する）という考えに同意しない」というものである。「否定（OPAC を優先しない）」の理由を類型化すると、「a) 蔵書以外の利用」、「b) 自分の分野では図書を調べることは少ない」、「c) 論文を探す訓練になる」という概念が見られた。

「a）蔵書以外の利用」とは、「WSD ないし OPAC 以外で蔵書以外の利用ができる」ということである。

「a）蔵書以外の利用」の発話として、以下のようなものがあった。

対象者 1、3、5、15 からは、比較的確信を持った発話があった。

- 「特に別に紙の図書を推奨されるわけでもない」。「（OPAC を）使う人は使うし、使わない人は使わない。ネットで済ませてしまう学生もいますし」。「（レポートを書く時、ネット上の情報と、紙の本の）両方使うって感じですね」。「（いわゆる教科書的なものを使う比重は）多いですね」。「（だから OPAC を優先するというのは）ちょっと違いますね」（対象者 1）
- 「ガッツリ読みたいんだったら、OPAC で探し出してきて、それを全部読むべきだと思うし。でその時間がない中でレポート作成等をしなければならないんだったら、WSD なのかなって気もします」（対象者 3）
- 「（検索手段の選択は）個人のその判断の部分なので、そこはどっちが良いとかっていうのは、私はあんまり考えてない」。「最初はとりあえず本とか（中略）を使った方がいいと思うんですけど、別にそうだからといって、一応ネット上の何か情報とかを全て否定するのは、それは偏っていると思うので」（対象者 5）
- 「色んなこと探せれる方が便利は便利と思ってるので、DOGS Plus の方がよいんじゃないかなとは思いますけどね」（対象者 15）

対象者 2、8 からは「a）蔵書以外の利用」について、やや漠然とした印象とも聞こえる発話があった。

- 「多分おんなじくらい使ったらいいと思うから、なんか特別 OPAC を優先して（使う理由はないのでは）」。「目的とかに応じて、DOGS Plus も使ってった（方）がいいんじゃないのかなって思います」（対象者 2）
- 「阪大の蔵書に入ってない本がなんぼでもある」。「画面でタブを変えれば、CiNii Books も同時に検索できるので、多分それ勧めると思います」。「自分が WSD を上手く、上手く説明できるようになれば、そっちも勧めるかもしれない」。「学部 1 年生、OPAC 使って自分で図書館に取りに行っててしたらよいのかな。多分論文読むところまでって行かないんですよね、1 年生って。まあ、どっちでもいいんじゃないって」

（対象者 8）

「b）自分の分野では図書を調べることは少ない」とは、「対象者の分野では図書を調べることは少ない」ということである。以下のように、医学分野と対象者 3 と 6、情報分野の対象者 15 の発話であり、分野の個別性が大きい発話と思われる。以下のような発話があった。

- 「僕ら自体は教授から教科書を指定されていて、それを元に作りなさいと言われたり。OPAC をだからほぼ皆無で使用しないんですよね」（対象者 3）
- 「（医学部では）検索は文献のイメージ」（対象者 6）
- 「色んな（プログラミング）言語を勉強するための、まあプラットフォームみたいなのが出来上がっていて。そこに色々入力、ソースコードとか入力していくとちゃんと採点とかしてくれるようなサイトとか出てきてて」。「もうあんまり本で勉強するとかっていうのはないんじゃないかなと」（対象者 15）

「c）論文を探す訓練になる」とは、「大学院や研究活動に備えて、論文を探す訓練になる」ということである。

対象者 7 からは、以下のような発話があった。

- 「論文を読み込む訓練をしたかったな」。「研究は基本的にやっぱり一次資料が重要」。「将来的にこうやって大学院とか行く人は特に（中略）学年が低い時から WSD とかですよね。論文をやっぱり探すような訓練を積んでる方がよいとは思います」。「学年低い時に（中略）WSD のやり方とかの訓練をしっかり受けていれば、もっと上手いこと使いこなせてたかもしれないわけですよね」（対象者 7）

但し、対象者 7 からは「学部生は本を基本的には使うと思うんですけど」と、この質問の前提に同意する発話もあった。また、「自分が大学院いるわけだからそう思うのかもしれないですけど」と、大学院生という自分の立ち位置を認識した上での発話でもあった。

学部生が WSD を利用した際に、上述の「a）広すぎて混乱」という状況も想定されるため、WSD を利用していれば、「論文を探す訓練」になるというわけではないかもしれない。単なる利用だけでなく、何らかの説明や経験が必要と思われるが、対象者 7 の発話は、現在の大学院生という立場からこのように思えるというものだったと思われる。

「どちらとも言えない」に類型化される発話は 1 名の対象者からあった。

発話は次のようなものだった。検索ツールについては使用機会の問題と捉えている発話と理解したので、「どちらとも言えない」とした。

・「この技術一般の概観を見るっていう感じで、じゃあ最新研究どうなってるのっていう時には、やっぱり 1 年前、2 年前とかの論文ひたすら読んで追いかけるしかない」。「彼ら（学部 1-2 年生）はまず基礎の練習から入るかなと思うので、その意味だったらたぶん本を使いますね」。「是非は置いておいて、多分 Doors の方が圧倒的にそれを知ったり、利用する機会っていうのが多いんじゃないかな」（対象者 9）

なお、これら「学部生の場合、OPAC を優先するか」に関する各対象者の発話を、「学部生向け・初学者向けと言われることもあるが、どう思われるか」の発話と比較したところ、各対象者ともに概ね同じ傾向の発話であった。つまり、WSD が学部生・初学者向けと考える対象者は、学部生には OPAC 優先と考える傾向が確認できた。回答が逆転している対象者もあったが、その理由や分野の個別性から、大きな矛盾ではないと判断できた。

⑪メジャーな検索ツールの存在

●日本語論文の検索に CiNii Articles を利用されますか。利用するとしても、WSD を使われていますか。

これに対する発話を理由も併せて類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・はい（CiNii Articles を利用）：　9 名（対象者 2、4、7～12、15）

a) WSD も使用　3 名（対象者 2、4，9）

b）日本語論文に WSD は使用しない　4 名（対象者 8、10、11、12）

c）将来的には使用する　1 名（対象者 7）

d）特に発話なし　1 名（対象者 15）

・いいえ（CiNii Articles を利用しない）：　2 名（対象者 5、14）

・日本語論文の検索はしない　3 名（対象者 1、3、6）

＊対象者 11 は WSD を使うことが「稀にありますね」との発話があったが、その後の発話から「b）日本語論文に WSD は使用しない」に分類した。

日本語論文の検索ツールとして非常にメジャーな CiNii Articles との関係を見た時に、WSD を「補完的に」利用する者が一定数存在することが示唆される。それと同時に、「CiNii Articles で十分」と感じて、日本語論文の検索に WSD を利用しない者もいるということも示唆される。以下、詳細に見ていく。

「はい（CiNii Articles を利用）」に該当し、「a) WSD も使用」の 3 名の理由を類型化すると、すべて「補完的に」となった。なお、この質問の結果まとめは、インタビュー中の他の部分での発話（利用シーンなど）も含めて行っている。

「補完的に」とは、「CiNii Articles の検索を補完するために WSD を利用する」ということである。これは WSD の利用目的と重なる部分である。

以下のような発話があった。

- 「（優先順位の高いツールを使って）それでも見つからない時に（中略）ディスカバリーサービスを主に使っている」。「Google Scholar や CiNii Articles で見つけた論文で（中略）書かれていたことの根拠が知りたかった場合」（対象者 4）

「CiNii Articles の補助としての方がイメージはあるかもしれない」（対象者 9）

「b) 日本語論文に WSD は使用しない」の 4 名の理由を類型化すると、すべて「CiNii Articles で十分」となった。

以下のような発話があった。

- 「CiNii で一杯出てきちゃう。一杯出てきちゃって、それチェックしてたら一杯一杯」（対象者 8）
- 「CiNii で困ったことがあんまりない」。「事足りてて。それ以上必要性をあんまり感じなかった」（対象者 10）
- 「最近は、その日本語のやつ、大体読んじゃってるんで、なんかもう知ってる論文を見つける時に使うことが多いんです、CiNii を」。「そうなると結構”まとめて検索”まで行かなくても見つかることが多くて」（対象者 11）
- 「CiNii あるからいいじゃんっていうのがあって」（対象者 12）

「c) 将来的には使用する」は、対象者 7 から「将来的には多分使うと思います」と発話

があったものである。WSD 利用期間が短いが、WSD の利用価値を認識しての発話と理解できる。

なお、「はい（CiNii Articles を利用）」そのものでは特段の発話はなかったが、その他の発話を紹介する。

対象者 12 からは、「自分が全然知らない（分野の）やつで、日本語で取りあえず手っ取り早く情報を得たいとか、そういう場合によく使います」との発話があった。但し、自分の専門分野に関する検索で CiNii Articles を使うことはほぼないかと問うと、「あんまりー（使いません）。いやもちろん使うんですけど、まぁ大体知ってるんで、もう既に」とのことであった。

対象者 15 からは、「日本のジャーナルのペーパーとか書く時は、はい。ただやっぱり海外で投稿することの方が多い」との発話があった。

「いいえ（CiNii Articles を利用しない）」について特段の発話はなかったが、関連する発話を以下に紹介する。

・「なんか最近使わなくて、ほんとに」。「CiNii Books とか CiNii Articsles とかでなんか考古の論文引っかかればよいのにって結構そういう声をよく聞く」。「地方雑誌とかも結構使うので、その雑誌は他の分野、心理学とか（中略）より少ないなって印象」（対象者 5）

・「（CiNii Articles を利用しないのは、大は小を兼ねるということであり）CiNii Articles が悪いと思ってるわけではない」（対象者 14）

●個別の文献データベースを利用されるか。WSD との使い分け。

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・はい（個別の文献データベースを利用）：　8 名（対象者 3、6～8、10、12、14、15）

・いいえ（個別の文献データベースを利用しない）：6 名（対象者 1、2、4、5、9、11）

「はい（個別の文献データベースを利用）」に該当する文献データベースは以下の通りだった。

・PubMed（対象者 3、6）

・”International Journal of Epidemiology”というアメリカの公衆衛生の雑誌サイト（対象者 3）
・JSTOR（対象者 7）
・中東学会のサイト（対象者 8、但し「たまーに本当に 1 年に何回か」）
・留学先のグローンニンゲン大学 Smart Cat（対象者 10）
・ドイツのデータベース Weimarer Nietzsche-Bibliographie（対象者 12）
・EU（欧州連合）関連の新聞記事のようなものである EURactive（対象者 14）
・IEEE（電気・情報工学分野の研究団体）、ACM（計算機科学の国際学会）（対象者 15）

個別の文献データベースの存在が、必ずしも WSD の利用と相反するわけではないことが示唆される。これらの対象者は、文献検索の目的に応じて、複数のツールを使い分けていると思われる。但し、本調査はあくまで WSD 利用者を対象にしたものであり、どこまでツールを活用するかは、対象者の検索行動の幅など個別性が大きく作用する部分と思われる。本調査の対象大学では、個別の文献データベースで完結している者も多いだろう。

使い分けについては「利用目的」の部分と概ね重なるものである。実際、インタビューの途中で概ね触れられており、時間もあまりかけられなかった。但し、この場面で現れた発話を紹介する。

・「インパクトファクターの高いところのログを調べるってなったら」（対象者 3）
・「Smart Cat を知ってからは、ちょっと WSD に戻らなくなった時期はやっぱありましたね。やっぱりさっき言った文献の数では全然違って、eBook で電子書籍で見れるんで、ぱぱっと。」（対象者 10）
・「一次資料というか、それを発掘してる生の現場感がある部分です」（対象者 14）

●Google Scholar を利用されるか。WSD との使い分け。

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・はい（Google Scholar を利用）：　9 名（対象者 3、4、6～10、12、15）
・いいえ（Google Scholar を利用しない）：　5 名（対象者 1、2、5、11、14）

「はい（Google Scholar を利用）」が多いのは、雑誌論文を探す者の間で Google Scholar の使用者が多いことの現れと思われる。

「はい（Google Scholar を利用）」の対象者で、Google Scholar を利用する理由について、3 名から発話があった。以下のような発話があった。各ツールの長所を使い分けている発話があった他、機能の差ではなく、あくまで知った順番が早かったという発話も興味深い。

- 「Google Scholar 自体で結構なんかポっと調べられるスピード感の速いイメージがある」。「（使う順番としては）先に Google Scholar（が）来てる気はします」。「ただ Google Scholar だと粒度が粗めかなという気もしていて」、「絞り込み自体を考えると、WSD がの方が絞り込みはうまいのかなっていう気がします」（対象者 3。雑誌論文を探す際には、PubMed より先に Google Scholar で簡単にリサーチするとのこと）
- 「Google Scholar（の使用目的は）なんか医学じゃないやつ引っ掛けるのによく使ってて」。「公衆衛生とか社会学と近いところ」（対象者 6。Google Scholar は、たまに利用とのこと）
- 「（Google Scholar の方が優先度が高いのは）単純に、紹介してもらう順位がちょっと早かった」。「CiNii と Google Scholar（を）（中略）知る前にディスカバリー知った場合は（中略）使い方とか（中略）大分変わったんじゃないかなっていう、本当に思っているんです」（対象者 4）

他に、「はい（Google Scholar を利用）」の対象者からは、WSD と Google Scholar は競合ツールではなく、両方使用するという発話もあった。

- 「（WSD と Google Scholar は）競合（するツール）ていうイメージはあんまりないです」。「他のものがカバーしていないのを（WSD で）さらに検索かけるっていうイメージ」（対象者 7）
- 「（Google Scholar があるからといって、WSD を使わないという）そういうのは全くないですね」（対象者 10）

実際のところ、「はい（Google Scholar を利用）」の対象者全員が、雑誌論文を探す際のツールとして WSD より Google Scholar を優先しているが、WSD の利用目的として「補完的に」ないし「幅広く」に触れている。Google Scholar があるから WSD は不要といった発話もなく、片方の存在が別のツールの利用を否定しているわけでもない。したがって、Google Scholar で文献検索が完結することはあると思われるが、WSD 利用者は Google

Scholar の存在に関わらず、WSD を利用することが示唆される。

「いいえ（Google Scholar を利用しない）」の対象者 5 名には特に理由を問わなかった。但し、WSD がメインツールである対象者 14 からは、「そこ（使わないこと）に深い意味はないです」、「嫌いとかそういうのがあるわけでもないです。たまに使ってみる時もあります。気分ですね」という発話もあった。

●OPAC を利用されるか。WSD との使い分け。

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・はい（OPAC を利用）：　9 名（対象者 1、2、4、5、7、8、10、12、14）

・いいえ（OPAC を利用しない）：　5 名（対象者 3、6、9、11、15）

以下にあげる発話を見ていくと、OPAC を併用する対象者は、図書館蔵書を検索する際に OPAC を使用する傾向があるようである。

また、WSD で図書館蔵書を調べるかについて、あえて質問はしなかったが、そのような使い方についての発話はなかった。あくまで、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC である大学の調査であり、対象者が WSD を「補完的に」「幅広く」利用する傾向のある本調査からは、WSD で図書館蔵書を調べるという傾向は確認できなかったこととなる。但し、WSD がメインツールである対象者 14 は、検索の流れで図書館蔵書を調べている可能性はある。

一方で、既知資料の検索と、未知の資料の検索という使い分けがあることも想定していたが、そのような発話は本質問では現れなかった。

「はい（OPAC を利用）」の対象者の内、4 名（対象者 1、7、12、14）からは「学内蔵書の検索時は OPAC」と類型化できる、以下のような発話があった。

・「自分のパソコンでも使うんですけど、それは『これから借りに行くぞ』みたいな明確な目的があって検索する場合とかが多い」（対象者 1）

・「基本的には図書館のやつをやっぱり借りようとは思ってますので、やっぱこれが一番」（対象者 7）

・「ドイツのデータベースとかで著作がヒットした時に、大体（学内に）持ってないん

ですよね。で、研究室にあるかなとか、総合図書館にあるかなっていうのでまずOPACで見ますね。でそれが出てこない時にはCiNii Booksで全国の図書館を検索して、あれば相互利用にお願いするという、そういう流れ」。「（ここでWSDを使わないのは）ドイツ語の文献ってあんまり落ちてないんですよ、データとして」（対象者12）

・「取りあえずありもので済ませばいいや、っていう気持ちで探索するモードの時は、これで。逆にこれで行きたい」（対象者14）

「はい（OPACを利用）」の対象者の他5名からは明確な理由の発話はなく、インタビュー全体から推測すると、単に使用頻度や使い分けという背景と推定される。

但し、対象者5と10からは使い分けについて、以下のような発話があった。

・「OPACで（中略）古いものとかが結構出てきちゃったりする時」。「新しい本だったり論文だったり、知りたい時とかは（WSDを）使ったりする」（対象者5）

・「完全使い分けですね」。「OPACは本や日本語文献で使う。WSDは英語文献、特に論文を中心に。WSDは英語書評を読みたい時にも使う」（対象者10）

「いいえ（OPACを利用しない）」の対象者からは、逆にOPACが図書館蔵書を調べるツールだから使わないという発話があった。

・「結構新しい本を読みたい方なので、あまり図書館自体で保有してなさそうだなっていう先入観があるのかな」（対象者3。図書を調べる時はほとんどアマゾン）

・「図書館の棚のどこにあるのかっていうのを確認するツールっていうイメージが強い」（対象者9。図書を調べる時はアマゾンが優先で、借りようと決まっている時はあまり使わないがOPAC）

・「研究に関する文献とかはあんまりOPACでは探さない」。「（OPACを使わない理由は）なんだろう。本しか出てこないから」。「大体自分の使う本の場所は分かってるから、検索しなくても」（対象者11）

⑫文献調査の流れ

●WSDを文献調査の初期段階で、最初に使うことがあるか。

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者13を除く）。

・はい（初期段階でも使用）：　2名（対象者5、14）

・いいえ（初期段階で不使用）：　12 名（対象者 1～4、6～12、15）

「はい（初期段階でも使用）」が非常に限られた対象者だけとなったのは、本調査の対象者が WSD を「補完的に」「幅広く」使用する者が多かったことを反映していると考えられる。

「はい（初期段階でも使用）」の対象者 2 名の内、1 名は WSD がメインツールという対象者 14 であった。

もう 1 名の対象者 5 は、文献検索の段階によっては、新たな情報を求めて、初期段階で WSD を使用することがあると、以下のような発話があった。

・「（WSD は）明確に（中略）テーマが定まってる時に文献の漏れとか、情報の漏れがないかって、最終手段として使うっていうのもあります」。「（しかし）もうちょっと違うテーマとか、広げたりとか、違う話題にしたい時に（最初の方に）使うっていうのも（ある）」。「なんか辞書のとか新聞記事とかも引っかかってくるんで、そっからキーワードとかを得られたりする」（対象者 5）

「いいえ（初期段階で不使用）」の 12 名は、WSD の利用目的が「補完的に」「幅広く」という傾向があり、WSD をメインツールとしていないため、WSD を初期段階では使用しないという結果となった考えられる。

WSD の利用目的が「補完的に」である対象者 1 からは、「OPAC に負けるかな」との発話があった。対象者 12 からは「あんまりというか『無い』です」と明確な否定の発話があった。

対象者 4 は、Google Scholar より先に WSD を知っていたら、使い方が変わっていただろうと述べているが、「もしもそうだった（WSD を先に知っていた）場合は、多分最初に使ってたっていうこともありますね」との発話もあった。

対象者 10 は、特定の文献を探すことが WSD の主な目的であるが、「ある程度ハンドブックとか、教科書的なものから始めて、そのあとに見たいものが定まってからっていう意味」で、「いいえ（初期段階で不使用）」であるとの発話もあった。情報入手の流れとして「いいえ（初期段階で不使用）」と区分した。

●WSD だけで文献調査全体が完結することはないか。

これに対する発話を類型化すると、次のような結果となった（対象者 13 を除く）。

・完結しない：　12 名（対象者 2～12、15）

・完結することもある：　2 名（対象者 1、14）

大半の対象者が「完結しない」となった。これも、本調査の対象者が WSD を「補完的に」「幅広く」使用する者が多かったことを反映していると考えられる。

「完結しない」理由について、特に質問はしていないが、補足的な発話として以下のようなものもあった。

・「研究対象にしてるフィールドの地方の図書館だったり、地方大学の図書館のデータベース、そこが作成されてるデータベースとかも使うので」（対象者 5）

・「絶対に CiNii Articles 使うので」（対象者 8）

「完結することもある」の 1 名、対象者 1 からは、「ざっと調べて『あ、これにしよう』みたいな時は、まとめて検索だけで済んでると言えるのかなという気が」との発話もあった。漠然と使い分けていることもあるため、WSD から始めて、それで完結することもあると思われる。

もう 1 名の WSD がメインツールという対象者 14 は、一次資料も用いるため情報入手全体が WSD で完結するというわけではないが、雑誌論文や学術資料を調べる際に WSD で完結することもあるかという質問に対しては、「そういうことです。そうです。まさにそうですね」との発話があった。それ以上調べる必要を感じていないかという質問に対しては、以下のような発話があった。

・「（それ以上調べる必要は感じて）ないですね。はい。それ（WSD）が最も広いものだという認識でいるからです」。「（WSD にメインのデータベースが）含まれてなかったら、それを別個であえて調べなきゃいけないという、もう一個の手間を常に並行してやらなくちゃいけないっていうことになる」（対象者 14）

対象者 14 は自分にとってのメインのデータベースが WSD に含まれているという前提であるが、情報検索が WSD で完結することもあるとのことだった。WSD をメインで使用するという、本調査の対象者の中で唯一であるが、興味深い事例である。

対象者 14 は教員であるが、インタビュー全体から、他の対象者と比較して、WSD で完結するという特別な利用方法を取っているとは思われなかった。図書も雑誌も、日本語も英語も調べることがあるという。

単に WSD を便利な点を認識し、使い続け、慣れている。そして、一般的に言われるデメリットについても不満を特に感じないだけと思われる。WSD の利用者が増えてくると、このような利用形態も増えてくるのかもしれない。

第 2 項　その他、見出された概念

インタビューシートの想定を超えた興味深い発話も見られた。これらについて、修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA）に基づき、分析ワークシートを作成した。この分析ワークシートには、概念名・定義・ヴァリエーション（具体例）理論的メモを記載した。関連する発話のあった対象者が少ないものも含まれるが、以下結果を整理する。

①WSD 自体の名称、イメージ

これは、「WSD の名称から伝わる機能のイメージについて、プラスおよびマイナスの評価。あるいは、WSD に対するイメージ」というものである。

WSD の名称や広報については、今回のインタビューでは質問内容に盛り込んでいなかった。筆者もこれについての発言が出てくることも、ほとんど想定してなかった。インタビューする側が想定していないのに、対象者からこれほど発言が出てきたことは意外であった。WSD を提供する時に留意すべき重要な点の 1 つとなると思われる。

プラス評価の発話としては、以下のようなものがあった（下線は筆者）。

- 「名前（まとめて検索）が僕はすごい良いと思ってて。ここに入れたらなんか出てくるんだなって思ってやってみたのが最初だったのはありますね」。「『あ、これは多分まとめて検索してくれるんだな』って、そういうの全部」（対象者 6）
- 「"まとめて検索"っていうそのキーワードは（自分の記憶に）あった（中略）と思いますね。結構これはいい機能なんじゃないかなっていうのが、そのキーワード見て思って、ちょっと使うようになったっていう」（対象者 7）
- 「電子ジャーナルとか全部検索したいなって思ったら、名前でこれ（まとめて検索）

だったら多分その全部のデータベースでやってくれるんだろうなっていうの分かったんで、たぶん使ったって感じだったと思います」（対象者 11）

・「DOGS Plus ってのが出てきてたから、『あ、Plus 付いてるやし、図書館の人たちも DOGS Plus の話ししてはるから、こっち使う方がええんかな』っていう感じだった」（対象者 15）

マイナス評価の発話としては、以下のようなものがあった（下線は筆者）。

・「Google Scholar とか（中略）CiNii とか（中略）JSTOR とかっていうのは（中略）世界的には、あるいは日本の中で信頼できる（ツール）としては、まあ認識されてますよね」。「そういう意味でそれらは安心して使えるんですけど、これ（WSD）は信用してないっていうわけではないんですけど（中略）まあ言ってしまえば、ちょっと得体が知れないというか」（対象者 7）

・「ブランド名が足りないですね」。「あまり知名度がない」。「運営されてる団体の規模みたいなのってどんな感じなんだろう」っていう時に、ぱっとは出てこないと思うんですよ。Google Scholar さんと違って」。「Google Scholar でぱって聞いた時に（中略）検索専門の会社で、世界一の会社だし（中略）アカデミックの人ともすごい関わりがあるだろうから、まさか下手はこかないだろうみたいな。そういう謎の安心感がある」（対象者 9）

・「恐らくこの DOGS Plus が多分 CiNii 以上にフォローしてるんだよっていうのは、あんまり知られてないのかなと思います」。「例えば（中略）『まとめて検索』の名前だったら、すごい分かりやすいですけど。それが表に出てきたら、多分もうちょっと戦えるのではないかと」。「利用市場に進出できるかなと」（対象者 9）

・「あんまり広報（がない）。なんかちょっととっつきにくいですよね、やっぱり。分からないので、どういうものなのかっていうものが」。「（図書館の最初のページには『DOGS Plus』というタブだけで、タブを切り替えても『本学蔵書と電子資料をまとめて検索』）ぐらい。これだとちょっと、、、うーん。飛びつかないというか」。「どういうふうなシチュエーションで使用すればよいのかってのが、ちょっと分からない」（対象者 13）

・「どういう違いがあるんだみたいなんが、開始時かなんかに出るとね、嬉しいかなと思ったり」。「使い慣れてるだけの話なんですよね、結局のところは」。「（検索対象が

分からないのは）広報の問題？」。「認知のされ方の問題のような気もするなあ」。「良さは認知されていけば、広がっていくんじゃないかなと思う」（対象者 15）

これらの発話から示唆されることは、以下のことと考えられる。

・名称によって、利用者に伝わる機能のイメージは大きく異なる。
・検索対象の幅広さという WSD の特長を伝えるのに、名称は重要である。
・名称以外に、画面上の短文の案内を含めた広報、ガイダンスなどが、WSD の認知に影響する。
・WSD の「サーチ（検索）でなく、”ディスカバリー（発見）”」と提供側で言われることのある、ポジティブなイメージやブランド力は、利用者に伝わらない。

②ツールの使用法は周囲から教えられる

これは、「ツールの使用法は周囲から教えられる。WSD の使い方を教えられるケースは少ない」というものである。

インタビュー対象者の打診などで大学院生の話を聞いていると、ツールの存在や使用法は研究室内で教えられるという話題もあった。また、実感としても、周囲からツールの使用法を教えられるということは一般的にあると思われる。本調査でもそれに該当する発話があったので、整理する。

以下のような発話があった。

・「（大学院で現在の研究科）に来てから、『図書館（の来館および Web 上のサービスは）めっちゃ便利だからちゃんと使いなさい』みたいなことを言われるようになるっていう」（対象者 8）
・「Google Scholar なんかは研究室で使い方をある程度教えてもらえるんですよ」。「例えば CiNii Articles とか、日本語の論文だったらこういうのが強いよみたいな」。「（WSD の）ユーザも少なそうな気が勝手にしてるので。あんまり周りで使ってる人見ないんですよ」（対象者 9）
・「研究室では、だから（WSD を）使ってない人が多いっていうのも、多分教えてないんかなーと思います」（2 年前の予備調査では、Web of Science は先輩から習ったとのこと。対象者 11）

・「親が使ってる、たのが OPAC なので。まそれ使って調査検索してみたら、みたいなのをはじめに言われたこともあって。そんなものが、と思って、（OPAC を）検索してたこともあります」。「みんな多分使ってるから、自分も使ってるって感じでは」（対象者 1）

これらの発話から示唆されることは、以下のことと考えられる。

・ツールの使い方は周囲から教えられることが多い。

・本調査の対象大学では、WSD の利用者が少ないため、周囲から教えられることは非常に少ない。

③信頼性

これは、「WSD の検索対象や検索精度に対する信頼性、あるいは信頼性への疑問」というものである。

本調査の対象者はある程度 WSD を継続的に利用しているにも関わらず、信頼性だけでなく、信頼性への疑問に関する発話も目立った。

プラス評価の発話としては、以下のようなものがあった。

・「言語を選べるってことは、その他のその国の論文も入れてるっていうことだと思うんで、そういう意味ではデータベースとしてもやっぱり信用はできるのかなという。信頼感につながってるみたいな」（対象者 7）

・「検索をここですれば引っかけてくれる、文献を出してくれるっていうことに、分かりやすさと安心感がすごいある」（対象者 6）

マイナス評価の発話としては、以下のようなものがあった。

・「データベース自体の信頼性というか、どこの情報を持ってきてるのかなっていうのはちょっと気に入らないっていうか、ちょっとそこを知りたい」。「JSTOR とか CiNii ではないような部分を引っぱってきてるのか、それともそれらも含めて引っぱってきてるのか」（対象者 7）

・「やっぱ WSD をメインってのはなんかちょっと」。「どこまでデータベースとして信頼できるのかとかよく分からないので、サブに使う（人の）場合もやはり、そういう

方多いんじゃないかなっていう気がしますね」。「(詳細検索で限定するほど WSD を)信用してないというか」(対象者 12)

・「(他のデータベースでも) どこが範囲なのかってのが書いてあるのと、書いてないのが結構あって。書いてないものは基本的に信じられないというか。使う用途を見いだせないから」(対象者 13)

ある検索ツールを利用するのは、ある程度の信頼性があるからだと推察されるが、WSD を継続して利用している対象者から、信頼性に対する疑問の発話があったのは興味深い点である。

これらの発話から示唆されることは、以下のことと考えられる。

・WSD の特長である検索対象の広さが信頼感につながる可能性がある。

・検索結果の適切さの程度や、機能説明の不十分さによって、WSD への信頼性が低下する可能性がある。

・「補完的に」「幅広く」WSD を利用する者の中には、信頼性に対する疑問を感じている場合がある。それでも利用するのはサブツールであるからである。

④WSD「以外」を使う理由

これは、「WSD『以外』を使う、あるいは WSD を利用しない理由」というものである。

以下のような発話があった。

・「Doors は結構 CiNii Books とかともリンクなんかしてるので、単純に速い、過程が。ステップが短いので、まず OPAC で調べられるところまでは調べちゃう」(対象者 5)

・(Doors に WSD のリンクもあるのに、あまり使わないのは)

「Doors と CiNii Books で結構なんかパッて直接見つけられる」

「CiNii Books への期待感が大きくて」

「(WSD を使うのは) どうしてもない時とか、、、。結構 (CiNii Books などで) 本が見つかると、そっから他の文献とか今まで辿れてたので」

「やっぱり簡易性が違う」。「DOGS Plus はやっぱり難しいイメージがあって」。「なんか機能がよく分からないし、表示されてるなんか、、、チェックを入れる四角とかなんか色々」

「急いでこう探してる時とかも、結構 Doors とか CiNii Books に頼ってしまって」「(同志社大学サイトの) 在学生ページのところにバナーが (あって)」。「Doors のいつもトップに行ってから (Doors を使う)」。「利便性も高いので、はい、まずこれを (使う)」(対象者 5)

・「OPAC との区別が本当につきづらい (機能面やデザインについて)」。「(図書館 Web サイト上で) タブが分かれてあるけど、景色が同じ」。「WSD の方に行っても景色 (色合いなど) が若干似ている」(対象者 8)

・「図書館のサイトの使い方をもうちょっと教えてもらう機会があれば、便利に使えたのかもしれないな」(対象者 8)

・「ちょっと多機能すぎて、使いきれないところが、自分もあるし、学生さんもあると思います」。「Article Linker (同志社大学のリンクリゾルバ) でやって、でしかもその記事が大学の図書館になかったら、またちょっと CiNii Books で調べ直してみたいな。で ILL かけてっていう手順がいるので、そしたらもう最初から Doors とか CiNii Books に行った方が (早い)。逆にほんとに手間、、、逆の手間がかかるんですよ、DOGS Plus は」。「(フルテキストにアクセス) できない時がちょっとかなりめんどくさい」(対象者 13)

・「(図書館の最初のページには『DOGS Plus』というタブだけで、タブを切り替えても『本学蔵書と電子資料をまとめて検索』) ぐらい。これだとちょっと、、、うーん。飛びつかないというか」(対象者 13)

これらの発話から示唆されることは、以下のようなことと考えられる。

・WSD 利用時の動線はシンプルである方が、利用者にとって利便性が上がる。そのような設計やデザインが必要である。

・WSD の検索対象の広さ、機能の多さ、画面デザインなどが原因で、面倒なツールと利用者が感じたり、利用を避ける可能性がある。

・WSD の活用につながる取り組みが必要である。ガイダンスやポスターなど積極的なものだけでなく、画面上での自然な誘導も含まれる。

⑤分野の習熟と、情報の識別

これは、「自らの専門分野に習熟してくると、検索結果一覧で必要なものが自分で見分け

られるようになる」というものである。

以下のような発話があった。発話は全て大学院生からのものであった。このような認識に至るには、ある程度の知識の蓄積が必要なためだろう。

- 「(検索結果が多すぎるという) 文句が出るうちは、その分野に対して詳しくないと思いますね」。「見てれば分かると僕は思います」。「(検索結果に関係ない資料は) 無視すればよいと思う。あくまで、無視できるくらいまで、その分野を知っている必要はある」。「やっぱり研究が進んでくると、いや知ってるやろみたいな。その、自分の中でその地図じゃないですけど。そういうのができてくれば、こういうのも使いやすくなる」(対象者 10)
- 「たぶん知っている文献が増えたから、『これは本だ』っていうのが、もう(ファセットで) 分けなくても自分で分かるようになったのかもしれないです」(対象者 11)
- 「(自分の専門分野に関する検索で CiNii Articles を使うことは) あんまりー。いやもちろん使うんですけど、まぁ大体知ってるんで、もう既に」(対象者 12)

これらの発話から示唆されることは、以下のようなことと考えられる。

- 自らの専門分野に習熟してくると、検索結果一覧に既知情報が増える。
- その結果、WSD での検索結果の多さに対する印象や、ファセットなどの使い方が変わる可能性がある。
- 検索ツールによっては、使用頻度が下がる可能性がある。

⑥WSD のメリットと、最初に使われない理由の相反

これは、「検索対象の広さという WSD の特長が、メインツールになるのを妨げる要因となる」というものである。

以下のような発話があった。

- 「今も昔も、最初に Web of Science とか CiNii で調べて、出なかった最終手段で"まとめて検索"を使ってるんですけど、でもそれだったら最初っから"まとめて検索"を使えば 1 回で済むんじゃないですか」。「でもなんでそれをしないかっていうと、たぶん"まとめて検索"だと、いっぱい出てき過ぎちゃうっていうのが無意識であって」。

「最初は狭く CiNii とか Web of Science で英語だけ、日本語だけとかで調べて、それでも出ない時にやっぱ最終手段として、”まとめて検索”をたぶん無意識に使ってたんじゃないかなと」。「多分それ（検索対象が広く、検索結果が多いこと）をメリットだと思う人もいれば、使いづらさだと思う人も多分いるんですよ」（対象者 11）

・「おそらくそれ（関連資料がヒットすること）があるから、最後の確認とかにして使ってるんだと思います」（対象者 15）

これらの発話の評価はやや難しいが、以下の点を指摘しておく。

・検索対象の広さという WSD の特長が、WSD がメインツールになることを妨げる要因となっている可能性がある。

一方で、「大は小を兼ねる」と WSD をメインツールにしている対象者 14 のような存在もある。ただ、本調査の対象大学に WSD をメインツールにしている者がどれくらい存在するのかは不明である。また、最初の検索オプションが WSD の大学であれば、自然に WSD をメインツールとする利用者が増えるかもしれない。幅広さを回避する利用方法（例えば、図書館の蔵書に限定することなど）が自然に行われているかもしれない。

WSD のメリットと最初に使われないことの相反は、別の場面で対象者 4 が「紹介してもらう順位」と述べたように、ツールを使い始めた順番が影響しているのか、ツールの機能が影響しているのか、あるいはガイダンスや広報も影響しているのか、本調査からは明らかにすることはできない。

但し、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC となっている本調査の対象大学では、上記のような可能性があることは指摘しておきたい。

⑦研究段階による WSD の利用頻度の変化

これは、「研究テーマを模索中など、文献を幅広く探している時の方が、WSD をよく使う。研究テーマが明確になってくると、幅広く検索するニーズが減少するため、WSD の利用頻度が低下する」というものである。

本調査は研究段階による WSD の使い方の変化を知るために行ったものではないが、予備調査にも参加いただいた対象者 11 から興味深い発話があった。対象者 11 は修士課程在籍中に予備調査に参加した。

以下のような発話があった。

修士課程在籍中は、

・「昔はなんか本当に、（中略）どんなことが今までされてきたかっていうのの基礎を固めなきゃいけなかったんで、そういう資料、、、本当に教科書的なものから、探していた」

とのことだった。

そして、現在の博士課程では、最近の英語論文を Web of Science で見つけることが増えているという。以下のような発話があった。

・「最近はそうですね、そういうのはもうある程度手に入ったんで、最近出版された論文とかを探してるって感じ」。「あとは自分のやった研究結果の裏付けとなるようなものを探すみたいな、のが増えてるんで」

・「結構たぶん Web of Science で出るものが多くなってきてるんじゃないかな」。「本当にここ 1-2 年で出版された論文とかを見ることが増えた感じ」。「やっぱ（修士の頃と比べて）英語論文しかほぼ読まなくなってきている」

その結果、WSD に使用頻度が減っているとのことだった。以下のような発話があった。

・「（まとめて検索を）使える機会が減ってるって感じですよね、やっぱ（最近は）最終手段として使ってきたんで」。「昔（修士課程の時）の方が（まとめて検索を）使ってたぐらいかもしれないです、英語だったら」

日本語論文の場合でも、WSD の利用頻度が下がったとの発話もあった。

・「最近は、日本語のやつ（論文は）大体読んじゃってるんで、なんかもう知ってる論文を見つける時に使うことが多いんです、CiNii を」。「そうなると結構まとめて検索まで行かなくても見つかることが多くて」

理由や背景としては、次のような発話があった。

・「（修士課程の時は）まだ知らない論文があるんじゃないかみたいなのがあって、あらゆるもの（WSD）でやっぱ調べたいっていうのはあります」

・「私にとってのメリットがたぶん日本語の本とかが出てくるっていうのがたぶん、昔は良かったのかもしれないですね。で最近は多分そういうやつをある程度集めきったので、あまり使う機会が減ったかもしれない」

なお、対象者 11 もこの認識自体にインタビュー中に気付いたようで、「自分でも驚きます。（修士課程の時と今回で）変わってたんだ」との発話もあった。

本調査では、この概念について検証することを目的としておらず、発話も対象者 11 からしか現れず、どこまで一般性があるか検討することは困難である。また、教員である対象者 14 のように WSD をメインツールにしている利用者の存在もある。しかし、研究段階によって WSD の利用頻度、あるいは活用方法が変わってくる可能性があることは指摘しておきたい。

⑧文献を調べる必要性

これは、「文献をきちんと調べることを学生があまりしないという認識」というものである。

WSD の利用とは直接の関係はない概念であるが、教員である対象者 2 名から発話があった。WSD を利用するかどうか以前の、文献を調べる行動についての発話であるので、参考に触れておく。

以下のような発話があった。

- 「みんなね、労力をかけないですよね」。「（現在の勤務校で）は特にそうですね。図書館で本を借りることすらめんどくさいと思ってますね」。「（WSD を教えると）取りあえずそこで出てきた論文を、こう短絡的に、選んでくる。要するに図書館で本を借りるよりは、家でダウンロードしてそれで読めるから、っていうのが最優先の動機で選んでるっていうことが多い」（対象者 14）
- 「ネットで済ます感がある」。「ガバナンスという言葉について（中略）なんか調べてきてレポートまとめて、っていうお題を出したとしたら、ガバナンスっていう言葉を Google で検索して、たまたま出てきた PDF の論文らしきものだけを元に、まとめてくるということです」。「（Doors で調べるとか、図書館で何冊か借りること）をせずに、家で『ガバナンス』って、Google ですよ、Doors とか重いから Google とか Yahoo とかで『ガバナンス』って入れて、PDF で学術論文とか、どっかの学校の大学の先生とかが書いてそうなものを見つけてきて、その範囲内だけで手軽にまとめる、っていう短絡さを見せます」（対象者 14）

・「なんか調べすらしないイメージがありますね、1 年生・2 年生だと」。「例えばレポートとか書く時にも、ほとんど調べてないですね」。「Google で適当に調べて、それをピッみたいな感じになってて。例えばそこで見つけた本を自分で図書館で探して、読んで、それをまとめるみたいなことまではしてないなと」。「なんかネットに出てるやつでいいじゃん、みたいな感覚になっちゃってるっていうところが一番問題かな」

・「そもそもそういう文献を読むってことをしないんですもん」。「OPAC も使わないでしょみたいな話ですよね。それこそもう ”Hey, Siri!” みたいな感じの時代なので。なんでそこまで調べられへんかいうところですもんね、今のホントにうちの学生の指導をどこからするかいうたら、そこからですもんね」（対象者 15）

本研究は WSD の利用に関することであるが、その利用のことだけでなく、学生の学習行動が文献検索にも影響していることは認識しておきたい。

第５章　考察と課題

インタビューの結果から得られたこと、および本研究の限界と課題を以下に整理する。

但し、本研究で得られたことは、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC であり、学内構成員が WSD を自然に使用する機会の少ない大学においてという条件となる。

第１節　サブツールとして「補完的に」「幅広く」利用される傾向

本調査の対象者の多くが WSD をメインツールとしていなかった。そして、WSD を「補完的に」「幅広く」利用する対象者が多く見られた。検索対象の資料は、図書よりも雑誌論文が非常に多かった。

また、他の主要な検索ツールの存在は、WSD の利用を減退させる可能性があると想像されたが、少なくとも本調査の対象者の場合、サブツールとして WSD を併用する者も多く見られた。

このように WSD がサブツールになる傾向があると思われる。その要因として以下のことが考えられる。

まず、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが WSD ではないことがあげられる。そのため、WSD が自然に認知される機会が少なくなると考えられる。認知の機会がない間に、他の主要検索ツールに慣れることとなってしまう。

次に、周囲から教えられるケースが少ないことがあげられる。本調査の対象大学では、WSD の利用者数は相当少ないと想像され、WSD を周囲から教えられることは非常に少ないと推測できる。本調査でも WSD を「自ら発見」した対象者が多く占めた。このような場合、他の主要な検索ツールは既に使用していることが多いと考えられる、

そして、図書館からの案内が少ないことがある。本調査の対象者の発話からは、授業で紹介されることもあるようだが、実際にそれが利用のきっかけとなった対象者は少なかった。WSD についての案内が量的に少ないか、内容として学生の利用につながらないものとなっていると想像される。

さらなる検討課題として、WSD がサブツールとして利用されることが望ましいかどうかという点がある。本調査の対象者の多くのように WSD を「補完的に」「幅広く」利用し

て、ある程度の満足があるのであれば、それでよいと考えることもできるかもしれない。しかし、本調査の対象大学では WSD の利用者や認知度は相当少ないと思われるため、さらに利用や認知度が上がった状況での利用実態を評価する必要があるだろう。併せて、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが WSD である大学での利用状況とも比較が必要となる。

第 2 節　デメリット認識の相対的低さ

WSD や次世代 OPAC の代表的な文献などで触れられる「検索結果の多さ」、「適合度表示の不適」、「非対象コンテンツ」について、WSD 利用者は、大きな不満として認識していない、あるいは、許容ないし回避策を取ることが多いと示唆された。

特に、提供側の大学図書館でよく聞かれる「検索結果の多さ」も、それほどの不満は持たれていないことが示唆された。逆に、検索対象の「幅広さ」が好まれる傾向があり、「関連資料がヒットすること」も肯定的に受け止められる傾向がある。

「検索結果の多さ」などを大きな不満と感じずに利用している者が一定数いるだろうことは重要な点である。少なくとも、提供側の大学図書館が必要以上に否定的な印象を WSD に対して持つべきではないと考える。

これまでデメリットとして触れられてきたことも、OPAC や NACSIS-CAT（CiNii Books の元となる業務用システム）のような精度の高い検索サービスに親しんできた大学図書館側の認識から生まれたものであって、利用者の認識とは異なるものだと考えられる。大学図書館側の WSD 認識は改められる必要がある。そうでなければ、提供側は WSD の魅力を利用者に伝えられないことになってしまう。

但し、この結論は WSD をある程度利用している対象者から導き出されたもので、現在不使用の潜在的な利用者が同じような認識となるかは不明である。提供側の大学図書館などは、本調査結果に現れたように「補完的に」「幅広く」利用されることを想定する一方で、逆に「検索結果の多さ」などに不満を感じる利用者もいるかもしれないという前提で、利用法の案内を検討する必要があると思われる。

例えば、WSD を自館蔵書に限定して OPAC のように使用したい場合や、図書（雑誌や記事以外）を調べたい場合、あるいは、日本語ないし英語の学術論文を調べたい場合に、利用者がどのような行動を取っているかの調査や、画面デザインの検討も必要と思われる。

第 3 節　大学院生・教員にも有用

「WSD は学部生向け・初学者向け」を否定する発話が、6 年制学部卒業者および大学院生以上から現れたこと、そして、「学部生には OPAC を優先」の発話が、学部 4 年生と大学院生以上から現れたことは、「WSD は学部生向け・初学者向け」ということについて再考を迫る根拠となる。「学部生・初学者」が WSD を利用するのに一定のハードルがあることを改めて検討する必要性も示唆している。

但し、「学部生向け・初学者向け」という言葉の背景には、これまで定義が曖昧で漠然と語られていたことがあると思われる。そこで、第 2 章の「想定される利用者層・利用シーン」で触れたことを再確認しつつ、改めて検討してみたい。

眞喜志（2014：184）は、東邦大学で 2011 年に導入した Summon（TOHO Search）について、「使い分けや検索に慣れていない図書館サービス利用の初心者（主に学部低学年生や病院職員のうち看護師やコメディカルスタッフなど）を想定」（下線は筆者）したと述べている。

飯野（2014a：102）は、「お気軽検索（引用者注：佛教大学での WSD）の主要なターゲットは，専門教育に入る以前の学部の 1・2 回生や通信教育課程の学生であり，たとえば専門領域のデータベースに習熟しているような大学院生や，英語文献を自在に操るような教員を対象としたものではない」（下線は筆者）と述べている。飯野（2016：188）は「おそらく『学部学生を中心とした初学者』こそが、お気軽検索の主要な利用者だという、佛教大学図書館の想定は間違っていない」とも述べており、これらが飯野の「学部生・初学者」認識だったと類推できる。

2016 年 4 月に WSD（製品は Summon）を導入した文教大学では、「Summon の主たるターゲットを『図書と論文の区別がつかない』層と『図書と論文の区別はつくけど、データベースの使い分けはできない』層に定めた。ただし、ガイダンスをしてみると前者には Summon を説明しづらい」（下線は筆者）と、WSD 日本代理店のセミナーの参加者により紹介されている（URL 29）。

これらを一般性のあることに整理すると、「学部生向け・初学者向け」と言われてきたことは、次のようなこととなると思われる。

すなわち、「主に学部低年次生」、「学術情報の種類の理解が不十分」、「データベースの使

い分けに習熟していない」、「主に日本語文献を使用する」である。

雑誌論文の使用については特に言及されていないが、上記の「主に学部低年次生」、「学術情報の種類の理解が不十分」、「データベースの使い分けに習熟していない」ことから、「雑誌論文をあまり使用しない」という要素も加えられると考えられる。

一方で、「初学者」という表現について、本研究のインタビュー中に「研究者としての初学者」という意味での発話が対象者 11 からあった。対象者 14 からは、「修論レベル」という表現で WSD には有用な場面があるとの発話もあった。以下のような発話である。

- 「(学部 1-2 年生的な初心者ではなく、ある程度論文をもう使えて) 研究者としての初学者みたいな」。「初学者向けっていうのは、今回の私の結果を見ても、(修士課程で、先行研究をたくさん調べたかった) 昔の方が使ってたっていうのは、確かに初学者だったからかもって思います」。「知識があんまりなくて、いろんな情報を集めたいみたいな人には確かによいのかもしれない」(対象者 11)
- 「修論レベルで、自分のテーマで、よく分からないって時は (中略) 当たり感をつかむためのザッピング的なものとして (WSD は) 有用だと思います」(対象者 14)

これらの発話に、明示的に「学術情報の種類の理解が不十分」、「データベースの使い分けに習熟していない」とは触れられていない。しかし、インタビュー中の文脈や、先行研究を調べるという行動から、「雑誌論文を使用」して、「学術情報の種類の理解」もある程度できると推定できる。また、「英語文献を調べることもある」とも推定できる。

そうすると、上記の「学部生向け・初学者向け」の要素と反するものとなるため、「学部生向け・初学者向け」との表現も再度整理しなおす必要があると考えられる。

そこで、次のように改めて定義を提案する。

- 「学部低年次生」:　主に学部低年次生。雑誌論文をあまり使用しない人。学術情報の種類の理解が不十分で、データベースの使い分けに習熟していない人。主に日本語文献を使用する人。
- 「研究面での初学者」:　研究の初期段階にある人。雑誌論文の使用も想定され、学術情報の種類の理解もある程度している。英語文献を使用することもある。

このように定義すると、これまで「学部生向け・初学者向け」と言われていたことは、上記の「学部低年次生」に該当すると思われる。分野による違いはあるかもしれないが、

学年が低いほど、手近な情報（OPAC 等で入手できる情報）で足りる傾向があり、多様な情報（雑誌論文などの情報、日本語以外の論文、個別のデータベースなど）を識別することに困難さや習熟の必要性があると思われる。

そうすると、本調査の結果からは、WSD が「学部低年次生向け」であるという考えに対して、疑問が投げかけられたと考えられる。もちろん、これをもって WSD が「学部低年次生より大学院生・教員に適している」と結論づけることはできないが、以下のことが確認できる。

・WSD の利用対象が、学部低年次生向けという考え方には疑問がある。
（但し、学部低年次生が活用しにくいかどうかは本調査からは明確にできない。）
・WSD は大学院生・教員にも有用なツールである。
（状況によっては、学部低年次生より大学院生・教員に適している可能性がある。）
・WSD を活用するには、学術情報について一定の知識が必要な可能性がある。

特に、「WSD は大学院生・教員にも有用なツールである」という点については、飯野（2016：193）の「大学院生や教員にも十分に受け入れられる可能性がある」、北山（2017）の「研究者の検索行動とも親和性が高い」、そして、林ほか（2015：52）の「『ディスカバリーサービスは学部生向け』としばしば言われていることとのズレを感じる」の指摘と重なる。

一方で、本調査の対象者の学部 1〜2 年生（対象者 1〜2）は WSD を使いこなせていないのかという疑問が湧いてくるかもしれない。インタビュー中の発話を振り返ると、対象者 1 は主に図書の利用で、上記の「学部低年次生」に一部該当するかもしれないが、「OPAC で調べてから出てこなかったら（WSD を使った）、って感じかなっていう気がします」という発話もあり、2 つのツールの識別はしている。対象者 2 は雑誌論文を利用しており、CiNii Articles も利用している。対象者 2 は同志社大学で司書課程の授業も受講しており、一般的な学部生より学術情報の扱いに慣れていると思われる。

これらの結論から WSD 提供に必要とされることとして、以下のことを提案したい。

・学部低年次生に対して
- 学術情報の知識や識別についての説明も並行して行われること。
- WSD の検索対象は非常に幅広く、基礎的な教科書のような資料を探す場合は、自館蔵書に限った検索や OPAC での検索も有効といったことなど、使い方のサジェ

スチョンも含めた説明がされること。

- 画面上の用語も含めたデザインの改善に加え、学部生が混乱することを想定し、それを軽減するような説明内容とすること。

・学部高年次生や大学院生に対して

- WSD の検索対象は非常に幅広く、これまでの情報検索で探せなかった資料を見つけられる可能性のあるツールであるという説明がされること。

上記の「学術情報の知識や識別についての説明」は、すでにある程度実施されていると思われるが、WSD の利用に当たっても必要と考えられるため改めて指摘しておく。手段については、授業、研究室などの学生コミュニティ内での指導や情報交換、図書館の講習会など、いろいろな形態があるだろう。

但し、これらのことは、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC である大学での調査に基づくことであり、最初の検索オプションが WSD である大学では事情が異なるかもしれない。これらの大学での調査や事例報告も待たれる。WSD を自然に使い慣れることによって、学部低年次から WSD を利用していることもあるかもしれない。

なお、このように WSD はどの階層に有用なのかという点を整理していると、北米での WSD の広がりをどう理解したらいいのかという疑問も湧いてくる。あくまで筆者の印象であるが、北米では特に OPAC と WSD のどちらが最初の検索オプションであるべきかという論点はなく、トレンドとして WSD が最初の検索オプションになっているように思われる。背景としては、次世代 OPAC の議論がそのまま OPAC 改良ではなく、WSD の導入に向かったことが大きいのではないかと想像している。英語の電子資料（特に電子ブック）の数が日本語資料とは桁違いに多いことも、WSD の利用に対する追い風になっていると想像する。一方で、検索対象の広さが混乱を生んだり、インストラクションの場面で OPAC を選択するライブラリアンがいることを聞いたこともある。北米での WSD は流行のように広がっているが、小さいながら隠れた問題が存在しているのかもしれない。

第 4 節　利用者向け名称は分かりやすく

本調査で WSD の名称やイメージに関する発話からも、WSD の利用者向け名称は重要

である。それは、提供されているツールがどのようなものかについての、分かりやすさ・伝わりやすさという点においてである。

独自の愛称を付けるというアイデアも存在するだろうが、WSD に対しては効果的ではないと考える。例えば、本調査の対象大学では、次のような名称の学務システムが存在する。大阪大学では「KOAN（こーあん）」、同志社大学では「DUET（デュエット）」である。学外者には全く意味不明なネーミングだろう。しかし、これらは、1）学内の学生や授業担当教員はほぼ全員が使用する（学生は単位修得のために使用しなければならない）、2）学外者が使用することはない、という特徴がある。そのため、外部からは全く意味不明なネーミングでも、学内では相当高い度合いで定着している。

逆に、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが WSD ではない大学の場合、現時点では WSD を使用している人数も相当少ないと考えられる。自然に使用する者も少ないだろう。相当積極的なガイダンスや広報活動をしない限り、WSD の認知度を上げることも難しいだろう。そして、WSD の検索自体は外部に公開されていることが多い。また、大学院から入学する大学院生や、転任等で着任する教員は、最初は学外者のような立場で図書館などのサービスを目にすることになる。

このような状況では、WSD の機能がどういうものか伝わりやすい名称であることが重要だと考えられる。その上で、ガイダンスや広報活動などによって認知度も上がってくると考えられる。有用度が認知され、利用者が増えていけば、学生や教員のコミュニティの中で WSD の存在が伝えられる機会も増加していくだろう。

このような観点からは、立命館大学図書館が 2020 年に WSD の名称を「Runners Discovery」から「まとめて検索」に変更した事例（URL 16）は、大変興味深い。変更の理由は明示されていないが、学内構成員への伝わりやすさを考慮したのではないかと推察される。

一方で、今後、各大学での WSD 導入が進むことを想定すると、「ディスカバリー・サービス」といった一般的な名称も国内で徐々に定着していくことも求められるかもしれない。その方が 1 つの大学の枠を超えて、どのようなツールか利用者に伝わりやすくなると考えられるからである。

それでもなお、独自の名称で定着を図りたいという考えもあるかもしれない。しかし、国内大学で WSD の導入率が 20%に届かず、WSD が特別なツールのような国内状況では、特別な名称より、伝わりやすさを考慮した名称の方がよいと考える。存在が当然のツール

（例えば学務システム）であれば、特別な名称でも認知されるだろうが、一部の大学でしか提供されていないツールの場合、意味の伝わらない単語となってしまうからである。

なお、WSD に対するイメージや「ブランド名」（対象者 9 の発話）は、名称より先に機能が認知され、ある程度の利用者が存在しない限り、広がらないと考えられる。

第 5 節　本研究の限界と今後の課題

国内では WSD に関する利用者調査は非常に限定的にしか行われておらず、本研究では、WSD の利用要因や利用状況、WSD に対する利用者の認識を探索的に明らかにすることを目的とした。そのため、利用者像や利用状況を大きく解明することができなかったことの他、以下のような限界がある。

1 点目に、調査対象大学についてである。本研究の対象大学では、OPAC が図書館 Web サイトの最初の検索オプションであり、ガイダンス等で WSD が積極的に紹介されていない。そのため、WSD が最初の検索オプションで、ガイダンス等で紹介されている大学での状況とは異なっている可能性がある。それらの大学で、WSD が利用者にどのように受け止められているか、本研究では触れることができなかった。

予備調査では、WSD が最初の検索オプションの大学に在籍する 1 年生の学生から、5 月の時点で WSD を「筋肉」などで検索した際に、難しそうなことが一杯で使えないとの印象を持ったという発言もあった。具体的には、「PDF がバーっと出て」、「専門的な」、「まだ早いかな」、「3-4 年生に（なれば使いそう）」、「基礎的なことしか学んでいない段階（では使えない）」ということだった。

これについては、WSD が最初の検索オプションである大学での調査や事例報告を期待したい。

2 点目に、対象者についてである。本研究のインタビュー対象者は「WSD を利用したことがあり、一定の印象を持っている者」とした。WSD を利用しない者や他のツールを利用する者の WSD に対する印象、普段の情報検索行動、そして、WSD を利用しない理由は、本研究の対象外である。そのため、WSD を利用しない者への案内方法などについて議論する材料を得ることができなかった。

本調査の対象者についても、雑誌論文も活用し、複数の文献データベースを使い分けるという点において、結果的に一定のリテラシーを持つ利用者が大半となった。そのために、発話内容にある程度の根拠と合理性があることは期待できたが、一方で、それ以外の利用者の認識がどのようなものか、さらには、本研究の考察がどこまで適用できるかは、さらなる調査が必要である。本調査の結果と考察についても、実践等を通じて検証されていく必要もある。

また、本調査の対象者はWSDを「補完的に」「幅広く」利用する者が多かった。そのため、調査対象大学では相当少ないと推測できるが、WSD をメインツールとする利用者の認識は明らかにできなかった。

3点目に、提供側の認識についてである。国内の大学図書館員の相当数がWSDに対して積極的な印象を持っていないと推察できる。一方、利用者カウンタなどでWSDを案内しているという話を聞くこともある。このような状況など、提供側がWSDをどのようなツールと認識していて、提供に当たってどのような課題があるかについては触れることができなかった。

4点目に、WSDの画面デザインや利用者ナビゲーションについてである。本研究はあくまで利用要因や利用者の認識にフォーカスしたため、WSD の利用、そして学術情報へのアクセスについて、どのような課題があるかは触れることができなかった。

また、WSDが「補完的に」「幅広く」利用される大きな要因は、検索対象の幅広さにあると推定されるが、画面デザインや、検索対象の分かりやすさやがどのように影響しているかも触れることができなかった。

5点目に、少数事例で一般化できるかどうかについてである。これについては、インタビュー結果で見えてきたことと、実際の状況を照らし合わせ続けて、利用状況の理解を続けていくことが大事と考える。それが一般性につながり、そして、サービス改善につなげていくことが求められる。ユーザの環境や、学術情報のあり方も常に変化しているため、常に利用者の状況を見直し続けていくことが大事である。

6点目に、利用者の認識が、適切ないし的確な指摘かどうかについてである。本研究で

はある程度信頼できる発話があったと考えているが、利用者のスキルや考え方によって、その指摘の適切さ・的確さも変わってくる。例えば、「学部生向け」かという点に関しても、あくまで本調査の対象者の考えを調査したまでである。これについては、調査者側やサービス提供側が評価して、実践に反映していかざるを得ない。本研究はあくまで探索的で、議論の出発点となるものであり、今後の議論が必要である。

終章　おわりに

最後に本研究の内容を振り返るとともに、本研究で明らかにしたことについて要約して記述し、今後の展望を述べる。

本研究は、WSD に関して国内では研究自体がごく限定的にしか行われておらず、想定する利用者層や利用シーンについても一定のコンセンサスもない状況の中、WSD 利用者の利用要因や利用状況、WSD に対する認識はどのようなものかを探索的に明らかにすることを目的とした。

まず第 1 章では、WSD の北米や国内での広がりを整理し、WSD の特徴などを概観した。併せて、国内大学での導入率が、2019 年 3 月時点で 19%に留まることを確認した。

第 2 章では、WSD を導入している国内大学でも、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC である傾向が認められ、いわば「OPAC 主義」と言える状況を概観した。一方で、海外のトップ大学では WSD を最初の検索オプションとする傾向があることも概観した。そして、WSD に関する検討課題や先行研究を整理した。

第 3 章では、インタビューによる調査方法や、インタビュー項目を述べた。併せて、インタビュー項目を精査するために行った事前調査について説明した。

第 4 章では、インタビューの結果を整理した。本調査の対象者は WSD を「補完的に」「幅広く」利用する傾向があり、「幅広さ」を好む傾向があった。「検索結果が多すぎて使いにくい」といったデメリットとされることは、大きな問題として捉えておらず、許容する傾向があった。WSD が「学部生向け・初学者向け」と言われることについては、6 年制学部卒業者および大学院生以上の対象者から否定的な発話があり、その考えに疑問を投げかける結果となった。

第 5 章では、その結果を受けて、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC である大学では、WSD がサブツールとして「補完的に」「幅広く」利用される可能性があり、WSD 利用者はデメリットとされることについての認識が相対的に低いこと、そして、利用対象が学部低年次生向けという考え方には疑問があること、大学院生・教員にも有用なツールであることを指摘した。併せて、WSD の利用者向け名称は重要であることも指摘した。

本研究の学術的な意義は、WSD 利用者の利用要因や利用状況、認識についての研究が

非常に不十分な中、探索的な調査を実施し、その一部を提示できたことにある。但し、調査対象大学は限定的で、図書館 Web サイトの最初の検索オプションが OPAC の大学だけである。本研究で提示したことを新たな仮説として、別の大学等での調査などと比較して、検証を続けていく必要もある。

一方、本研究の社会的な意義については、本研究で提示したことが、実践の場面で参照されて、利用状況の理解やサービス改善につながることで生まれてくると考える。実践の場面で参考になることを提示できたことが、本研究の社会的意義である。

本研究を通して改めて感じるのは、利用者の行動や認識に真摯に向き合うことである。国内で WSD が導入されて約 10 年経過したが、例えば、WSD が「学部生向け・初学者向け」ということについても、提供側でのコンセンサスが必ずしも作られてこなかった。

ここで想起するのは、西川（2010：13-4）の指摘である。西川は、米国の University of Rochester で行われた研究者・学生の行動調査を紹介する記事の中で、興味深いことを記している。少し長いが引用する。

> 「昔と今の学生は驚くほど変化しているし、もっと短いスパンでも変化している。ユーザは変わり、ユーザの要望は変わっていくのだ。重要なことは、その変化に向き合うことである。『これが図書館のサービスです』といった図書館側からの提示ではなく、ユーザの行動に注目し、その声に耳を傾け、それを図書館に活用する変化を恐れないことである」

この記事が書かれたのは、もう 10 年も前になるが、現在でもそのまま適用できる内容である。ICT 環境は今後も変化を続け、ユーザも変化を続ける。WSD 自体も変化を続け、他の文献検索ツールも変化を続ける。そういった環境の中で、特にサービスを提供する側の関係者は、自らのサービスだけを通してユーザを見るのではなく、先入観を捨てて、なるべく客観的にそれを見る必要がある。質的・量的な調査は現在よりも多く行われてよいと考える。また、調査実施には人的なコストもかかるだろうが、日々のユーザとの会話の中でも見えてくることはあるだろう。

今後、WSD が図書館 Web サイトの最初の検索オプションである大学での調査が実施され、本研究の結果との比較が行われることも必要である。併せて、デジタルの学術情報が多様になり、増加していく中で、情報管理の方法や、利用者の情報入手について検討もされていく必要があるだろう。（108,446 字）

【参考文献】

日本語文献（著者姓の五十音順）

・書籍

飯野勝則（2016）『図書館を変える!―ウェブスケールディスカバリー入門』ネットアドバンス。

木下康仁（2003）『グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践―質的研究への誘い』弘文堂。

鈴木淳子（2005）『調査的面接の技法. 第 2 版』ナカニシヤ出版。

西條剛央（2007）『ライブ講義・質的研究とは何か. SCQRM ベーシック編』新曜社。

・論文等

天野いづみ（2009）「第 36 回生物医学図書館員研究会参加報告」『医学図書館』56（4）、331-4。

安東正玄（2012）「ディスカバリーサービス―知っておきたい基礎知識」『医学図書館』59（1）、18-21。

安東正玄（2015）「ディスカバリーサービスの導入経過と現状。そして可能性」『専門図書館』273、81-4。

飯野勝則（2011）「佛教大学図書館における Summon の導入―ディスカバリーサービスとシステム連携」『情報の科学と技術』61（9）、355-60。

飯野勝則（2012）「動向レビュー―ウェブスケールディスカバリの衝撃」『カレントアウェアネス』312、18-22。

飯野勝則（2014a）「佛教大学図書館におけるウェブスケールディスカバリーSummon の導入効果と課題」『情報管理』57（2）、99-108。

飯野勝則（2014b）「ウェブスケールディスカバリと日本語コンテンツをめぐる諸課題―海外における日本研究の支援を踏まえて」『カレントアウェアネス』321、2-4。

飯野勝則（2015a）「ウェブスケールディスカバリーの誕生と展開―情報検索ツールの歴史的変遷とスケーラビリティの視点から」『大学図書館研究』102、11-21。

飯野勝則（2015b）「ウェブスケールディスカバリをどう扱うか―図書館と利用者の視点か

ら見えること」『専門図書館』273、76-80。
飯野勝則（2017）「ウェブスケールディスカバリーの運用とその展開可能性」『日本図書館研究会　第 326 回研究例会』2017 年 1 月。
井手孝次郎（2012）「Primo ディスカバリーサービスの概要と動向」『オンライン検索』33（１・２）、15-28。
稲木竜（2017）「慶應義塾大学における電子書籍の取り組み―ディスカバリーサービスの活用事例」『情報の科学と技術』67（1）、14-8。
宇陀則彦（2009）「利用者中心の設計―次世代 OPAC の登場」『図書館雑誌』103（６）、390-2。
宇陀則彦(2012)「ディスカバリサービスに関する少し長いつぶやき」『ディジタル図書館』43、11-4。
江上敏哲（2017）「海外における日本研究と図書館―概観および近年の動向・課題と展望」『情報の科学と技術』67（６）、284-9。
エブスコ（2018 頃?）「EBSCO Discovery Service [リーフレット]」。
大阪大学附属図書館（2012）『大阪大学図書館報』46（２）。
片岡真（2010）「ディスカバリ・インターフェース(次世代 OPAC)の実装と今後の展望」『カレントアウェアネス』305、11-5。
片岡真・大西賢人・井川友利子・西川真樹子・栃原幸恵・天野絵里子（2011）「図書館の検索インターフェースとユーザ支援技術」『メディア教育研究』7（２）、19-31。
北岡佳人（2012）「図書館システム CARIN-i の取り組み―OPAC からディスカバリーインターフェースへ」『薬学図書館』57（４）、279-86。
北山信一（2017）「鹿児島大学 Summon 運用事例報告―まなぶた Search の 4 年―導入から運用まで」『[サンメディア学術情報ソリューションセミナー]』
工藤絵理子・片岡真（2008）「次世代 OPAC の可能性―その特徴と導入への課題」『情報管理』51（７）、480-98。
久保山健（2008）「次世代 OPAC を巡る動向―その機能と日本での展開」『情報の科学と技術』58（１２）、602-9。
倉田敬子・三根慎二・森岡倫子・酒井由紀子・加藤信哉・上田修一（2009）「電子ジャーナルとオープンアクセス環境下における日本の医学研究者の論文利用および入手行動の特徴」『Library Information Science』61、59-90。

古賀崇（2017）「総論―日本におけるデジタルアーカイブのゆくえを探る―国際的動向を踏まえた，「より深い利用」に向けての展望」『情報の科学と技術』67（２）、48-53。
今野穂（2013）「札幌医科大学におけるディスカバリーサービスの開発」『大学の図書館』32（１１）、189-92。
齋藤卓男（2012）「EBSCO Discovery Service について」『オンライン検索』33（１・２）、4-11。
佐藤翔・安藤大輝・川瀬直人・北島顕正・塩崎亮・那珂元・原田隆史（2015）「ディスカバリサービスにおける絞り込みプロセス―国立国会図書館サーチのアクセスログ分析」『図書館界』67（４）、244-61。
サンメディア(2014 頃?)「Summon 2.0 でディスカバリーを楽しもう！ [リーフレット]」。
シルビス グレッグ・ニルジェス チップ・新元公寛（2013）「2012 年図書館国際セミナー―ディスカバリーサービスと未来の図書館システム―WorldCat Local と WorldShare」『薬学図書館』58（２）、116-32。
谷奈穂・竹内茉莉子・池尻亮子・丸茂里江・庄司三千子・國本千裕・白川優治（2016）「図書館における学生の行動とその行動に関係する環境の要素―フォーカス・グループ・インタビューによる探索的調査」『大学図書館研究』104、55-66。
寺島陽子（2013）「奈良女子大学附属図書館における EDS 導入事例」『大学の図書館』32（１１）、197-9。
寺島久美子(2020)「生き残るレファレンスライブラリアンになるには？」『大学の図書館』39（２）、21-3。
中世古亜希子（2012）「新しい検索サービス「国立国会図書館サーチ」―デジタル時代の「知」のアクセスポイントを目指して」『薬学図書館』57（２）、92-7。
中野雅子・矢吹明子・鰺坂由紀・吉田広美（2007）「看護学生が老年看護実習で体験した「転倒・転落」に関連するクリティカルインシデントの分析」『京都市立看護短期大学紀要』32、81-91。
長橋グッド広行（2008）「ウェブのユーザビリティ調査事例―ピッツバーグ大学」『情報の科学と技術』58（６）、285-9。
西川真樹子（2010）「米国ロチェスター大学での研究者・学生の行動調査」『カレントアウェアネス』303、12-4。
野末俊比古（2014）「情報リテラシー教育の「これまで」と「これから」―図書館における

いくつかの論点」『情報の科学と技術』64（1）、2-7。
林豊（2013a）「図書館・情報発見・目録について考えるための 13 の視点」『カレントアウェアネス-E』E1387（2017 年 6 月 21 日取得、http://current.ndl.go.jp/e1387）。
林豊（2013b）「ディスカバリサービスへのデータ提供で関係者が抱える課題」『カレントアウェアネス-E』E1393（2017 年 6 月 21 日取得、http://current.ndl.go.jp/e1393）。
林豊・大田海・堀優子・星子奈美（2015）「九州大学附属図書館の Web サイトに関するアンケート実施報告」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2014/2015、46-54。
林豊・大田海・堀優子・兵藤健志・星子奈美（2016）「九州大学附属図書館の 2015 年度 Web サービス改修プロジェクト」『九州大学附属図書館研究開発室年報』2015/2016、21-4。
原田隆史（2011）「進歩する図書館システム」『情報の科学と技術』61（5）、182-6。
平野覚（2010）「Primo―Discovery & Delivery」『薬学図書館』55（1）、60-7。
平野覚（2013）「プロダクト・レビュー―ディスカバリーサービス「Primo」の紹介」『薬学図書館』58（4）、319-33。
古永誠（2013）「プロダクト・レビュー―EBSCO Discovery Service(EDS)のコンテンツの特長について」『薬学図書館』58（2）、158-63。
兵藤健志・工藤絵理子・越戸陽子・牧瀬ゆかり・井川友利子・大村武史・片岡真・星子奈美・寺田良司（2010）「九州大学附属図書館における Cute.Catalog のデザインと開発―OPAC からディスカバリ・インターフェースへ」『情報管理』53（6）、311-26。
眞喜志まり（2014）「東邦大学メディアセンターにおける Summon(TOHO Search)の導入事例」『薬学図書館』59（3）、182-9。
馬淵沙織（2012）「ウェブスケールディスカバリーSummon(c)の紹介」『オンライン検索』33（1・2）、29-37。
馬淵沙織・長谷川智史（2016）「情報の電子化・図書館ネットワーク―ディスカバリーサービスの検索履歴から見るユーザー動向」『医学図書館』63（1）、12-6。
ユサコ（2017）「ExLibris Primo―図書館が扱う全ての資源の Discovery and Delivery [リーフレット]」。
渡邊隆弘（2009）「「次世代 OPAC」への移行とこれからの目録情報」『図書館界』61（2）、146-59。
渡邉怜・尾﨑亮典（2013）「神奈川工科大学における WorldCat Local の導入について」『大学の図書館』32（1 1）、192-5。

外国語文献（著者姓（ラストネーム）のアルファベット順）

・書籍

Flick, U. (2009) *An Introduction to Qualitative Research*, Sage.（＝2011、小田博志・山本則子・春日常・宮地尚子訳『質的研究入門―<人間の科学>のための方法論. 新版』春秋社。）

Foster, N. F., Clark, K., Tancheva, K., and Kilzer, R. (eds.) (2011) *Scholarly Practice, Participatory Design and the eXtensible Catalog*, (2011, Association of College and Research Libraries), UR Research, (Retrieved on January 9, 2020, http://hdl.handle.net/1802/12375).

Harvey, J. L., Anderson, L. E., Baranowski, L. E., and Morath, R. A. (2007) Job Analysis: Gathering Job-Specific Information. In D. L. Whetzel and G. R. Wheaton (eds.) *Applied Measurement*, 57-95, Lawrence Erlbaum Associates.

Vaughn, S., Schumm, J. S., and Sinagub, J. M. (1996) *Focus Group Interviews in Education and Psychology*, Sage.（＝1999、田部井潤・柴原宜幸訳『グループ・インタビューの技法』慶應義塾大学出版会。）

・論文等

Asher, A. D., Duke, L. M., and Wilson, S. (2013) Paths of Discovery: Comparing the Search Effectiveness of EBSCO Discovery Service, Summon, Google Scholar, and Conventional Library Resources. *College and Research Libraries*, 74 (5), 464-88, (Retrieved on February 23, 2018, https://doi.org/10.5860/crl-374).

Brett, K. R., Lierman, A., and Turner, C. (2016) Lessons Learned: A Primo Usability Study. *Information Technology and Libraries*, 35 (1), 7-25, (Retrieved on June 3, 2017, https://doi.org/10.6017/ital.v35i1.8965).

Calvert, K. (2015) Maximizing Academic Library Collections: Measuring Changes in Use Patterns Owing to EBSCO Discovery Service. *College and Research Libraries*, 76

(1), 81-99, (Retrieved on June 3, 2017, https://doi.org/10.5860/crl.76.1.81).

Chickering, W. F., and Yang, S. Q. (2014) Evaluation and Comparison of Discovery Tools: An Update. *Information Technology and Libraries*, 33 (2), 5-30, (Retrieved on June 23, 2017, https://search.proquest.com/docview/1547993777?accountid=10542).

Clark, M. L., McDonald, J., and Price, J. S. (2014) The Effect of Discovery Systems on Online Journal Usage: A Longitudinal Study. *Insights: The UKSG Journal*, 27 (3), 249-56, (Retrieved on June 23, 2017, https://doaj.org/article/d3a1dea8dfbb4b0da130be61262b055a).

Comeaux, D. J. (2012) Usability Testing of a Web-Scale Discovery System at an Academic Library. *College & Undergraduate Libraries*, 19 (2-4), 189-206, (Retrieved on January 8, 2018, https://doi.org/10.1080/10691316.2012.695671).

Deodato, J. (2015) Evaluating Web-Scale Discovery: A Step-by-Step Guide. *Information Technology and Libraries*, 34 (2), 19-75, (Retrieved on June 8, 2017, https://search.proquest.com/docview/1691586135?accountid=10542).

Fawley, N., and Krysak, N. (2014) Learning to Love Your Discovery Tool: Strategies for Integrating a Discovery Tool in Face-to-Face, Synchronous, and Asynchronous Instruction. *Public Services Quarterly*, 10 (4), 283-301, (Retrieved on July 28, 2017, http://dx.doi.org/10.1080/15228959.2014.961110).

Flanagan, J. C. (1954) The Critical Incident Technique. *Psychological Bulletin*, 51 (4), 327-58.

Gustavsson, J., and Karlsson, A. (2015) Web Scale Discovery Systems and Library Instruction: A Qualitative Study of Instruction Librarians' Practices and Their Perceptions of Discovery Systems' Impact on Students' Information Literacy at Three University Libraries. *[Högskolan i Borås, Akademin för bibliotek, information, pedagogik och IT]*, (Retrieved on July 7, 2017, https://eds.b.ebscohost.com/eds/detail/detail?vid=1&sid=acb788f5-2d84-4e2f-a48f-0d30c1560014%40sessionmgr102&bdata=Jmxhbmc9amEmc2l0ZT1lZHMtbGl2ZQ%3d%3d#AN=edsndl.oai.union.ndltd.org.UPSALLA1.oai.DiVA.org.hb-501&db=edsndl).

Hofmann, M. A., and Yang, S. Q. (2012) "Discovering" What's Changed: A Revisit of the

OPACs of 260 Academic Libraries. *Library Hi Tech*, 30 (2), 253-74, (Retrieved on June 10, 2017, https://doi.org/10.1108/07378831211239942).

Lown, C., Sierra, T., and Boyer, J. (2013) How Users Search the Library from a Single Search Box. *College and Research Libraries*, 74 (3), 227-41, (Retrieved on June 10, 2017, https://doi.org/10.5860/crl-321).

Lundrigan, C., Manuel, K., and Yan, M. (2015) "Pretty Rad": Explorations in User Satisfaction with a Discovery Layer at Ryerson University. *College and Research Libraries*, 76 (1), 43-62, (Retrieved on January 6, 2018, https://doi.org/10.5860/crl.76.1.43).

Mahoney, J., and Murray, S. L. (2012) Implementation of a Discovery Layer: The Franklin College Experience. *College & Undergraduate Libraries*, 19 (2-4), 327-43, (Retrieved on January 11, 2018, http://dx.doi.org/10.1080/10691316.2012.693435).

Nichols, A., Billey, A., Spitzform, P., Stokes, A., and Tran, C. (2014) Kicking the Tires: A Usability Study of the Primo Discovery Tool. *Journal of Web Librarianship*, 8 (2), 172-95, (Retrieved on January 13, 2018, http://dx.doi.org/10.1080/19322909.2014.903133).

Niu, X., and Hemminger, B. (2015) Analyzing the Interaction Patterns in a Faceted Search Interface. *Journal of the Association for Information Science and Technology*, 66 (5), 1030-47, (Retrieved on January 13, 2018, https://doi.org/10.1002/asi.23227).

Niu, X., Zhang, T., and Chen, H. (2014) Study of User Search Activities with Two Discovery Tools at an Academic Library. *International Journal of Human–Computer Interaction*, 30 (5), 422-33, (Retrieved on January 13, 2018, http://dx.doi.org/10.1080/10447318.2013.873281).

O'Hara, L. (2012) Collection Usage Pre- and Post-Summon Implementation at the University of Manitoba. *Evidence Based Library and Information Practice*, 7 (4), 25-34, (Retrieved on June 10, 2017, https://doaj.org/article/279d6f8b4aae426f9527b6d38fb3ae14).

Sahib, N. G., Tombros, A., and Stockman, T. (2015) Evaluating a Search Interface for Visually Impaired Searchers. *Journal of the Association for Information Science and Technology*, 66 (11), 2235-48, (Retrieved on January 13, 2018,

https://doi.org/10.1002/asi.23325).

Scott, B. T., and Reese, P. E. (2012) Academic Libraries and Discovery Tools: A Survey of the Literature. *College & Undergraduate Libraries*, 19 (2-4), 123-43, (Retrieved on January 13, 2018, http://dx.doi.org/10.1080/10691316.2012.697009).

Way, D. (2010) The Impact of Web-Scale Discovery on the Use of a Library Collection. *Serials Review*, 36 (4), 214-20, (Retrieved on January 13, 2018, https://www.tandfonline.com/doi/full/10.1080/00987913.2010.10765320).

Yang, S. Q., and Hofmann, M. A. (2011) Next Generation or Current Generation?: A Study of the OPACs of 260 Academic Libraries in the USA and Canada. *Library Hi Tech*, 29 (2), 266-300, (Retrieved on January 31, 2018, https://doi.org/10.1108/07378831111138170).

URL 等（引用順）

1．kitone（2014）「国内大学図書館におけるディスカバリーサービス導入事例のリスト」ささくれ　2014 年 4 月 13 日（2017 年 7 月 20 日閲覧、http://cheb.hatenablog.com/entry/2013/03/19/122041）。

2．国立国会図書館（2012）「立命館大学図書館、EBSCO 社のディスカバリサービス“EBSCO Discovery Service”を日本初導入」カレントアウェアネス・ポータル（2017 年 7 月 20 日取得、http://current.ndl.go.jp/node/21178）。

3．飯野勝則（2012）「ディスカバリーサービスとは何か? [大図研全国大会 2012（京都）]」大学図書館問題研究会ホームページ（2018 年 4 月 11 日取得、https://www.daitoken.com/research/annual_conference/2012/02/DS_1.pdf）。

4．University of Toronto Libraries (2019) University of Toronto Libraries (Retrieved on October 9, 2020, https://onesearch.library.utoronto.ca/).

5．Smith College Libraries (2019) Smith College Libraries (Retrieved on October 9, 2020, https://libraries.smith.edu/).

6．EBSCO Industries, Inc.（2018）「EBSCO Discovery Service―EBSCO が提供する Web スケール ディスカバリー　概要のご案内」EBSCO Japan ホームページ（2020

年 2 月 4 日閲覧、http://www.ebsco.co.jp/e-solution/about_eds.html）。

７．EBSCO Industries, Inc.（2020）「EBSCO Discovery Service」EBSCO 社ホームページ（2020 年 2 月 4 日閲覧、https://www.ebsco.com/ja-jp/products/ebsco-discovery-service）。

８．サンメディア（2011）「360 シリーズ―Summon」サンメディア社ホームページ（2020 年 2 月 4 日閲覧、http://www.sunmedia.co.jp/e-port/serialssolutions/summon/）。

９．ユサコ（2019）「Primo 商品詳細」ユサコ社ホームページ（2020 年 2 月 4 日閲覧、https://www.usaco.co.jp/product/detail.html?pdid=302）。

１０．紀伊國屋書店（2020）「WorldCat Discovery Services」紀伊國屋書店ウェブストア（2020 年 2 月 4 日閲覧、https://www.kinokuniya.co.jp/03f/oclc/wcd.htm）。

１１．総務省統計局（2020）「学術情報基盤実態調査」e-stat 政府統計の総合窓口（2020 年 8 月 16 日取得、https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400601&tstat=000001015878）。

１２．文部科学省（2020）「令和元年度学術情報基盤実態調査の結果を公表します」文部科学省ホームページ（2020 年 8 月 16 日取得、https://www.mext.go.jp/content/20200721-mxt_jyohoka01-000005810.pdf）。

１３．やわとしょ（2017）「アジアのトップ大学の図書館はトップページで何を検索対象にしているか？」やわらか図書館学　2017 年 3 月 27 日（2017 年 5 月 15 日閲覧、http://yawatosho.hateblo.jp/entry/2017/03/27/004932）。

１４．東京大学附属図書館（2020）「東京大学附属図書館」東京大学附属図書館ホームページ（2020 年 8 月 23 日取得、https://www.lib.u-tokyo.ac.jp/ja）。

１５.名古屋大学附属図書館(2019)「[2019] 12/17 〔データベース〕 Nagoya One Search の提供終了について」名古屋大学附属図書館ホームページ（2020 年 2 月 14 日閲覧、https://lws.nul.nagoya-u.ac.jp/news/ja/denshi/2019/191217）。

１６．立命館大学図書館（2020a）「立命館大学図書館」立命館大学図書館ホームページ（2020 年 8 月 23 日閲覧、http://www.ritsumei.ac.jp/lib/）。

１７．立命館大学図書館（2020b）「図書館ホームページのリニューアルについて」立命館大学図書館ホームページ（2020 年 8 月 23 日閲覧、http://www.ritsumei.ac.jp/lib/news/article.html/?news_id=766）。

１８．立命館大学図書館（2020c）「RUNNERS 立命館蔵書検索システム」立命館大学図書館ホームページ（2020 年 8 月 23 日閲覧、https://runners.ritsumei.ac.jp/opac/opac_search/?）。
１９．立命館大学図書館（2020d）「まとめて検索」立命館大学図書館ホームページ（2020 年 8 月 23 日閲覧、http://www.ritsumei.ac.jp/lib/b02/010/）。
２０．関西学院大学図書館（2020a）「大学図書館 Web サイトのリニューアルについて」関西学院大学図書館ホームページ（2020 年 4 月 5 日閲覧、https://library.kwansei.ac.jp/info/all/000136）。
２１．関西学院大学図書館（2020b）「関西学院大学図書館」関西学院大学図書館ホームページ（2020 年 8 月 23 日閲覧、https://library.kwansei.ac.jp/）。
２２．一橋大学附属図書館（2020a）「附属図書館ウェブサイトをリニューアルしました」一橋大学附属図書館ホームページ（2020 年 3 月 10 日閲覧、https://www.lib.hit-u.ac.jp/20200203/21030/）。
２３．一橋大学附属図書館（2020b）「BELL No.184」一橋大学附属図書館ホームページ（2020 年 11 月 14 日閲覧、https://hermes-ir.lib.hit-u.ac.jp/hermes/ir/sc/61752/bellno184.pdf）。
２４．東邦大学メディアセンター（2017）「東邦大学メディアセンター」東邦大学メディアセンターホームページ(2017年7月20日取得、https://www.mnc.toho-u.ac.jp/mc/)。
２５．東京慈恵会医科大学図書館（2017）「東京慈恵会医科大学図書館」東京慈恵会医科大学図書館ホームページ（2017 年 7 月 20 日取得、http://www.jikei.ac.jp/academic/micer/toshokan.htm）。
２６．金沢工業大学ライブラリーセンター（2017）「金沢工業大学ライブラリーセンター」金沢工業大学ライブラリーセンターホームページ（2017 年 7 月 20 日取得、https://www.kanazawa-it.ac.jp/kitlc/index.html）。
２７．THE (2017) World University Rankings 2016-2017 (Retrieved on September 15, 2017, https://www.timeshighereducation.com/world-university-rankings/2017/world-ranking#!/page/1/length/25/sort_by/rank/sort_order/asc/cols/stats).
２８．林豊（2013）「最近の OPAC の動向―次世代 OPAC、ディスカバリーサービスを中心に．2013 年度岐阜県図書館・岐阜大学図書館研修会（2013.11.8）」岐阜県図書館ホ

ームページ（2019 年 10 月 5 日取得、
http://www.library.pref.gifu.lg.jp/library/kenshu/handout20131108_1.pdf）。
２９．kitone（2017）「学術情報ソリューションセミナー2017 in 福岡「WALK ON THE WILD SIDE～正解からの解放～」」ささくれ　2017 年 7 月 28 日（2019 年 10 月 14 日閲覧、http://cheb.hatenablog.com/entry/2017/07/28/210226）。
３０．法政大学（2019a）「図書館利用ニーズ Web アンケート調査結果について（速報）」法政大学ホームページ（2019 年 7 月 5 日閲覧、
https://www.hosei.ac.jp/library/NEWS/jyuyo/190315_01.html）。
３１．法政大学（2019b）「法政大学図書館」法政大学ホームページ（2019 年 7 月 5 日閲覧、https://www.hosei.ac.jp/library/index.html）。
３２．大谷周平（2013）「ディスカバリーサービス Summon の検索ログ分析」第 30 回医学情報サービス研究大会ホームページ（2020 年 1 月 9 日取得、
http://mis.umin.jp/30/program/ab/b01.pdf）。
３３．国立大学図書館協会 図書館システム検討ワーキンググループ（2007）「今後の図書館システムの方向性について」国立大学図書館協会ホームページ（2019 年 9 月 22 日取得、http://www.janul.jp/j/projects/si/systemwg_report.pdf）。
３４．[文部科学省] 科学技術・学術審議会 学術分科会 研究環境基盤部会　学術情報基盤作業部会（2010）「大学図書館の整備について（審議のまとめ）―変革する大学にあって求められる大学図書館像」国立大学図書館協会ホームページ（2019 年 9 月 22 日取得、http://www.janul.jp/j/documents/mext/singi201012.pdf）。
３５．[文部科学省] 科学技術・学術審議会 学術分科会 学術情報委員会（2013）「学修環境充実のための学術情報基盤の整備について（審議まとめ）」文部科学省ホームページ（2019 年 9 月 22 日取得、
http://www.mext.go.jp/component/b_menu/shingi/toushin/__icsFiles/afieldfile/2013/08/21/1338889_1.pdf）。
３６．国立大学図書館協会（2016）「国立大学図書館協会ビジョン 2020」国立大学図書館協会ホームページ（2019 年 9 月 22 日取得、
http://www.janul.jp/j/organization/regulations/janul-2020vision_pamphlet_non-spread.pdf）。
３７．文部科学省（2017a）「資料 4-1 第 9 期学術情報委員会の審議事項について（案）」

文部科学省ホームページ（2019 年 9 月 22 日閲覧、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/040/attach/1384572.htm ）。
３８．文部科学省（2017b）「第 9 期学術情報委員会　議事要旨・議事録・配付資料」文部科学省ホームページ（2019 年 9 月 22 日閲覧、
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/gijyutu/gijyutu4/040/giji_list/index.htm）。
３９．同志社大学図書館（2019）「図書館概要―図書館のあゆみ―図書館の発足 2009–」同志社大学図書館ホームページ（2020 年 1 月 11 日閲覧、
https://library.doshisha.ac.jp/guide/outline/history/2009.html）。
４０．日本学術振興会（2016）「平成 29 年度　系・分野・分科・細目表」日本学術振興会ホームページ（2018 年 4 月 1 日閲覧、
https://www.jsps.go.jp/j-grantsinaid/02_koubo/saimoku.html）。

謝辞

本研究では、15 名の方にインタビューさせていただき、予備調査の際にも 14 名の方にインタビューさせていただきました。お時間を頂戴し、協力いただいたことに感謝申し上げます。

本研究に関して、終始ご指導ご鞭撻をいただきました本学原田隆史教授に心より感謝致します。

田村俊作 慶義塾大学文学部名誉教授には、リサーチクエスチョンの精査、結果のまとめ方など、時機に応じて何度も研究の指導をしていただき、大変お世話になりました。田村名誉教授と共に、池谷のぞみ 慶應義塾大学文学部教授には、同大学での通称「院ゼミ勉強会」に複数回参加させていただき、発表の機会も頂きました。参加者の皆さまからも貴重なご意見を頂き、リサーチクエスチョンの精査を後押しいただきました。感謝申し上げます。

佐藤翔 同志社大学免許資格課程センター准教授、同志社大学良心館ラーニング・コモンズのアカデミック・インストラクター（当時）の浜島幸司准教授には、特に手法の立案の段階で貴重な助言を頂きました。感謝申し上げます。

佐藤翔准教授、高久雅生 筑波大学図書館情報メディア系准教授には、本稿のドラフトに対してコメントを頂きました。感謝申し上げます。

立教大学図書館の原修氏には、WSD の導入機関について情報共有や情報交換をさせていただきました。感謝申し上げます。

同志社大学 総合政策科学研究科 図書館情報学コースのゼミ生・修了生の皆さまにも、研究のそれぞれのタイミングでアドバイスいただいたことに感謝申し上げます。本稿のドラフトができたタイミングで文章をチェックいただき、コメントや誤字脱字の指摘を頂いた友人知人各位にも感謝申し上げます。また、直接・間接に私の研究にアドバイスや応援いただいた多くの方々に、心から感謝申し上げます。

最後に、本研究科在籍中に大きな手術を受けた私に対して、特に「食」の面から心身を支えてくれた両親に改めて感謝いたします。